道後湯之町誌

煎餅等を商へり松山貯蓄銀行は此地に代理店を設く

名勝舊蹟 温泉之石 圓き方直徑二尺五寸 平き方長六尺 幅三尺五寸 厚地上に現れ居れる分一尺二寸

温泉開基の地にありて太古大巳貴命少彦名命と共に國土を經營せんとして諸洲を周遊し此地に至るの時疲かりて大巳貴命卒かに息絶ゆしかば少彦名命大に驚き温泉に浴せしめしかば忽ち蘇生し傷の石に據ると之れを霊の石と稱して周圍に瑞垣を設け堅く不淨を禁ず今神之湯第一室の前面にあるもの是なり

温泉碑 推古天皇四年十月聖德太子葛城臣及高麗の僧惠慈惠聰法師等を將ひて道後温泉に行啓して大に湯の霊驗を歎稱し其事を勅して伊佐爾波岡に建つる所のものたり然るに白鳳十三甲申歳十月四國大地震の際温泉壅塞し其に碑も亦土中に陷沒す爾來地方の有志百方搜索すと雖も今尚其所在を得ず其文の釋日本記に載するもの左の如し

温泉碑

法興六年十月歳在丙辰我法皇大王與惠聰法師及葛城臣道嶋夷與村正觀神井歎世妙驗欲叙意聊作碑文一首

惟夫日月照於上而不私神井出於下無不給萬所以機妙應百姓所以潛靡若乃照給無偏私何異于春國隨革臺而開含沐神井而懷珍距外于落花池而化溺窺望山嶽之巍峨反冀子平之能往眷樹相寢而寄靡一本實相五百之張盖臨朝啼鳥而戚吐下何曉亂昔之聒耳丹花卷葉映照玉菓弱蔕以垂井經過其下可優游豊悟洪濫雨底意與才拙實慚七步後定君子幸無微蜚咲也

道後温泉碑

温泉場の東丘振鷺園に在り明治二十年五月舊松山藩主久松勝成公の建る所にして初め温泉場西仙にありしを同廿五年十一月之を此處に移す南郭服部元橋の撰文にして雪城中澤俊郷の書に成れり又碑陰に古賀卓の書に成れる藤野正啓の文あり

道後村誌

湯溪

冠山の南麓御手洗川の畔にあり往古より道後十六谷の勝地として最有名のものたりしが河野家滅亡の後漸次荒廢に歸し唯名稱の存せしのみなりしを天保年中松山藩士大高坂舍人(號天山)此地を拓き亭を營み五湖壤宝と呼び自ら樂む天山歿後自然の荒廢に任せしを明治十七年に至り道後湯之町の有志輩其名跡の湮滅せんことを嘆き其遺趾に就き點々二十餘亭を設く綠陰深し清流潺湲として境中の景物雅潔俗腸を洗ふるに足る

沿革 明治廿二年町村制施行の爲め道後一万持田石手の四ヶ村を各大字として道後村を設くると同時に道後の一部たり湯之町を割きて道後湯之町を設く又明治三十二年に至り村境變更の爲め温泉郡御幸村の内大字祝谷を當村に編入せり

位置及境域 當村は温泉郡の中央にあり東北は中に道後湯之町を挿して山を負ひ湯山村伊台村と境を接す西北は潮見村に東南は石手川を隔てゝ桑原村素鵝村に對し西は松山市及び御幸村に隣る

廣袤 東西三十六町 南北三十六町

面積 五百四十四町五段四畝六歩にして内譯左の如し

田 二百六十三町八段四畝廿七歩

畑　三十一町一段五畝五歩

宅地　十八町三段九畝十歩

雑種地　三十町四段九畝廿二歩

地勢　土地概ね平坦なり然れ共高縄山の餘脈北部より來り當村と伊豫湯山兩村との境界をなして南東に連亘し石手の河流は東南の境界として流るゝあり故に東北部稍高く西南部に及びて低し

山誌　當村の東北道後湯之町の背後即ち伊豫村及び湯山村と境界を接する山岳を道後山と總稱す（直立未詳）火成岩にして花崗石石英閃綠岩及び斑岩を含む岩層なり

伊佐爾波岡（又誘庭）は道後山の東南に突出せる部分にして高さ十七間二尺現今伊佐爾波神社を奉祀する所を云ふ

石切谷　は道後湯之町溫泉場より敷町東北に上れる山間を云ふ往古は樹木鬱蒼として晝猶暗く一時炭竈の設けありしが爾後樹木を伐採し夥多の石材（花崗石）を切り出せしことあり谷の名稱は蓋し之に基けるなり

鶯谷　は道後湯之町溫泉場北山麓大禪寺に至る間を稱す上古地震の激變に遇ひ溫泉の所在を失することゝ久しかりしが一鶯の其脛を傷ふもの朝夕來りて溪水に濯し日を累ねて癒ゆるを得振々群を追ふて去る觀るもの之れを奇異とし其所を堀鑿し再び溫湯の泉源を探究して浴地終に舊に復するを得たりと地名は即ち之に因せるなり

柿の木谷　は伊佐爾波岡の南義安寺の後の小谷を云ふ往古柿本人麿庵室を營み病癘を療せしに因り名づく

水誌　石手川は當村の東南を繞り兩岸は堤防にして松林繁茂し大字石手附近の北端には櫨樹を生せり

御手洗川は石手川の支流にして大字石手を貫流し大字道後に來るもの之を道後川と稱す其分派伊佐

爾波神社の馬場を横流せる所を御手洗川といふ清流掬すべし

氣候　一ヶ年中溫度の最高は二十度にして最低は十度なり風位は北西にして最强（八月二十七「メートル」）一ヶ年平均二「メートル」三なり

地質　平坦部は第四紀層に屬するものにして各部落多少の差違あれども壤土及び埴土其多分を占め一言すれば埴埴土とも稱すべし

人情風俗　（イ）氣質　當村は或は松山市に接近するを以て素朴の氣風を飲で交際圓滑なり各部落には惣代を設ける事を著實に處理しつゝあるを以て村民些の苦情なし且緊要の時機に際しては或は協同事に當り勤儉にして利潤を圖る農產事業には殊に心を注ぎ著々改善の道を講じつゝあり

（ロ）禮法　禮法に付ては世間普通のものにして此に特記すべきものなし

（ハ）言語　質朴にして訛言等甚多く殊に新平民種族間に使用せるものゝ如きは往々其意を解すること能はざるものあり然れども是等も近來普通の村民との交際により漸次改良に向いつゝあり

（ニ）習慣　封建時代の舊慣猶存し又春時接待と稱して四國禮拜者に食物其他の物品を施與す又獅子雜蟲祈禱等の舊慣行はる

（ホ）衣食住　（一）服裝は普通なり　（二）食物常食は四食にして一般に質素なり　（三）家屋は普通の構造にて日に改築の趣あり

教育　（一）道後尋常小學校　道後村大字道後字柿の木谷にあり明治二十五年十月道後村と道後湯之町との組合を以て創設す明治初年より町村制實施までは伊佐爾波神社附屬の社殿を借り之に副築を施し場月小學校と稱し町村合同のものなり而して當時大字石手寺田地本二十四番地と

就學することゝなれり爾來區内兒童の就學するもの益々多く到底本校へ収容すること能はざるに至り一部分を分ち其二個學級を假教場に移せり

(二)湯渡高等小學校　湯山桑原素鵝道後湯之町及び當村の五ヶ町村の組合學校にして道後村字湯渡にあり明治三十三年十二月の創設たり然れとも就學兒童は年一年に其數を增して教室の狹隘を告げ明治三十六年五月增築を施すに至る現今七學級三百二十一人の男女兒童あり

(三)　大字持田に縣立農業學校及び縣立商業學校あり一は明治三十三年一は明治三十六年の創立に係る

衛生　隔離病舍には當番を置き屋舍の内外を清潔になさめ消毒用器具は病舍器械室に設備しあるを以て何時患者あるも容易に收容することを得病室は各室分割しありて重患輕患死亡と其他患者平治の度に應じ漸次其室を異にし再び增發の患ひを豫防し退舍の場合は病室患者看護人等の消毒は嚴重に實行し浴湯の設けあるが故に沐湯の上歸宅なさしむることゝせり又衛生組合を設け委員常に區内の清潔法に注意し傳染病豫防委員と共に部内を檢視し必要と認むる時は臨時の清潔法を實行なさしむ傳染病豫防法は成規の通り實行し飲食物の不良其他不攝生の所爲なき樣主要の事項を印刷に付し各戸に配付せり

警察署　松山警察署道後分署の管轄區内に屬し大字石手に巡査駐在所の設置あり

宗教　未詳

神社佛閣　伊佐爾波神社は伊佐爾波岡に鎮座す延喜式内の神社にして比賣大神譽田別尊足仲彦尊息長足姫命を合祀せり河野家系に河野元興之を建立じて道後七郡の守護神となしたりと云ふ明應年間河野刑部大輔道宣再建し累代湯月城の守護神として崇敬し亦慶長年間加藤左馬助嘉明社殿を修す其後寛文七年松山城主松平隱岐守定長深く當社を尊信し飛騨の良匠を招き山城石清水に倣ひ社殿全部を改造し神殿廻廊瑞垣樓門其他一切の建造物悉く華麗の彫刻色彩を施し莊嚴善美を盡せり此時旗幟弓鎗刀劍甲冑等の寄進あり爾來當社に奉納の武器其他百般の器は夥多に逸あらず今數百の什寶中著名なるものを記せば左の如し

一聖武天皇　後柏原帝　後陽成院　後土御門院　光明皇后の宸翰　三冊

一孫武子の卷　二枚

一宣宗皇帝額

一時鳥香

一輪光琵琶

一吉光の短刀

一國光の短刀

附記す當社は往古伊佐爾波神社中古湯築大神近代湯月八幡宮と稱せしが明治三年伊佐爾波神社と復舊せしなり

大山積神社　は大字石手字中筋に在り弘安二年河野對馬守通有蒙古來寇の時越智郡宮浦村大山積神社に祈る處あり然れとも風波の難を患ひ同神社の末社十六座の一を此地に勸請せしなり又石手寺境内にあり熊野權現十二社を明治三年神佛分離の令ありし際此社に合祭せり

東照宮　は大字祝谷常信寺の西丘に在り松山城主松平定行の勸請なり當時社殿の造營計畫を爲せしも幕府の危許を得ざる爲め私に小社を建設し歲時祭祀を營みつゝありしが文久年間大に工を起し社

殿等の造營をなし三年にして全く成る其結構莊麗を極む

客天神社　は大字祝谷字山崎にあり延喜の昔菅公筑紫に左遷の時上陸ありて暫時滯留ありし地なり依て客天神と號す明德四年河野通能之を再建し加藤嘉明の修繕ありしことは舊記に存すれども其創立の年代詳ならず

石手寺　は大字石手にある巨刹にして四國禮拜場の一たり古は虛空藏院安養寺と號す神龜五年聖武天皇の勅願所として創營す其後天平元年三月國司越智玉澁之を再建し行基律師藥師佛の像を自作安置す三重塔鐘樓念佛堂閻魔堂藥師堂山門二王門等あり就中三重塔鐘樓二王門は其建築の古雅を以て名あり弘仁四年空海上人留杖ありて眞言宗に改む寶平四年三月三日散位河野息利熊野十二社權現の宮殿及び六十六坊を建營し文中三年春覺理法王の潛行あり即ち藥師堂の傍にある回車樓と稱するものは其紀念となれるものなり又山門前に源頼義の墓碑あり什寶には太古の石劍國司の式目後醍醐天皇の勅書足利家の敎書空海及び一遍上人等の筆蹟等あり陰曆三月及七月廿日廿一日は賽客殊に多し

義安寺　は道後公園の東戒能谷にあり天文八年河野彦四郎義安の創建たり本尊は釋迦の座像にして寺内に行基作の藥師唐製の觀世音を安置す安政三年五月廿九日雷火の災に罹り當寺に關する總ての古文書河野家代々の位牌及び寄附狀等盡く灰燼に歸す今詳細なる傳記の憑るべきなし堂後の山腹に古色蒼然たる一基の墓あり河野義安の祖父伯耆守通時弘安四年七月蒙古退治の頃河野對馬守通有得能備後守通純等と共に力を盡し筑紫の海に名譽の戰死を遂げ其遺骸を埋葬したるなりと

竹之宮地藏尊　は大字持田西龍寺内に安置す像は定朝の作にして京師壬生寺の地藏菩薩と一株分身なり一書に云ふ昔辭河野氏の一族に竹之宮官主なるものあり或る時居邸の一隅を掘り一の石像を得依て堂を營み此に之を安置すと又偶々官主の室娠めり其安產を祈り且貧乳なりしかば其多汁ならん事を願ひしに何れも其驗あり而して其報賽毎々炙豆稭枝等を供へけると今尙詣者之を捧るものあり

市隱軒東照寺　は道後公園の西門前に在り本尊は觀世音菩薩春日の作といふ天文十三年二月七日河野彈正少弼道直の入道するや其室綾子も亦剃髮し月海智印禪尼と號し此處に一宇を設けて閑居し天正元年十月十八日遷化す寺内の五輪塔は即ち是其墓なり

常信寺　は大字祝谷字田高に在り初め弘眞院勝山寺と號し松山に在りしが松山城主松平定行松山城の鬼門鎭護の爲め平安の比叡東武の東叡に擬して此地に移し眞言宗を改めて天臺宗となす寺内に定行の遺骸を葬れる廟あり眞常院殿と號す又寶曆五年一宇の堂を建設す元三大師堂と稱し祈願の院となす現今久松氏の廟所たり

大禪寺　は大字祝谷鷺湯にあり昔時此谷に烏越山鷺谷寺と號する一宇の堂ありしが漸く衰頽に歸するや元錄九年八月支那の僧千呆千秋寺より此に退隱し之を再興して鷺谷山大禪寺と改め唐佛の觀音像を安置す什物には千呆和尙の畫像十八羅漢及釋迦如來の幅あり門内に一櫻樹あり簑毛と名く大休和尙の手植なりと云ふ

交通

道路　本村の道路は大字祝谷より伊盛村に通ずるものと全潮見村に至るものとは勾配稍々急なれども他は何れも平坦にして車馬の來往物貨の運輸極めて便なり今調査せる處の縣道及び里道左の如し

縣道　道後街道は松山市小唐人町三丁目に接せる道後村大字持田と全一万との境界より起り大字道後の中央を縱斷して道後湯之町に至る長十一町幅九尺乃至一丈五尺あり

里道　湯山街道は松山市唐人町一丁目より石手川北堤防に沿ふて大字石手を經湯山村に至る長十三町幅一丈二尺乃至一丈五尺あり

石手街道　は一は大字石手より道後湯之町に至る長五町幅六尺のものと一は道後公園に迂回し縣道に連絡せる長六町幅七尺乃至八尺のものとあり

湯渡道　は大字道後道後公園の南石手街道より正南に向ひ石手川堤防に進し桑原村に通ず長六町幅

町村郡

四尺乃至六尺あり
持田道は大字道後の縣道東端より西南大字持田を經て松山市唐人町及び御寶町に至る長十町幅四尺あり
三津街道は道後湯之町縣道より西に出で大字道後の北側を正西に松山市木屋町に入る長十六町幅九尺あり
伊臺道は道後湯之町縣道より三津街道に出で大字祝谷を經て伊臺村に至る長十八町幅六尺乃至八尺ありて舊道新道の二あり
山田道は大字祝谷を經て潮見村に至る長十八町幅四尺乃至六尺あり
山越道は大字萱万の東端縣道に連れる所より正北に通じ大字祝谷の一部に入り正西に下り御幸村に入る長十四町幅六尺乃至一丈二尺あり
本村より官衙及び町村役場への方位距離左の如し

縣廳へ	西南	十五町	溫泉郡役所へ	西南	十八町
湯山村役場へ	東北	三十三町	桑原村役場へ	正南	十八町
素鵝村役場へ	南西	十八町	御幸村役場へ	西北	十八町
伊臺村役場へ	東北	三十六町	道後湯之町役場へ	東北	五町

橋梁　道路橋は大字石手石手寺の前面二町の所即ち石手川の本流に架せるものにして四國靈場禮拜者の要路に當れるを以て此名稱あり構造は舊式の木造にして長十五間幅二間二尺古來既に數回の改造修繕をなし今や殆んど朽破に歸し又車輛牛車の通行に堪へざるに至れり
鐵道　伊豫鐵道の道後線朝美村大字味酒なる古町驛より松山市木屋町驛を經由し道後村大字道後の北部御幸村との境界に沿ふて道後湯之町の西南端（道後驛）に達し轉して大字道後及持田の西部を通過して松山市御寶町西端（二番町驛）に至る總哩數三哩廿二鎖の線路あり生業農業農產物の種類及產額左の如し

米	四千三百廿八石	麥	三千百二十石	豆	百十八石
木棉	四石	蠶繭	六百石	甘藷	三千貫
野菜	五十万貫	柑類	九百五十貫		

林業　山林樹木の種類は松樅檜等にして天然生なり伐採約五万貫其用途は多く薪材とし販路は松山市及道後湯之町等にして車馬の便を假り運搬をなす
工業　大工石工瓦工等の職を營むもの二三散見すれども別に工場の組織產額及販路等記すべき程の狀況なし
舊蹟　第十四代仲哀天皇后息長足姫（神功皇后）の行在所現今の伊佐爾波神社石鹿の中間を右折したる山坡にあり

峰村誌

桑原村誌

沿革　立花上村上久米村に至るの間を桑原郷と稱ふ時代明かならず然れども村上天皇の御代に此稱ありしことは史に明かなり德川時代には東野、正圓寺、畑寺、桑原、三町、新百、松末、榕味、小坂、枝松、中村の十一部落を總稱して桑原郷と云ひ各庄屋を置きて事を司らしむ明治初年に至りては區長後には戶長を以て事を成されたるが町村制實施以來東野、正圓寺、桑原、松末、三町、榕味、畑寺、新百を一統して桑原村と稱し各を大字とす桑原の村名は此近傍を桑原の郷と稱へしに因ると云ふ

桑原村誌

大字桑原は昔桑原宗賢以下數代の居城地なりし故に名づく

大字松末も亦松末氏數代の居城を定めし所なりしを以て名づく

大字東野は万治二年勝山城主隠居所を定め給ひ新田を開き農民を集め給ひし所なるが桑原郷東邊の野なるを以て斯名づけしと

大字新百は藩主江戸入の際人夫を東野近邊の農家の次男より取られしが此等の歸りて後此地方に村をなせしものにて他村に比して最も新しき百姓なればとて此郷をなせり

大字正圓寺は正圓寺の所在地なるを以て寺名を取りしものなり其他の大字に至りては名稱の起因詳かならず

位置及境域　本村は温泉郡の中央より稍南に偏りたる東邊の一村にして東中央の凸角點より東北隅に至る上地は湯山村と境を接し東南角大字畑寺山地は東方凸角に近き所に於て小野村に牟田池に近き所に於ては久米村に境を交へ大字東野の北方は直に湯山村大字石手より持田に至る間の界をなせり西は石手川北西を流れて東野の西部より大字樽味と道後村大字石手に連り石手川は村の支流草葉一の井手を以て素鵝村大字枝松に接す南は牟田池より大字松末の西南に至る境界線にして久米村大字福音寺に隣れり

廣袤　本村平面の形狀東方の凸角を上とせば恰も不完全の六角形をなし其廣き所東西一里六町南北二十五町餘あり

面積　本村の總地積は四百四十五町八段四畝八歩にして其の内譯は左の如し

田　四百三十四町四段三畝十三歩

畑　十五町二段三畝四歩

宅地　十五町七段七畝十四歩

山林　百四十八町七段五畝二十歩

原野　二段九畝十一歩

池沼　十一町三段五畝六歩

地勢　本村は東邊中央に頂角をなせる三角形の山地あり東北隅の山地は湯山村と境して字東野の上分を山の麓となす東方中央の凸角より牟田池の所在点に至る間は小野村及久米村に境して西南に向ひ大字東野の南部より畑寺の西北桑原の東隅に至る東北より西南に傾斜する十六町強の高地あり

山誌　石槌山支脈の北に走るもの所謂中山々脈分岐して湯山村の東部を南走し本村の東方に來りて盡く其脈中本村にありて名あるは三本松峠、牟田峠、淡路が峠等なり何れも高さ五百尺に及び昇降甚嶮峻なり地質は赤黄色の脆き岩石又は其の粉末より形成し地味磽瘠にして唯松、羊齒の類を生ずるに過ぎず

水誌　石手川は湯山の山間より出で本村の西北境を流る其沿岸僅に八町餘にして素鵝村に入る此川本村に來りて始めて平野に出でし所なれば彼の長堤も亦此に始まれり

本村の水利は河水池水の二途に執る各灌漑區域は概ね左の如し

市の井手堰は湯山村字高野に始る石手川堰の第一位を占め水利最も便なり其の灌漑區域は東野の低地、正圓寺の大部樽味の全部桑原新百の全部畑寺の一部三町の全部に及ぶ此井手は井手若狹の守の考案測量に係るを以て灌漑内の農夫は其德を尊び祠を建て之を祭れり

草葉井手は堰口を湯山村字溝邊に發す石手川第二の堰なるを以て水利市の井手に亞ぐと云ふ用水地域は本村字松末全部及素鵝村の大分部にして其配分の廣さ殆んど市の井手に伯仲す其他大字樽味に小坂井手あり

一番池は三本松峠と牟田峠との山谷に築きたる大池にして池周六十間深さ六間餘あり之に二番池の

水を合し東野の高地正圓寺の一部凡二十一町歩餘の田面を潤す浦山池は東野山の麓にあり東野の高地六町歩の用をなす

寶田池は一番池の南方凡一町の下方にあり畑寺地方の山田四町歩の爲に啟く

牟田池は畑寺奥の山谷にあり一番池に亞ぐ大池にして水面一町歩畑寺の西方十六町歩の用水に供す

其他三町池繁多寺池左右御山池蓮池等二三町歩の田面用に築きたるもの多し

氣候　嚴寒最低の時に於ては攝氏の零度に及び炎暑最高の時に於て三十五度に達す年中平均約十四度なり夏時の驟雨は東北湯山に近き地に多く西南に少し其平野に來るものは遙に西南伊豫郡砥部地方より降り來るを常とす風は朝東夕西より吹くを常とし夏季の夕刻に於ては湯山風と稱して東北より涼を送り暴風雨は常に東南西南より來る

地質　本村の地質は東野山及畑寺山より桑原竹の宮高地に達する一帶の地皆長石の粉末よりなり畑寺に於ては赭色の粉土に富み、三町は黑色の粘土を交ふ東野も又赭色の長石粉末より成り是を前二部落に比すれば質粗にして耕作容易なり正圓寺は埴土にして樽味は砂土多く桑原新百は壇土を頗はし松末は本村中の低地にして埴土たり成分土に於ては山地に近き東野畑寺三町は窒素質不足し其他は樽味を除きて燐質減耗し殊に大字桑原の南部及松末にありては加里質欠乏せり

山　**天産物及其分布**　本村所產の天然物を觀察するに東野山は近邊稀なる良山地にして表土深く松杉地に適し土二十年巷を入れざれは建築良材を多く得らるへし畑寺山は表土淺く山林を仕立つるに適せす而も石材の採掘あり庭樹盆栽等として愛すへきもの多く生す表土以下は長石粉末の砥土層なれば往古冤の製造家多く彼の松山城の如きは悉く東野及桑原等にも製出せし所謂御天主冤の根本地とす然れとも今や東野畑寺に一二の製造家あるのみ

水

區劃及政治　本村を大別して八大字とす藩政時代には今の大字は獨立の村なりしが維新後或は合併し或は

分離し變更屢なりしか町村制實施に當り有力なる村を組織せんが爲め前の八箇村を集合して今の桑原村を編制し從前の村名を大字に襲用す各字の地積は實に左の如し

東野	六十五町八段三畝二歩	正圓寺	三十二町一段四畝八歩		
樽味	二十五町四段七畝三歩	新百姓	十五町八段五畝十六歩		
桑原	七十七町六畝九歩	松末	二十三町一段七畝十七歩		
畑寺	三十五町八段九畝廿二歩	百七十九町三段二畝一歩			

村役場は本村の中央部なる大字桑原に置く村會議員は拾貳名にして各大字より撰出す村是調査は未了に屬せりと雖着々進歩改善の域に近つき居れり

戸數　全村の戸數は三百七十六にして各大字に區分せば次の如し

東野	八拾六戸	正圓寺	五拾六戸	樽味	六拾三戸
新百姓	十一戸	松末	拾六戸	三町	二拾六戸
桑原	六十戸	畑寺	五十八戸		

人口　之を族籍職業に區分せば士族百四十七戸平民二百五十九戸商業二戸工業一戸北條は皆農業なり

人口の總數二千三百八十にして內本籍人男千百三十七女千百十四寄留民男七十二女五十七人なり

人情風俗　氣質は概順朴にして虛飾なしと雖博愛の情に乏しきやの感あり又勤勉節儉等の私德に富むと雖國家社會の如き公德に至つては猶全からす近來諸部落規約を結ひて朝起の習慣を養ひ共同團結して貯金をなす美德あり言語は松山市と大差なしと雖語調少し〻緩慢に失し語尾を延長するの癖あり方言亦少からす吉凶には隣保集合して相喜び相憐むの古風を存せり衣食住は凡て質素を旨とし且家族間又は近隣間に行はる平素の禮儀作法は甚簡畧なりと雖禮儀の眞意ある愛敬を欠くことなし

教育　本村に尋常小學校一つあり校舍を大字桑原に置く明治三十六年の新築に係り構造最も新規なり通學區域は十四五町を出です高等小學科生徒は道後町外四箇村の組合よりなれる湯渡高等小學校へ通

學せり

衛生　避病舍は大字桑原原の峠に築く建物壯美を盡さすも雖頗る堅牢にして空氣の流通光線の射入飲料水の佳良等最も適當せり

衛生組合を設け各大字に委員二名を置き村長之が委員長となりて之を統べ定期清潔法及び臨時傳染病豫防方法を設け之を實行す常に消毒法藥品の備付等相當の注意を拂ひ居れり

警察及裁判所　松山警察署の區域に屬し一の駐在所を桑原に設け警察事務を行ふ裁判所管轄は松山區裁判所なり

宗教　宗教は一般に佛教を奉し就中眞言宗を信するもの多しと雖其信仰の度は甚冷膽なるものなり其他一二の天理教信者あり

神社佛閣　鄉社桑原八幡大神社は祭神譽四別尊足仲彥尊鳥長足姫尊姫大神の四神なり本社は清和天皇貞觀元年四月勅許を以て創建せらる延久三年八月伊豫守源頼義再建す但し創建の際は桑原鄉古宮に鎭座ありしが寛治二年今の地に遷宮あり元弘三年四月十一日兵燹に罹りて神堂社記悉く燒失す天授二年八月十五日左小將伊豫守通定之を再建す天文十一年八月十五日再建正德五年石の鳥居を建立す爾來祭祀益盛大なり

村社三島大明神社　は畑寺一丁地にあり大山積、雷、高龗の三神を祭る本社は聖武天皇神龜五年八月廿三日勅令を以て創建す其奉行者は國司河野伊豫守越智宿禰なりき延久三年源頼義再建し弘安三年河野通有又再建す文中三年四月兵燹に罹り神器寶物燒盡す天授二年八月伊豫守左少將通實再建寶曆十二年火災に罹り又神寶社記を失ふ寶曆十二年十一月廿九日再建成り式を行ふ藩藩主松平定行受封の後桑原鄉東野へ別莊を起され万治三年二月移徙ありしより當社を崇敬せられ紋附の提燈なを奉納ありたり

律宗繁多寺　は大字畑寺にあり孝謙天皇の勅願所にして天皇御幡を納め給ひし因により幡寺と稱へしが後繁多寺と文字を用ひしと云ふ本尊は藥師如來にして僧行基の手刻に係ると歡喜天（俗に聖天と云ふ）ある信徒甚多し延久年間伊豫守源頼義國務の時に權守河野太夫親經命を請ひ祠堂を建立す文中三年四月十一日賊將大兵を率ひ來攻し本寺を燒き寶物記錄大抵滅亡せり天授二年八月八幡神社及三嶋神社と共に新築落成したり寶物として三代將軍德川家光の寄進せる黃金佛像あり

井手神社　は大字桑原にあり往昔此地方荒野多く壞田のみなりしが松末美濃守の旗下に井手若狹守なるものあり賢明忠良の臣にして曾て謂へらく農は國の本なり此の地開墾せざるべからすと依て美濃守の許可を得石手川の水を引き養水灌漑し良田百四十八町を開く是れ即ち現今の東野正圓寺樽味桑原畑寺松末三町及久米村の大字福音寺の地なり村民其功績を追懷し厚く之を祭り井手神社と號す

各種團體　水利組合會なるものあり本村と外數箇村の申合より成る其目的とする所は專ら堰井手の改良を計り配水の公平を保つ等にして其農業上に便利を與ふる事實に少なからす

其他兵事支會學務委員會農會青年會を設く

交通

（一）道路　金比羅街道は愛媛縣より香川縣に通する國道にして本村に於ては樽味桑原畑寺三町の四大字を通過す道幅二間本村を通する長さ十七町あり

桑原村役場所在地より素鵝村に通する里道は幅一間長程六町

大字桑原より畑寺に通する里道は幅一間長程十町

畑寺より正圓寺に至る里道は幅一間長程拾貳町

桑原より正圓寺に至る里道は幅四尺長程拾五町

樽味より正圓寺に至る里道は幅一間長程十二町

正圓寺及東野より道後村大字石手に至る里道は幅一間長程拾五町

東野に至る里道は幅一間長程拾五町

桑原村誌

國道は車馬の通行甚繁く里道は何れも平坦にして通運困難ならずと雖雨後は泥濘足を埋め交通甚煩ひ愛媛縣圓温泉郡役所に至るには西方十八町及拾六町なり

(二) 郵便電信　何れも松山局の區域中に屬し郵便の集配は一日僅かに二回なれば不便を感すること多し函場は畑寺桑原正圓寺の三箇所にあり

生業　(一) 農業　村民の大部は農業に從事す本業は稍保守的なれども漸次改良法行はれ成績の見るべきものあり產種の重なるものは米麥大豆等にして一年概數の產額を舉くれは米四千五百石、大麥六十石小麥七十石、裸麥九百七十石、大豆十七石ありこれらは總て松山市に向つて賣出さるゝなり其他特產物として茶筍梨等あり茶は三箇年平均一千百四十貫此價千四百圓餘直接神戸に輸送せり筍は近郷に於て良好の聞あり一ヶ年產額五千貫價額五百餘圓なり

(二) 商業　不振にして小賣商二三軒あるのみ唯酒造業一軒一ヶ年造石數二百石計りのものあり

(三) 工業　本業に瓦製業者二三あれども見るに足らず

財政　本村は面積廣からず人口多からざれども財政整理の點に至りては頗る成効ぜり貯金は未一般に行はれず或部落に於て共同貯金をなしつゝあり學校に於ては毎月三回宛確實に郵便切手貯金を實行し稍進歩の狀を呈せり

素鵞村誌

浴革　本村は元桑原郷と橘郷の一部を占め枝松・小坂、中村、立花の四部落より成る初めは各獨立し中古は四ヶ村聯合の制なりしが町村制實施の際合して素鵞村と稱す村名の起りは大字中村にある素鵞

社に因りて付したるなりと

大字立花の起因は諸説紛々として決し難しと雖要するに古橘郷の主要部なりしより立花と言慣ひしならん

大字枝松は部内に枝松社あり枝松太郎通榮の靈を祀る其名を採り用ひしものなり

大字小坂は薇松山城下に通する所新立と云ふに小坂あり因りて名けしならん

大字中村は桑原郷と久米郷と橘郷との中間にあるより起りしならん

位置及境域　本村は温泉郡の中央部に位し樞要の地域を占む北は石手川の堤防に沿ひ松山市及道後村と相連り東は桑原村に南は久米村の一部と石井村の大部に接し西は雄群村に三方何れも沃野を以て連れり

廣袤　東西拾八町四十五間南北は中央部にありては拾壹町四拾間楔形の最も廣き部分即東部は拾四町拾五間最も狹き西部は六町五間あり

面積　本村の總地積は貳百貳拾町五段壹畝廿五歩にして其内譯は左の如し

田　壹百六拾五町五段參畝廿八歩

畑　參町九段八畝廿四歩

宅地　拾參町壹段七畝拾四歩

雜種地　四段拾歩

鐵道道路堤防　參拾七町四段壹畝九歩

地勢　本村は石手川灌域に屬する一帶平原にして山嶽丘陵の起伏なく從て土地の高低甚しからずと雖東北部は稍高くして西南部に至るに從ひ漸く低きが如し

水誌　河流は唯一つの石手川あるのみ石手川は齋院圓圓より本村の城に入り村の北部を貫流すること貳

拾町燒場渡に至りて村界を離る河幅貳拾五間河底淺くして平素は水量少く從つて舟運の便なけれども農事に及ぼす利益は多大にして村内一帶の水田は草葉關、小坂樋、中村樋、立花樋、佐古樋の五水門より灌漑用水を引き以て其用を便す

氣候　本村の氣候は松山市と大差なく最高溫度は三十四度最低溫度零下三度に至ることあり而して平均溫度は十四度、九と註す

風の平均方向は一、五、六、七、八月南西にして二月は北東其他は北西を多しとす雨雪の量は全年合計千三百七十四粍にして一日中の最多量は六十三粍四、一時間の最多量は二十三粍強なり

地質　本村の地層は變形岩より成る冲積層にして東南一部の粘土と西部及北方一部の砂土を除きては悉く壤土より成り稍に壤土の現出せるを見るのみ

區劃及政治　町村制實施に際し大字小坂字西浦に役場を新築し一村を統一して施政することゝなり爾來表面區の設けなしと雖も實際施政の必要より水利土工祭典行事其他特殊の事件を其字限り處理するがために枝松小坂新場所中村立花の五字に總代人あり其費用は協議費を徴收して之を處辨しつゝあり

其他施政全班に渉り此總代人の補助を俟つこと多し、

人情風俗　本村は松山市に隣接し郡内樞要の地を占むるにより他の村落に比すれば自然文化の新風潮に浴することと早く住民一般に進取的氣質に富むを以て風俗從つて善良特に忠ふべき地方的惡風を認めず交通の頻繁なると教育の普及せる結果とにより方言訛言の笑ふべきもの漸次減少し禮法其軌を一にす唯立花新場所の中商業地に住める者は華美を好むの風あると共に人情稍輕薄なり其他衣食賀祭にして情誼に厚し

教育　村立桑鶉尋常小學校は大字小坂に在り本校は明治廿三年三月の設置にかゝり其後三十四年と三十九年とに增築せり夫より以前は小坂尋常小學校と稱せり小坂尋常校の創立は明治廿年四月なり仝校の設置せられざる以前にありては稻葉小學校明德小學校立花小學校ありたり稻葉小學校は今の桑原村内にありて枝松地方より通學し明德小學校は始め拓南小學校とも稱せしことあり小坂にありて小坂中村地方より通學し立花小學校は立花地方の兒童を收容せり此等の各學校を卒業せしものゝ高等小學校へ入學志望者は松山高等小學校に通學せしも郡制施行に當り依然依托教育をなせしが明治卅四年に至り道後湯之町及湯山桑原道後榮登各町村組合湯渡高等小學校を道後村に設置し現今それに通學することゝなれり

衛生　本村避病舍は大字小坂七ノ坪に在り明治廿八年八月隔離室病室看病人詰所番人室を創築せしが後卅二年九月事務室消毒室及土塀を增築し設備稍完きを見るに至りしも卅五年七月村内新場所に虎疫發生し病室の狹隘なるに至り更に隔離室看病人食堂とを增築し茲に設備の完全を誇るに至れり

衛生組合は各部落に設置し清潔法は毎年春季に一回施行するの外夏期に於て臨時に之を施行す其他傳染病豫防法も大に行屆き居れり

警察及裁判所　松山警察署の直轄地に屬し明治廿二年七月創めて駐在所を大字小坂に設置す區裁判所は松山區の管轄に屬す

宗教　神佛二教を信ずれども神教は勢盛ならず佛教に眞言禪宗淨土眞宗を奉ず其信徒數の最も多きを眞言宗とし禪宗之に亞ぐ其他は微々たり

神社佛閣　本村は氏神として立花は松山市の井手神社其他は桑原村の三島社を奉じ唯左の四小祠は三島社の境外末社として奉祀せり

枝松社　は枝松の字百垣根にあり祭神は市寸島比賣命多紀理比賣命多紀都比賣命なり

嚴島社　は枝松の字東垣根にあり祭神は市杵比賣神なり

倉町社　は小坂字藏之町にあり祭神仝上

葉鶏村誌

葉鶏社　は中村字宮近にあり祭神健速須佐之男尊なり

西光寺　は靈松山と云ふ禪宗にして字枝松にあり當寺に河野一族枝松太郎通榮の墓あり公は松末館之血族にして得能の末裔なり奥城合戰の時滅亡館内の井戸に身を投せしが敵襲ひ來て其上より石を投じ殺害し之を埋む館跡に一字を建立す前記枝松神社なり位牌は當寺にあり枝松院殿繁居秀榮大居士毎年九月十七日祭事を行ふ奥城戰爭の年代明かならず

多聞院　大字小坂にあり本尊は毘沙門天にして河野通信の守本尊なり昔は寶塔山智天院多聞坊と號す御室の末寺なりしが今は石手寺に屬す貞享五年の再興なり創立年月詳かならず

大音寺　大字立花にあり太寶年間の創營にして僧行基手刻の十一面觀音を安置す

相向寺　龍光山と號す大字立花にあり眞言本願寺西派に屬す創立は天文十三年にして始め土居田村にあり道秀開基たり其後寛文元年頃立花現所在へ移轉したるなり開基佛と稱する如來は証如上人の製なりと云ふ信徒多數にして寺客多し

交通　（イ）道路　村内に通ずる國道一と縣道一あり國道第三十一號線は松山市より宇摩郡川之江を經て讃岐に入る線にして新立橋より村の北部新場所を通り桑原村に入る此間道幅四間平坦にして交通至便なり、土佐街道は松山市より上浮穴郡久万町を經て土佐に至る立花橋より村の西部を南に貫通して石井村に入る明治十九年工事を起し廿一年四月竣工せり道幅約四間屈曲なく平坦砥の如し里道は大字立花より小坂に通ずるもの、小坂部落を南北に貫通して新立より福音寺に至るもの、全線より分岐して新百姓榊味等に至るものあり何れも道幅二間内外にして降雨後泥濘にして車馬の通行に艱むことあり

國道によりて北行すれば縣廳郡役所松山市役所に達するを得へく南行すれば久米石井桑原の諸村役場に到るを得へく新立より東北行して道後、立花より西北行して雄群の村役場に到る而して以上何れの方面に到るも其行程一里に滿たず

（ロ）橋梁　國道と石手川の交叉点に各大橋を架せり一を新立橋と稱し一を立花橋と云ふ

新立橋　は國道第三十一號線に屬し俗に云ふ欄干橋風の木橋なれば車輛の通行には不便を感ず橋幅四間長十八間二尺あり明治十九年九月廿四日夜洪水の爲め墜落し一時假橋を以て交通の用を便せしが後明治二十一年今のものを架設せしなり

立花橋　は土佐街道に屬せり明治二十二年四月の架設にかゝる洋式鐵橋にして交通至便なり橋幅四間長十七間二尺に及ぶ　其他立花橋の西に鐵道橋あり明治廿五年の架設にして幅貳間長十八間なり又立花橋と新立橋との中間中村渡と稱する所に木橋あり幅間に足らずと雖長は前者と同しく大字中村と松山市との交通に便せり

（ハ）鐵道　伊豫鐵道株式會社の横河原線及森松線村内を通過す横河原線は明治廿五年の布設にして森松線は明治廿八年の布設なり大字立花に停車場あり同驛より南行森松線の本村に於ける哩數貳拾壹鎖餘横河原線は壹哩八鎖餘なり

（ニ）郵便電信　村内に郵便函の設けあるもの大字立花に三等郵便局一あり大字枝松に一あり其集配は大字立花の相向寺を除きて一日六回とす郵便電信共に松山局の直轄に屬す

生業　農業は近時大に發達して改良進歩の運に向へり農產物は米麥野菜にして松山市に販賣す商業も又近時大に發達し本郡中三津道後北條を除けは其右に出づるものなし土佐街道に沿へる商家は本村の商業地点にして街路廣く都會の風あり

工業は紙の製造にして其產額又少からず製品は大抵坂地に輸出すと云ふ

財政　松山市に接續して作物の販路に困難を見ず隨て財政中等に位し貧富の隔絶甚しからず又商業工業は本村の財源にして松山市接續町村中發達の機運に向へる一村なり

町村誌

沿革　本村は小栗、藤原、竹原、土居田、針田の五大字より成る元四村の側なりしが町村制實施の際合一して雄群村と稱す其村名の起因は大字小栗にある氏神の神號を取りたるものなり（三代實錄に伊豫國嵩部神雄郡神授從五位下云々とあり）然るに何時か郡を群に書誤り來りしより神名は其筋の許可を得て群を郡に改めたれども村名は因襲に從ひ猶群の字を用ひ來れり

各大字の起因は詳かならず古此邊すべて立花郷の中なりしことゝ其中の立花村は分離して今の素鵜村に編入せしことを知るのみ

位置及境域　本村は本郡の中央部より稍西方に位し東は素鵜村大字立花及び松山市河原町に接し西は味生村生石村に境し南は石井村大字和泉及余土村大字保免余戸に隣り北は松山市出淵町新玉町より朝美村大字南江戸に接す

廣袤　東西貳拾四町南北拾五町

面積　本村の總地積は參百貳拾町九段五畝廿九歩にして其内譯は左の如し

田　貳百八拾壹町六段壹畝拾歩

畑　拾七町參段八畝拾參歩

宅地　貳拾壹町九段六畝六歩

地勢　平坦にして山脈河流なし

町村誌

氣候　溫暖にして極暑と雖攝氏三十四度を昇らず嚴寒三度を下らず

地質　概して水成岩にして主成分は砂土なり然れども大字土居田、針田に至りては稍埴土を含み居れり

一般耕作に適す

區劃及政治　本村を大別して四大字とし各大字に小字あり村役場は大字小栗にあり村會議員は拾貳名にして各大字より撰出す各大字の地積左の如し

小栗　四拾八町八段六畝七歩　藤原　四拾參町貳畝八歩

竹原　六拾六町六段參畝八歩　土居田　九拾九町七段四畝廿壹歩

針田　六拾貳町六段九畝拾五歩

小字の名稱左の如し

小栗　上組、中組、下組、　藤原　本村、室組、岡久地組、土橋組

竹原　上組、中組、下組、　土居田　新屋敷、本村、下組、

針田　本村、佐古、生石

戸數　全村の總戸數六百貳戸にして各大字に區分せは左の如し

小栗　百拾六戸　藤原　百七拾貳戸　竹原　百貳拾七戸

土居田　百參拾壹戸　針田　五拾六戸

人口　總人口貳千八百八拾壹人内男壹千四百四拾壹人女千四百四拾人なり寄留民は貳百八拾貳人ありて内男百五拾六人女百貳拾六人なりとす

人情風俗　氣質活潑にして從順能く命令に服從す衣食住中等の生活により松山市に似たる點多し方言訛言、漸次減少せり

教育　學校は一尋常校あるのみ明治十九年教育令改正實施の時より小栗尋常を雄群尋常と改稱す通學區

域は全村五大字を通ずれども最遠距離十町内外にして道路平坦なれば通學自在なり高等小學科生徒は松山高等小學校に委托す

警察裁判所　松山警察署及松山區裁判所の管轄に屬し駐在所は小栗にあり

宗教　概して佛教信徒にして眞言、法華、眞宗等に信徒多し

神社佛閣　雄郡神社は大字小栗にあり祭神は天宇受賣命、品陀和氣命、帶日子命息長帶日賣命、天兒屋根命、宇迦之御魂命、大國主命、建速須佐之男命、伊邪那岐命、伊邪那美命にして當村の鎮守神又松山市三分の一は當社の氏子に屬し附近に名高き大社なり（但天兒屋根命以下五神は各境内ノ末社ニ奉齋セシヲ藩命ニヨリ明治ノ初年本殿ニ合祀セリ）今より千三百年程前用明天皇の御宇々佐より勸請すと云ふ當時當社の面積は四方凡八町の廣きに渡りて馬場道鳥居の如きいずれも今の地より遙に西の方に存し附近の田地悉く其社領にして本殿を始め寶藏神門等頗る莊麗なる社なりしに慶長年間河野の舊臣村上平岡なる兵を擧げて加藤嘉明に抗せしとき嘉明の留主居佃十成に賴まれ社家一同出陣せしが惜むべし河野の舊臣等其盧に果して神社は殆んど兵火の爲に烏有に歸したり今の社は其節の假宮の殘れるものにて此時より社地も多く開墾して水田となし境域次第に縮まりて亦舊に歸らず

神門の西北に左馬殿杉と稱ふる老杉あり加藤嘉明の植置かれしものなるも多くは風に折れ雨に朽ちて今は只其一を殘すのみ社頭より西方八町餘の彼方に一本の古松あり人呼んで御幸の松と云ふ

古大祭の時神輿渡御ありて其式を行ひし由今も土居田の神輿は此處に据ゑて祭式を行ふ

明治二十八年十月社格昇進して縣社となる氏子二千三百は松山市にあり境内の末社に金砂神社愛宕神社あり由來當社は舊藩主久松家崇敬の社にして現在の神殿の如きも元祿の頃藩主の寄附によりて造營せられし者にて今に其棟札を殘せり寶物としては家老奥平氏の寄進にかゝる具足太刀及日清戰役の際捕獲せし砲彈小銃軍衣三角劍等あり

藥師寺　は大字藤原にあり藥師如來を安置す創營詳かならず加藤嘉明七堂伽藍を建立して大に其規模を擴大にせんとす偶居城を會津に移せられしにより成らず萬治三年高野山宥雄法印當寺に入りて住み改號して瑠璃山東光院藥師と云ふ寛文九年同法印五間四面西向の堂宇を建立して厨子を奉安す本堂前に閼伽井あり之れ又宥雄法印の感得穿ちし所なり清水滾々として盛夏掬水清涼を覺ゆ今に夏日來りて涼を取るもの多し

寶物としては瑠璃光と大書せし掛物一幅元祿二年支那千凱敬書及國主より寄進せられし曼荼羅三幅等あり賽者一ヶ年平均貳千人殊に夏季に多し

瑞應寺　は大字針田にあり日蓮宗にして觀音山の號あり創營は正保二年と云ふ寛永の頃迄は藏傳寺と云ふ眞言宗なりしが時の住僧達山師奇夢に感じ正保二年甲州身延山に參詣し時の管長より瑞應と賜ひ日蓮宗に改む當寺安置の觀音の像は僧行基の作なり

寶物としては一塔兩尊四菩薩外三像清正公の涅槃像德川吉宗公御用の茶碗一個等あり賽客四時共に絶間なく遠所より參詣者多し

長正寺　は大字竹原字土橋に在り本尊は阿彌陀如來の坐像外に願脇觀世音行基作の堂あり天和二年三月九日の創營と云へども沿革詳かならず觀音は當開山最祭傳竜當寺を開くに際し其像並靈驗の書を添ねて奇僧より請け堂を營み奉安せしものなりと今に靈驗著し

其他土居田に眞言宗善復寺、鬼子母神等あれども由緒判然せざれば茲に略す

交通　（イ）道路　松山市ヨリ郡中大洲宇和島地方へ通ずる縣道は本村の中央を貫通す長拾町幅二間あり人車の往來繁し

里道としては雄郡神社前を西に土居田に通ずるもの大字藤原より小栗に通ふもの竹原より朝美村味生村等へ通ずるものを最とす幅各二間に餘り道路平坦なり愛媛縣廳へは東北拾六町溫泉郡役所へも

拾四町あり

隣接町村役場への方位巨離は左の如し

西南　余土村へ凡廿五町　南　石井村へ凡壹里

東南　素鵜村へ貳拾町　西北　朝美村へ貳拾町

西　生石村へ壹里拾町　北　松山市へ拾四町

西北　味生村へ壹里

（ロ）鐵道　元南豫鉄道今の伊豫鉄道郡中線は明治二十九年七月より開通し松山郡中間線路七十鎖四十九節あり本村の東北部より西余土村に向つて布設せり

（ハ）郵便電信　松山郵便電信局の取扱に屬し郵便の集配は午前に壹回午後壹回とす電信は松山局に至りて用を便す

生業　一農業　本村の農業は近來大に發達し野菜の栽培に意を用ふ之に次くものは米麥にして其販路は松山市及三津濱町とす毎朝大字竹原の字土橋に於て青物の市を立て本村の蔬菜隣接村より持集るものを商ふ其殷賑近村に其比を見ざるなり當地方の緋の蕊は有名なり

二商工業　商業として農作物の販賣に勉むるもの多く酒造業菓子小賣商を重なるものとす工業として機業に從事するものあるのみ

財政　松山市に接續するを以て作物の販路困難を見ず從て財政中等に位し貧富の隔絶甚しからず稅源は農産物及機業を重とす

口碑俗傳　前記藥師寺の藥師の靈驗に就きて俗傳あり

寛永三年夏大雨連日にして暫も止まず南川水溢れて堤塘將に潰決せんとす加藤嘉明家臣足立重信に命して之を防かしむ然れとも水洪々漫々として强堤彌危し若堤塘決潰すれば洪水城下に滿ち人民溺死し舍宅流落すべし人心惶々として恐歎切に至る時に何方にか聲あり當寺の秘尊を此堤上に勸請して祈願すれば此水難正に除くべしと依て重信等勸請して切に祈願す不思議にも雨足忽止み水勢頓に緩み人民大に安堵す此れに因りて即時に當地弘心院（今の常信寺）にありし小堂を換移して先假に秘尊を安置したりと

又正保中井門村の農夫五郎衛といふもの廿歳計りの時來て藥師に祈て云ふ痞にして苦なるも益なし若し言語するを得ば四體毀傷するも可なり否らざれば死すとも可なりと云ひて走て藥師堂の前にあるを開くして其長三尺はかりの石に身を觸れ疼痛に堪へず大聲を發して呼ひたりしが是より頓て言語するを得たりとて其石今に存せりと

余土村誌

浴草　本村は保免、市坪、余戸の三大字より成る封建の頃は保免、市坪、東余戸、西余戸とて四家の庄屋の治むる處たりしが元來此大字は何れも各隣接すると水利上の關係によりて昔時より相共に交通往來す明治七年市坪保免余戸東垣生西垣生に區分さる此五箇村は元伊豫郡に屬し居りたれども地勢上の關係よりして互に相扶け相救ひ交情頗る厚く明治十八年一月に至りて此五箇村合併して同一の行政の下にあること五年此時役場は余戸の中央部に在りたり後町村制實施となりて東垣生西垣生は分離し他の三大字合一して余土村と命名し以て今日に及べり

余土村と命名せし起因に就ては判然せざれとも古此地方を余戸の郷と云ひたりし事ありしより余戸と云ふべきを余土と名付しには非ざるか確信し難し

位置及境域　本村は温泉郡の西南に位し三大字の内余戸は西部に保免は東部に市坪は東南部に位して南は

余土村誌

廣袤　伊豫郡北伊豫村岡田村に接し東は石井村北は雄群村及生石村に境し西は垣生村に隣る東西二十餘町南北十五町其周圍六千五百八十餘間あり

面積　當村の總面積は四百八十五町七反十七歩にして其内譯は左の如し

田	三百四十六町二反三畝十二歩
畑	十町七反三畝〇二歩
宅地	二十町九反〇十四歩
山林	六町九反六畝〇三歩
雜種地	十二町三反五畝〇九歩

右の内官有地八十八町五段二畝七歩ありとす

地勢　石手川は大字保免余戸の南部を西流し余戸の字出合に於て重信川と合す大字市坪は北石手川に沿ひ南重信川に界して地形恰も三菱洲をなし三方は右二川の堤塘を以て圍まる村内一面坦々たる平野にして一つの丘陵あるなし然れども自然の勾配ありて溜堰縱横に通し少しの溜滯を見ず灌漑極めて便にして旱魃の患なし併し大雨の際大字市坪は土地低きを以て水決宜しからずして田野は變じて湖川となり農作物を害することあり概して村内東北に高く西南に低し

氣候　氣候は四季概して溫暖なり併し大字市の坪の地は重信石手兩川の間に介するを以て兩岸の樹林空氣の流通を妨げ溫度稍高し平均最低溫度攝氏四度六分にして最高二十六度三分なり

地質　村内一般に砂礫なく土壤深厚にして肥沃なり從つて米麥蔬菜能く成長して收穫上遺憾なし

區劃及政治　本村は三大字より編制せられ更に左の小字に分つ

余戸　小字鎌田、出合、中ノ孝、柳井田、井手ノ上、本村、竹ノ宮開、南組

保免　小字下組、中組、上組、

市坪　小字　北組、北ノ町、中ノ町、南町、上組

村役場は大字余戸の字本村にあり村會議員は十二名なり村是調査は明治三十四年此れが基礎を開きし以來着々其實行を勸めつゝあれば今日に於て大に見るべきこと少なからず明治三十七年第五回内國勸業博覽會に於て其資料は一等賞牌を受領したりこれより其名著しく現はれたり

戸數　全村の總戸數は四百五十二戸にして各大字に分くれば左の如し

余戸	二百九十戸	保免	七十一戸
市坪	九十一戸		

人口　總人口二千三百五十人あり其内男一千百八十四人女一千百六十六人寄留民七十八戸を含有せり

人情風俗　大字市坪に於ては一般に性朴直着實の美風を兼ね虛飾なく能く信義を重んじ親和團結をなす然れども往々朋黨を結ひて互に相軋轢するの傾なきにあらず保免の人は堅忍不拔の精神に富むも稍偏頗保守の感なきにあらず余戸は交通頻繁の爲か見聞廣く邪智識を有する他二大字の比に非ず能く事に應じて所するの才あり然れども忍耐持久の美德に乏しくして輕佻の傾あり衣食住近來稍華美に趣き生活の度頗に進み來りたりしが大に鑑みる所ありて質素儉約の美風行はれ來りたり

教育　明治三年始めて余戸に曙小學校保免の隣村なる和泉に保泉學校市坪に青木學校の設けありて村民遇んで修學することゝなり以前の寺子屋教育の觀を脫せり此より幾多の星霜を經て余土尋常小學校となり明治三十三年高等部併設をなし以て今日に至れり

衛生　當村は縣下にて傳染病蔓延地と稱せられ衛生費に多額を費し居りたるが村内衛生思想の發達と清潔法の普及とは能く其効を奏し近年全く其跡を絕つに至れり避病舍は大字余戸に建設し設備完全す

警察裁判所　松山警察署松山區裁判所の管下にして駐在所は大字余戸にあり警察事務一切を掌轄す

宗教　村内大部の宗教は佛教にして唯僅かに天理教黑住教あるのみ佛教信徒の重なるは眞言宗法華宗を

最もす

神社佛閣　日招八幡神社は小字保免にあり社傳に云ふ此神社往古は比肸大神の社なりしが陽成天皇元慶二年五月十一日玉井櫛部廿田の三氏石清水八幡宮を勸請す其後元暦元年佐々木高綱砥部城主森山近江守性原城主大野山城守と合戰の時夜軍に勝利なきを憂ひ日を招きしに忽ち戰勝ちたり高綱此神靈に因るものとし大に崇敬す故に日招八幡と稱せり又藥師寺をも再興して此社の別當とし日照山を改めて日招山と號せしと又或說には佐々木高綱八幡宮を此地に勸請すと云ふ

三島神社　は社格村社にして余戸の氏社なり大字余戸の東端樹木鬱蒼たる中にあり大山積神、雷神、高龗神を祭る境内の手引松は近村に有名なるものにて此地方に來るもの必ず一見す

藥師寺　は大字保免字寺の東にあり舊日照山醫王院長圓寺と號す行基開基の古寺なり豫陽舊跡俗談に云ふ佐々木高綱此の地に八幡を勸請あり即ち當寺を別當として九間四方の本堂觀音堂鐘樓中門仁王門道立あり八町四方の地を寺社領田として寄附し給ふ此時日照山を改めて日招山と號す本堂天井の龍の畫は古法眼の筆なるよし傳へぬ慶長元年閏七月大地震の時本堂仁王門崩るゝ

西林寺　は大字保免字田中になり藥師寺支坊の内なり寺内に高綱の碑あり寛永中天德寺の僧雲巖碑を建て之面に高峯宗綱の四字を刻む又池あり高綱太刀洗の池と云ふ

其他余戸の善喜寺市坪の玉善寺は皆古の巨刹なりし由なれども今は一宇の存するのみ

各種團體　青年實習會は村内青年にて農事に熱心なるもの十數名より組織し三段餘畝歩の試作地を設け毎年米麥の試作をなし栽培の方法害虫驅除の仕方肥料の配合等に就きて模範を示し又時々縣外各地へ會員を派遣し農事の情況を視察し以て村内農事の改善進歩を圖ふ居れり今日余土村が縣下農業界に稻頭角を顯はすに至りしは本團體與りて力ありし處なり

余土青年會並在鄕軍人會は會員百六十餘名を有し村内風俗の改良智識の啓發体育の奬勵を計り相互の親睦を計る等の目的にて設立せしものにして其事業は大要左の如し

一倶樂部を設け新聞雜誌書籍を備置し隨意閲覽せしむ

一時々會合を開き農事の研究或は學理の研鑽をなす

一夜學を開設して青年教育の普及を計る

一春秋兩季に大運動會を擧行し體育の奬勵をなす

交通　（イ）道路　松山より宇和島に達する縣道は石手川の堤防を以てす其道幅二間なり其他里道縱横に通じ交通頗る便にして車馬の通ぜざる處なし縣廳郡役所共東北一里餘にして徒歩するも僅々一時間を費すのみ

（ロ）鉄道　伊豫鉄道の支線郡中に通ず大字余戸の中央部に余土停車場あり此れ元南豫鉄道會社が松山郡中間鉄道敷設の際建てられしものにして其當時は田圃の裡にありしが術來乘客及貨物集散の中心となり從て今日の如く數多家屋の建設を見恰も街衢の樣を呈せり尙漸次家屋增加の傾向あり

（ハ）郵便電信　郵便は余土村の大部は日に一度の集配をなす日三度此れをなすは余戸の中央部のみ電信は松山局の取扱に屬す

生業　（一）農業　本村は土地肥沃にして且灌漑に便なるを以て村民は古來より農を以て唯一の職業となし他に求むるを知らざりし明治の初年製糖の業盛に行はれしことあり術來本業の進歩著く他村の模範を示すにさへ至りしなり

農事試驗場は明治三十四年四月よりの設置にして場長技師技手書記各一名ありて當町餘の試作地を有し米麥の試驗蔬菜の栽培害虫の生育情況農產物肥料の分析等の事を專門的に研究つゝあり此れを以て村民が常に受くる利益は實に僅少ならず當村が今日農業界に頭角を現はし居るは業よ

垣生村誌

り數多の老農ある有りと雖是れ一に試驗場の影響を受くる其一因たるや明なり

(二) 商業　古來商業盛ならず只田舍の常とする駄菓子豆腐石油等を商ふに過ぎざりき然るに近年に至りては停車場前に比較的大なる商店出で皆可なりの收入ありて漸次盛大に趨べき有様なり

(三) 工業　本業の重なるは機業にして始めて村内に入りしは天保年間にして其時の機は高機と稱する不完全極まるものにて木綿縞を織り成せり元治年間より地機と稱するもの起り飛白の元產地たる垣生村に隣するを以て本業の進歩極めて著しく今日の機業は農家の一大副業となるに至れり

財政　名勝舊蹟　出合の地　出合は名の如く石手重信兩河の合する處にして青々たる松樹を以て蔽はれたる長堤は鋭々として綴き磨くが如き砂礫は流水の間に現はれ鳴禽樹林に樂を奏し清き流れは老松の影を寫し四季の推移と共に千變万化し杖を此地に曳くものをして仙境に入るの感あらしむ殊に秋月節に俳人雅客の集る年々幾百なるを知らず斯くも絶景なるを以て村民此地を以て唯一の娯樂場となし職業の餘暇常に此地に遊ひて平日の勞苦を慰むることゝせり

垣生村誌

沿革　本村は元伊豫郡に屬せし東垣生西垣生の二個村なりしに町村制實施の際合一して垣生村と改稱せり其後明治三十年四月郡制實施の時溫泉郡に屬することゝなれり

村名の由來　詳ならざれども高縄の城主河野通直の家老垣生加賀守盛固高岡村高山の城主となりし當時現今の字垣生、余月、富久、高岡、久保田、齋院、南北吉田、別府の九部落を總稱して垣生郷と云ひ垣生家代々の所領たりし事明白なり依て此名を以て村名となせしなり

西垣生は一名今出と稱す今出なる名稱は菅公筑紫に左遷せらるゝ時途中生石村字久保田に滯留せらるゝ事久し民多く其德に服す後此地を去らるゝに臨み老幼相携へて別を惜む公曰く今此津を出づ何時再會を期せんやと因りて津名となす

位置及境域　本村は溫泉郡の西南隅に在りて松山市を距る二里南は重信川の堤防を以て伊豫郡岡田村に境し東は余土村北は生石村に接し西は全く海に面す

廣袤　東西二十六町南北二十二町にして殆んど長方形をなす

面積　本村の總地積は二百八十二町二段九畝十一歩にして其内譯は左の如し

田	百九十四町八段八畝四歩
畑	五十四町
宅地	三十町一反八畝十歩
雜種地	三町六反二畝二歩
官有地	九段五畝廿五歩

海岸線　殆んど一直線にして其延長二十七町二十八間あり

港灣　船入川と稱し海岸より灣入すること八町餘なれども水淺きと西風を防ぐ備無きを以て唯小舟を碇泊し得るのみ

砂洲　重信川の砂流當村の西海岸に堆積して砂洲をなす即ち重信川の小三角洲とも云ふべきか東西三町南北十六町餘猶年々增大せり

潮汐　滿潮は北流し干潮は南に流る滿干の差九尺ありて海底は大抵泥濘なり

地形　全村山河なく概ね平坦なり唯西部今出地方は高地にして南北に長く田面を抜くこと二間餘の砂土を以て成る

垣生村誌

氣候　酷暑は攝氏三十三度に昇り厳寒は二度に降ること有れども積雪を見ること稀なり西は硫黄灘に面するを以て冬季北西風強し

地質　水成岩にして東垣生は埴土の地多く西垣生は砂土を以て成れり

天産物　此地方は海産物に富む中にも章魚、鰕、海苔を多く産す

區劃及政治　本村は二大字を更に大別して東垣生を八反地、中組西垣生を南組北組の小字に分つ村役場は大字西垣生にあり村會議員は拾二名なり而して各大字の地積は左の如し

東垣生　貳拾九万百貳拾五坪

西垣生　五拾五万八千貳百四拾八坪

戸數　全村の總戸數は七百十三戸にして其内大字東垣生百十二戸西垣生六百一戸あり東垣生は多く農業に從ひ西垣生は商業漁業勞働者多く住す

人口　人口の總數三千四百十五人にして男千六百三十六人女千七百七十九人其内寄留民は僅に百十三人計なり

人情風俗　一般氣質柔和にして義侠心に富み進取の氣象あり言語は半ば粗野にして訛言方言又多し禮儀質朴にして古風なる禮を尊重するもの多し衣服は今出續の主産地なるを以て之を着用するもの多く概して質素なり家屋は平屋建にして瓦葺多し

教育　本村教育の沿革を畧述せば明治十年頃大字東垣生に東園小學校西垣生に今出小學校ありしが明治十九年村の分合により余土村に本校ありて西垣生に西垣生分教場を設く然るに明治二十年四月余土村と分離し垣生村となり垣生簡易小學校を設け尋て明治二十三年垣生尋常小學校を設立し其後明治三十三年四月に至り高等科を併置し垣生尋常高等小學校となる

・本村の外に生石村より高等科生に限り依托生徒あり通學の最遠距離は高等三十町尋常十五町なり

衛生　避病舍は西垣生の字山崎にあり高燥の地にして眺望に適す且村内配水は頗る完全の設備をなせり

衛生組合は清潔法を奬勵し傳染病の豫防は法令を厳守實行せり

警察及裁判所　松山警察署垣生駐在所を西垣生に設けり裁判區は松山區裁判所の管轄に屬す

宗教　淨土宗眞言宗日蓮宗曹洞宗眞宗等あり其内信徒の多きは淨土宗にして八百餘人の信者あり眞言宗に五百人日蓮宗其他は六百人の信者ありとす

神社佛閣　三島神社は西垣生の中央にある村社にして雷神大山積神高龗神を祀る元東垣生に在りしが寛永元年大洪水の際流失して舊記と共に存するものなかりしが三四年の後今の處に建築せしものにして寶物として甲冑一具あり

住吉神社　は西垣生の南方にあり住吉大明神を祭る沿革由來詳かならず

疫鎮神社　は村内中垣生の路傍にあり大直日神を祭る惡疫流行の際之を禮拜せば傳染を免るゝと稱し信仰するもの多し

奥土居神社　は東垣生字宮の内に在り面足神高皇產神阿夜訶志泥神を祭る古へ產狹島命の御子誕生の際胞衣を箱に入れ海上に流し給ふ其箱垣生の郷今出の浦に漂流するを漁人持歸りて机上に置く其夜詫宣に因りて其箱を濟地に埋め祠を建てゝこれを祭る(今の八段地の囲)其後垣生肥前の守の時に當り此城廓の囲面外土居の方にあるを以て奥土居神と稱し敬禮ありたりと

長王寺　は一輪山寶院と稱す元龜元年或は建長二年の創立なりとの說あれども不明なり正德五年洪水の爲め流沒し僅に本尊不動像並に佛像三四軀を殘せしを以て僧辨弘之を再建せしなり本尊不動の像は弘法大師の作なりといふ眞言宗醍醐派の所屬なり

常光寺　は寛永元年四月山越の龍穩寺の十三世本牛大和尚の開山なり元東垣生の囲に在りしなれども享保の頃今の地に移轉し享和二年再建せしなり

垣生村誌

寶物としては支那僧雪磨筆の過去七佛より達磨大師迄傳法の偈一軸祐乘の作黄金觀音の立像あり

寺内に俗稱うんか塚と稱する墓表あり是れ享保十七八年大浮塵子發生の當時米作皆無なりし爲め村内餓死する者六百有餘の多きに達し之を合葬せし塚なりといふ

長樂寺　は天平寶字四年創立せしものにて禪檀山敎王院と號し末寺十一箇をも有せしが天正中兵火に罹り其後正德五年洪水の爲め本末寺共流失し廢絶せしが本村内字中津の橋下に於て本尊阿彌陀像を得たるを以て享保年間之を中興せり今の寺卽ち是なり

寺内に祭れる藥師堂は秘佛として開張せしことなし今出綿の發明者鍵谷カナ子の墓碑は庭前にあり

各種團體　實業奬勵會あり會員二百人會長は村上半太郎氏にして村内實業の改良發達を計り合せて會員相互の救助を計るに在るを以て此團体の組織堅固にして積立金の如き既に參百圓に及び毎年擧行の事業左の如し

尙齒會を開催し村内八十歳以上の老人を招待饗應し彼等を慰安す

講品評會を開催し優等者に賞品褒狀を授與し改良進歩を計る

其他青年學友會あり村内青年の風紀改善學力補習の目的を以て成れる會合にして設立日淺しと雖も其組織完全にして規約を實行し會員目下五十名に達せり

交通　道路　里道は東松山市に通ず愛媛縣鹽及溫泉郡役所を距ること二里北方三津ヶ濱に通ず其距離一里十八町南重信川を距て〻伊豫郡の松前、郡中に通ず其距離一里强なり

隣接町村に於ける距離は左の如し

東余土村大字西余戸に接續し其距離僅に十町にして同村役場に至るには廿六町を距つ北生石村大字南吉田に接す其距離亦十町南は重信川を隔て〻伊豫郡岡田村に隣接す其距離二十町なり

（二）航路　西は海に面するを以て極めて小なれども港を控へ漁船等の碇泊に便す郡中三津地方への通船の便あり

（三）郵便電信　郵便は今出局電信は松山局の區域にして明治三十五年西垣生郵便受取所を設置し明治三十八年四月三等郵便局となれり

生業　（イ）農業　地味砂土なれども肥沃の地多く隨て米麥の産額多し又甘藷を作るに適す近來園藝の衞大に發達し林檎桃梨夏橙の産出多きに至れり米麥の販路は重に三津ヶ濱にして稀に松山市又は郡中に運ぶものあり産額は米四千石麥千五百石砂糖五萬余斤等とす

（ロ）商業　小賣業多く日用品を販賣す絣の主産地なるを以て之れが仲買をなすもあり金融を計る目的にて設立せる今出銀行あり其他今出酒造會社ありて九州地方に販賣す

（ハ）水産業　小鯛の漁獲多量にして煮干となして各地へ送る又毎年初夏の頃鰆の漁獲盛にして收益殆んど一千圓多く三津魚市場に販賣す海苔の製造法も大に進歩し其産額一箇年一千圓に登るに至れり松山市三津濱町山口縣に向つて賣拂はる

（ニ）工業　縣下絣の原産地なるを以て機業に從事するもの多く今出絣の稱を受け後松山藩廳に於て大に之れを督勵せしにより事業の發達と共に販路擴張し遂には伊豫絣の稱呼を以て世に聲價を博し今や本縣物産中の主位を占むるに至る其産額十五萬反に及ぶ各家多きは七八人の職工を設き婦女の別業として盛に之を織成せり

財政　農業と機業の盛なるを以て民力豊なり信用組合を設け金融を便す各種税金の如き納期を後るゝこと少し

人物　三原新四郎　は西垣生の人なり明治七年の頃今出の海岸に海苔の附着せるを發見し製造を始めたれども隆盛に至らず其子淺五郎に至り大に改良を加へ近來著しく發達し販路擴張せられ當村富源の

生垣村誌

一となるに及べり

村上久太郎　は今出絣の改良と販路擴張に付き大に盡力せられし人にて今日の如く地方機業の發達を見るに至りしは氏の功大なりといふべし

鍵谷カナ子　は當村絣の元祖なりカナ子は西垣生(元今出)の農鍵谷清吉の女にして農業に從事するの傍機織裁縫を兼修す年五十有餘にして享和年間讃岐金比羅宮に詣づ其歸路を海にとり帆船に便乘す其乘合客に久留米飛白を著するものありカナ子如何にもして此の如き飛白を織り出さんと心に銘し家に歸るや白糸の所々を藥又は糸屑を用ひて絞り来の青汁に浸し横飛白を試織せしに心に銘せしものゝ如く出來揚れり試織數次にして遂に藍汁に染めて試み所謂芥飛白を織り揚げたり是より益精を凝しゝかば遠近より傳習を請ふもの多く誰云ふとなく今出飛白を以て名を得るに至れり之に依て明治十九年四國共進會の際官より若干の賞與金を得たり茲に於て村の有志等相謀り碑を建て其功績を表施するに至りしなり

同碑銘

表　飛白職工勞姫命

裏　命伊豫州伊豫郡西垣生村今出里人鍵谷氏生父通稱清吉母松本氏天明二年誕長嫁於小野山藤八元治紀元五月貳拾八日得年八拾參而病沒命之在世也享和中詣於讃岐琴平山洞同舟客筑後久留米著飛白綿布命見之心竊喜之乃到家自取青草汁染綿絲而試飛白製著得織文之法於是刻苦窮遂得以極其精自時　後嶺近里人皆傳習爲其業大弘今時飛白綿布以今出里爲稱首者蓋權輿于此也明治拾九年設四國共進會於阿波德島乃飛白綿布課於其物敏因大被稱譽於是官賜金若干於其子孫以追賞先人之原功以村人等相謀新祭其靈稱飛白織工勞姫命時明治貳拾年七月立石表之余爲誌其概畧云

山下清風撰並書

生石村誌

沿革　本村は現今の富久高岡久保田南吉田北吉田の五部落に余戸村の余戸垣生村の垣生味生村の齋院別府とを合せて垣生郷と稱せしなり其後種々の變遷を經て町村制實施の際富久久保田高岡南吉田北吉田を合せて一村となし生石八幡神社の社名に因りて村名となせり

位置及境域　本村は溫泉郡の西南に位し西方は海に瀕し南は垣生及余土に東北は味生村に接し殆んど正方形をなし東北隅を欠ぐ

廣袤　東西二十八町南北十九町あり

面積　總面積五百六十六町五畝廿三歩ありて其内譯左の如し

田地	三百八十町三反九畝一歩	
畑地	四十町九反十二歩	
宅地	二十五町五反七畝二十七歩	
山林	百九町三反二畝十二歩	
雜種地	二町七反三畝二歩	
池沼	七町一反二畝二十九歩	

海岸線　屈曲少なくして二十町あり

潮汐　滿干の差五尺にして季節に關して變異あるを認めず又海流の速度は一時間約一哩半にして其方向は南北なり

生石村誌

地勢　本村は土地概ね平坦にして僅に北方一帯低山脈を以て味生村と界し西北隅に久津和山あり夫より西方は蜿々たる砂原にして中に松山聯隊の射的場あり又東南一帯は平野にして垣生余土味生の三村に接す

山誌　北方の低山脈中高きものを垣生山といひ其高さ二百五十二尺あり又西北に久津和山あり高百二十尺にして土質は何れも埴土を主となす

水誌　千地川堂元川ありて灌漑に便なり千地川は余土村より來り本村の南方を流れて南吉田字北濱新田より海に注ぐ長十七町余にして幅廣き所は十間あり堂元川は味生村より來り村の中央を流れて北吉田字二つ岩より海に注ぐ長三十五町余幅九間あり

池は高岡に二個南北吉田に各一個の溜池ある外別に記すべきものなし灌漑は北吉田稍々不足を感ずるも他部落は不便更になし

氣候　氣候は温和にして極寒の候と雖も攝氏の二度を下ること稀に酷暑の候と雖も三十四度を上ること尠し

地質　水成岩にして其主成分を砂土及壤土となす

區劃及政治　本村は五個の大字に區劃して村役場は大字高岡にあり村會議員の數は十二名なり今各大字の地積を擧ぐれは左の如し

高岡	百十五町六反二畝歩	久保田	二十九町二反七畝歩
富久	五十町二反五畝十八歩	南吉田	百九十六町一反三畝十八歩
北吉田	百六十四町七反七畝十七歩		

戸數　五百四十三戸

人口　三千百七十二人

人情風俗　當地の人情は昔日の遺風を存して猶淳朴なる所あり(一)氣質は敏捷なる活氣を有し居れども又聊堅忍の氣象を欠げるが如し(二)言語は松山の言葉と大差あることなし習慣は吉凶相慶吊し村衆相集りて之を助くと雖も動もすれば酒食に耽るの傾向なきにあらず又戸々神棚佛壇を設け敬神崇祖の赤誠を盡し神社の祭禮には神輿を舁き獅子頭を弄し神意を慰め又自ら樂しむ禮法には特別なる点あるを認めず只成るべく丁寧に稽首叩頭をなす

教育　維新後は各部落の神官僧侶に依て施されたる寺子屋教育に繼で明治九年に高岡久保田富久の三部落は連合して高岡に垣山小學校を設け校舍は舊殿倉を使用し南北吉田は南吉田へ挿桃小學校を設け校舍は仝じく舊殿倉を以て之に充て以て普通教育普及の道を開きたり而して當時兩校には生徒各百名教員三名あり經費一ヶ月凡百六十圓を要したりしが世運の進歩に連れ不就學兒童も減少し學校の設備も整頓するに至り明治三十一年三月には二校を合併して現在の校地に校舍を新築し高岡小學校と稱し後小學校令改正に伴ひ現今の校名に改めたり兒童の通學には河川險路等の支障なきを以て大なる不便あるを認めざるも北吉田部落の久津和は學校との距離約二十五町あるを以て幼年兒童には稍不便を感するが如し

衛生　各部落には衛生組合を設け大清潔法を實施せり

警察及裁判所　警察は松山警察署の管轄にして大字高岡に巡査駐在所あり又裁判所は松山區裁判所の管轄たり

宗教　宗教は佛法にして其宗派には眞言禪宗法華眞宗の四種あり此中眞言宗最も古へより行はれ其信徒も多かりしが近代に至り漸次法華宗を信仰するもの增加し其信徒の數も眞言宗の次位にあり即ち左に各信徒の數を掲ぐ

眞言宗　千二百十八人　法華宗　九百十三人　禪宗　六百十人　眞宗　三百人

神社佛閣　生石八幡大神社は大字高岡八幡山に鎮座あり當生石村の産土神にして思姫命湍津姫命市杵島

生石村誌

姫命足仲彦尊氣長足姫命譽田別尊を祀る古は當社を伊佐爾波岡宮と稱し此岡の東方に相對立せる北齊院高家八幡大神社を高丘八幡大明神と稱したりとぞ而して思姫命瀧津姫命市杵島姫命は上古より垣生山に祭祀ありしを人皇五七六代清和天皇貞觀元年奈良大安寺行教和尚勅命を奉じ宇佐宮に抵り一夏九旬の間參籠し其歸途颶風に遭ひ乘船松前濱に漂著したり時に散位越智宿禰興村行教を浮穴拜志郡別府の館に迎へ十六祠の八幡宮を勸請せしむ此時垣生山城主氏神として尊崇あるや廢營繕を又康平五年國司源頼義仝權介河野親經殿宇を再建す其後垣生山城主氏神として尊崇あるや廢營繕を加へたり然るに河野氏滅亡の後は產子或は願主に於て營繕等をなせり即ち享保二年五月願主神殿を新築せり

履脛天滿宮　は大字久保田字垣の内にあり菅公の靈を祀る此地は菅公筑紫に左遷の途次船を越智郡櫻井濱に寄せ夫より上陸して暫く此所に居給へり朝廷三位中將をして之を追はしむ公即ち履を脫き捨て此地を發して今出港より筑紫に航す此際公自作の天神像を納めらる依て里人此地に神祠を營み履脛天滿宮と稱す其後長保元年九月十四日神殿を建立し保安三年再建す永正元年八月廿五日伊豫守通篤社領を奉る寛文の頃より松山城主深く尊敬せられ本殿拜殿鳥居石橋神器等に至まで造營し毎月社參せられたり以前は生石八幡大神社の末社なりしが明治三十五年無格社となれり陰曆正月廿五日には諸方より參詣多し

寶物

金香籠	一器	鵬硯	一器
唐工天神繪像		寶劍	四振
天神繪像	一幅		

金刀比羅神社は大字北吉田にあり大物主命を祭る元祿十三年石の鳥居を建造寛和三年造營松山城主俗年正月廿八日直參或は代參あり齋名金毘羅大權現と稱せしが明治二年神佛混淆取分の際改名仝三

年七月社寺閥方升久量平藩命を受け讃岐金刀比羅より神璽を奉じて歸國し本社に鎭祭す以前は生石八幡大神社の末社なりしが明治三十三年無格社となれり毎年陰曆正月三月十月の九日十日は諸方より參拜者ありて賑なり

加茂社　は大字高岡にあり天津彦火瓊々杵尊日本磐余彦尊雷神を祭る元明天皇和銅六年四月山城の加茂社を勸請し社殿を立て水田若干を寄進せらる其後加茂の齊院に仕へし一色兵部大輔源朝臣氏勝と云へる人此地に來り當社に奉仕す寶永年中旱魃の際祈雨祭を行ひて効驗ありし以來祈雨祈晴の祈願をなし其靈驗屢ありしとなり

石槌社　は大字富久に在り石槌神を祭る舊名石鎭王權現と稱せしを明治二年神佛混淆取分の際石槌神社の古名に復したり

高良玉垂神社　は大字南吉田にあり譽田別尊武内宿禰を祭る貞觀年中の勸請なりと稱す生石八幡社の末社なり

三島神社　は大字北吉田にあり大山祇神雷神高靈神を祭る生石八幡社の末社なり聖武天皇神龜五年八月廿三日國司散位玉興玉純に勅して越智郡大三島の分靈を此地に奉齋せしめ給ふ淸和天皇貞觀十五年二月社殿を修繕し不動の倉庫を開て祭費を補助す保元平治以來事廢絕に歸せしが文治元年河野通信伊豫守に任し本領安堵依て社頭を修治し祭事を復興す文永弘安蒙古襲來の時國司(道前)河野對馬守通有國司(道後)河野備後守通純出陣に際し戰勝を祈り凱旋の後神領へ水田を寄進す其後忽和山の主城忽那氏々神として尊崇ありしが忽那氏の亡ぶや神領等なくなれり門神二体狛犬二は今に存して頗る古きものなり

安樂寺　は大字久保田字垣の内にあり眞言宗新義派にして京都護國寺の末寺なり本尊阿彌陀如來一條院御宇長保元年九月十九日の建立にして七十四代鳥羽院の御宇永元二年御祈願所となり勅使を下

生石村誌

し給へり爾來隆替あり境内護摩堂あり本尊十一面觀音菩薩(行基)を安置す又鐘樓堂あり不動明王を安置す

寶物　菅公眞筆額面及其鑑定書並ニ國字序漢字跋聖廟之記

聖廟再興由　菅神廟緣起　普門品紺紙金字

光明寺　は大字久保田字相生にあり眞言宗新義派なり安樂寺を中本山となす本尊は阿彌陀如來なり建立の年月を詳にせすと雖も惠心僧都の開基と稱す享保七年九月十五日に再建あり

大藏寺　は大字高岡字北福町に在り眞言宗新義派にして味生村大字別府淨明院の末寺なり本尊不動明王を安置す延喜元年此里に弓立大藏と云へる人當院を創立せり寶物に弘法大師の筆不動尊像あり

觀音院　は大字寄久字霞籔にあり新義派にして本尊十一面觀音を安置す長德元年惠心僧都之を開基す古文緣起書あり

極樂寺　は大字南吉田才の木にあり禪宗曹洞派にして山越龍泰寺の末社たり本尊釋迦如來なり開宗國師道元禪師より廿一世の法孫龍泰七世水翁禪師寛文十一年二月之を啓立す

圓滿寺　は大字北吉田字馬場條にあり眞言宗新義派にして別府淨明寺の末寺なり本尊阿彌陀如來を安置す

交通　道路は里道にして左記の二あり共に平坦にして交通便なり

三津濱郡中街道　味生村字大可賀より來り本村北吉田南吉田を經て垣生村に通ず長二十五町五間にして幅一間半あり

松山通路　大字南吉田字鯛崎より高岡字鳥の木を經て味生村に通するものは松山への通路にして長十四間五合幅一間三合あり

本村より官衙及隣接村役場への方位並に距離左の如し

縣廳へ	東々北	一里十三町
郡役所へ	仝	一里十一町
味生村役場へ	北々東	二　十　町
余土村役場へ	南々東	二十五町
垣生村役場へ	南々西	二十二町

橋梁　堂の元川の下流南吉田の南端に石橋あり長二間幅一間にして垣生村への通路なり勅使橋は石橋にして千池川の上流久保田より垣生村への通路にあり長一間幅四尺なり

郵便電信　三津濱局の管區にして集配は南吉田は日々二回あるも他の四部落は都て一回なり

生業　農業　本村の生業は主として農業にあるを以て米麥を始め雜穀野菜物の產出少からず而して之が販路は三津濱及松山を主となす左に其主なる種類產額を記す

米	六千九百四十一石	麥	千四百二十五石
蔬菜	五万貫	甘藷	三万五千貫

商業　本村は農業地なるを以て商業に從事するものと雖も副業となすもの多く其中最も產額と賣上高の多きものは造酒と織物なり造酒は百四十石にして其賣上高四千貳百圓又織物は絣を主とし四千五百反にして其賣上高五千四百圓なり

名勝舊跡　勅使橋は久保田にあり頭の三位中將勅使として下向あるや此橋の所にて菅公に謁し勅命を宣り玉へりと云ひ傳ふ

頭の三位中將の墓は久保田にあり藏人頭近衛紀久朝勅使として下向あり此地に卒して葬る古人は此所を政之助屋敷と云へり

垣生山城趾　は高岡と北吉田との間に聳立せる垣生山上にあり道後屋形湯築山の城主散位侍從河野

生石村誌

伊豫守兼左京太夫越智宿禰通宣侯（伊豫守兼兵部太輔通直の息）の大老垣生城主垣生肥前守の居城の跡なり天正年中河野氏亡ぼさるゝや肥前守の嫡子加賀守及仙波左馬介藤原朝刀崎山四郎左衛門關谷經殿介土籠通三二色左衛門尉等の士と城を棄てゝ此間に潛めり爾來荒廢して其趾を存するのみ

忽那城趾　は北吉田の海岸久津和山嶺にあり永祿の頃忽那伯老守通乗及元龜年中河野の將忽那式部少輔通著（河野十八將衆軍大將勤務折敷の間詰軍事代官奉行等兼帶）等の居りし城なり河野氏滅亡の後は家臣寺田左近太夫武市新藏人丹下長左衛門西兵庫允矢野右馬介田阪鎌之助等の士と共に海に航して風早島に逃れたり

垣生肥前守祖先の墳は北吉田にあり昔は竹藪の内環らすに滿々以てし四間四方に二重の石垣ありしを今は里人之を開拓して僅に五輪を殘すのみ

掘桃は古は桃の名所として有名なりしが松山城主此所を鷹場と定め時々鷹狩りの遊びをなせしかば今尚此所を御鷹場とも云へり

人物

村内出身の人にして世に知られて著名なる人は去る明治三十一年に病歿せし大僧正高志大了とす

大了は天保五年七月十一日を以て高岡に生る父を河合伊右衛門といふ大了一兄三妹あり兄善四郎其家を繼で大了は僧となつて高志氏を冒せしなり河合氏世々農を以て業とす且村内屈指の資産家なりき大了天性怜悧にして遊戯常に群童と異るものあり暇あれば村内大藏寺に行きて遊ぶ寺僧又其才を奇とし授くるに讀書を以てし傍修身の要義を教ふ當時已に出塵の志あり年甫めて十六密に家を脱して温泉郡興居島村大字泊弘正寺に行き寺僧と知あるを以て其志を述べ轉して浮穴郡麻生村理正院に入りて僧となる爾來專心教理を修行し終に護國寺に住し其言宗の長者大僧正となるに至れり而して此間に於ける經歷及宗教上に盡せし功績等は三浦中將の塔銘に明なれば左に其寫を載す

故大僧正大了和上塔銘　陸軍中將正三位勲一等子爵三浦梧樓撰並書

和上諱章範字大了伊豫國温泉郡高岡村人河合伊右衛第二子以天保五年七月十一日生幼有出塵之志年甫十六投浮穴郡麻生村理正院章然蓋染爲僧既而加行悉畢嘉永四年冬初登豐山謁永雅僧正六年二月入壇灌頂自示專心勉學捫擲苦節頗有古人之風或或性相源底於眞淨覺了儒老或探野澤祕頗於海如講筵連開論鼓每鳴明治三年就戒增院惠訓長老演具應請業新藥師寺主席三學曲備二利益遇八年選伊豫石手寺大興寺門盛開密壇十一年始來東京補教導職累遷至少教正執宗務於大教院護國寺後海常歎賞其學德兼備而處事亦得宜遂讓主席仍十六年八月晉山無幾寺中有火坊舍燒亡和上刻苦經營漸復舊觀十九年四月開壇傳法七會受者甚多二十四年一月選爲豐山化主兼根來寺座主二十七年六月更選任眞言宗長者補大僧正明年一月奉　勅修秘法恭加持　御衣四月更承　旨以大元帥法祈征清戰勝十月以病辭職退護國寺專事靜養然終不起三十一年八月廿五日溘然結法印而寂世壽六十五僧臘五十非于寺域和上資性溫厚常委身心於護法利人內則計智豐南山和陸外則考新古二義融合大學林之設尤所竭其力野根教和和會合論之著以知其志所在其他功績不可枚數可謂一宗標手兩山柱石而今則亡哀哉銘曰

法身舍利　遺動軍々　勿言石塔　字古菩封

關谷裕　は大字南吉田の農許三郎の次子なり慶應三年六月十五日を以て生る資性沈毅にして寡言能く父母に孝事す歳十五小學校の業を卒へ專ら農業に從事し餘暇を以て讀書に耽る偶感するところありて遊學を志し之を父に請ふ聽されず遂に書を遺して松山中學校に入り拮据勉勵學大に進み衆の尊重する處となる是に於て父の意解け專ら學業を修む明治十九年八月陸軍士官學校に入學し仝廿二年七月業を卒へ砲兵少尉に任ぜられ正八位に叙せらる後陸軍砲工學校卒業に臨み　天皇陛下に山國

に於ける速射砲の効用を奏上せり日清事破れ宣戰の詔勅下るや立見旅團長に從ひ滿韓の野に轉戰し連山關に負傷し遂に癒へず明治二十八年一月大尉に昇進し二月十三日藥石其効なく畢斃す後三十一年十月特旨を以て正五位を贈らる

味生村誌

沿革

味生村の名稱の起因

往昔當村山西部落を總稱して味酒郷といひ南北齊院別府部落を垣生郷といふ町村制施行の際味酒の味と垣生の生とを取り味生村と命名せり南齊院北齊院別府山西の四大字に分たる

大字名の起因

南北齊院は往古從五位下一色大輔源氏勝山城加茂神社の齊院に從事せしが此地に住し八幡大神及び加茂神社を勸請して祀る故に此地を齊院と稱す後世戸口の增加と共に南北兩部落に分れたり

齊院とは第三十八代齊明天皇熟田津の石湯に行幸あらせられたる時此地を通御ありて杭詰池の土手（道路十文字にして今尚存す）に御駐輦あらせられたり依て此地を幸所（みゆきどころ）とも幸舍（みゆきや）ともいひ後幸舍と稱すと又齊明の齊を取り齊院といひ近世之を齋院と改む

別府は人皇四十代聖武天皇の御宇行基菩薩佛法流布の爲め此地に來杖せられ淨梵の靈地として寺を飯岡山に建立す今淨明院長福寺是なり仝菩薩此地を別府と號し數十寺の末寺ありしも大永年間兵燹にかゝり燒失せり

山西は往昔味酒郷に屬し（年號不詳）本郡朝美村の人民此地に移住す此朝美村の西に朝日山唐山等の山峰あり其山の西部に位するを以て山西村と稱すといふ後年に至り人口增殖し分れて清住松惠三本柳の小部落をなし元部落を本村と稱す

大可賀は別に一部落をなせり嘉永年間新田開發以來日に增し人民增殖せり

位置並に境界廣袤　本村は溫泉郡の西部に位し東は朝美村の南江戸、辻、澤及び衣山に接し西は生石村の北吉田と海に接し南は雄群村の針田並に生石村の富久部落と相連る其廣袤東西廿八町南北三十丁南北齋院別府山西の四部落よりなり略菱形をなす

總面積　五百五十九町二反六畝〇七歩

內譯

田	三百四十三町九反九畝廿八歩
畑	五十五町八反八畝〇一歩
宅地	二十五町二反九畝〇四歩
山林	百三十二町九反八畝一歩
牆田	四反〇廿八歩
雜種地	六反九畝廿一歩（原野）
池沼	十六歩

海岸線　海岸線は南生石村の北吉田字轡山の麓より北古三津村字小松原まで此延長十九町四十一間あり

港灣　大可賀港

本村の西北隅にあり明治九年以前は貢米の積出港にして大船特に碇泊せしも現今は漁舟石船の類時に風波を避ぐるにあるのみ

島嶼　なし

味生村誌

去りながら大字山西の内大可賀海岸を距る凡そ三町の海面に暗礁形の磯島あり佐島といふ滿潮の際は僅かに頭角を顯はすのみなれども干潮の時は東西一丁餘南北三町餘の面積あり魚漁採藻の利に富み春季遊客甚だ多し

海峽岬角　なし

潮汐及び潮流

高低の差　一間半（九尺）八朔潮は総て二間を増加す

急流大可賀佐島の間にあり（百二十間）（八十間）一分時間に百十間の流勢なり

地勢　本村は東北より西南に延長し概ね平坦なれども東北は岡陵駢列壘々波濤の如く又一列の小丘西南海岸に隆起す

山誌　東北の丘陵は自然に村界をなし又別に西海岸地方には林丘起伏せり総て是等は小松を以て蔽はれ稀に赭山あり

岩子山　は村の中央大字北齋院字國松の正東に聳へ其脈北に走り石が峠に連なる

石が峠　は本村大字山西の東南隅朝美村の境に聳へ山頂の平圓なる所を馬乘崎と稱す

垣生山　は村の西南隅にありて生石村の境に聳ゆ

權現山　は其東にあり生石村の境に跨る

津田山　は本村大字別府の西境に聳へ山頂を大隅の峠と稱す其脈西に走りて生石村大字北吉田に跨る

水誌　河流は総て細流にして灌漑には便なれども舟楫の利一もあるなし

齋院樋川　は石手川の支流にして松山市を横斷せる中の川の下流なり雄群朝美の兩村を經て東朝美の境に於て大寶寺川の下流江戸川と合し村の東南を環流し字三本柳に出で古三津村を通過し三津濱

町字小深里に至り海に入る

池沼　池沼は皆人工的のものにして大ならず東谷池、津田池、奥山田池、大木谷池等ありて田養水の溜池なり

鍾乳洞　なし

窟　岩子と稱して本村大字北齋院岩子山の山腹凡そ九合目にあり自然の岩窟にして時の城主奥田長房の殘黨棲息せし跡なりと而して其形狀等は知るに由なきも口碑の傳ふる處に依れば奥行凡そ一丁半位のものなりと

拓田　本村の西北部（大字山西字西濱）にあり西濱と稱す安永三年舊松山藩の開發に係る藩の手濱にして安永茂八製鹽請負をなし居りしが廢藩の際同人へ拂ひ下げられ後明治七年十二月藤岡勘三郎へ賣却し其後明治三十六年十二月松山人岡田賴言之を買ひ現今も同人の所有に屬す

新田　大可賀新田の起因

大可賀新田は嘉永五壬子年舊藩郡司奥平貞幹氏の獻策に依りて工を起し里正を始め有志の輔佐を得て遂に大事業を果し數項の良田を起せり時の藩主其竣工を喜び大に賀すべしと賞せられしを以て之を地名とせしといふ而して其面積及び堤防の長さ等を掲ぐれば

面積

田　五十一町三反三畝一歩

畑　十一町八反六畝歩

雜種地　一町三反九畝十二歩

郡村宅地　二町八反六畝廿一歩

堤防の長さ等

味生村誌

大字山西の内大可賀本堤の一

仝上北の二	本堤	四百廿一間五分	高四間幅一間五分
仝上東の三	扣石垣	高一間八分幅五分	砂幅六間
仝	五百間	高三間幅一間五分	
仝	仝高八分幅四分	砂幅十間一分	
仝上東の三	二百廿一間	高三間幅一間四分	
仝	仝高一間八分幅五分	砂幅六間一分	
本堤の内砂濱	三十九間	砂幅三間	
仝上字國水門（イ）	水門	高三間幅一間五分	
仝上字高砂水門（ロ）	敷石中二間三分長八間	袖石垣	高三間幅一間長八間 腰卷高一間幅五分長十間
仝	高三間幅三間二分五厘		
仝上 （ハ）	長四間		
仝	敷石 幅三間二分五厘長十三間	袖石垣 幅一間長十七間高三間 腰卷 高一間幅五分長廿間	
仝	高三間幅二間六分長三間八分		
仝上字高砂西高砂石出の一	敷石 幅三間長十一間五分	袖石垣 高三間幅一間長十五間 腰卷幅六分高一間長廿間	
仝上の二	砂留石出し	高二間五分幅二間長廿一間	
仝	高二間五分幅二間長廿一間		
仝上の三	仝	高二間五分幅二間長廿一間	
仝	高二間五分幅二間長廿一間		
仝上の四	仝	高二間五分幅二間長廿一間	
仝上の五	仝	高二間八分幅三間五分長廿四間	

仝上桐生石出しの六

仝 七	仝	高二間二分幅一間五分長十三間	
仝上字高砂	仝	高二間幅一間三分長十五間	
	涙切り石出し	高二間八分幅二間長十三間	

沿革　然るに明治十七年八月廿五日大暴風雨の爲め全部落の人家悉く破壞し人畜の害殊に甚し時の當局之れを憂ひ直に復舊工事に着手せられ翌十八年十二月竣工す

地質及び作付種類　地質は砂土にして作物は米を始め甘藷芋其他野菜類に適す

氣候　酷暑三十二三度　酷寒四度乃至五度

氣候は溫暖殊に大可賀及び別府部落は西部一帶浩々たる西海に面するを以て冷氣常に襲來し從て神氣壯快なり

地質　壤土質其大部分を占め粘土交り之に次ぐ砂土も亦少なからず

天産物　大字南齋院字岩子より石材を産す名けて岩子石と云ふ質甚だ堅からずと雖も諸般の用に適す一ケ年の産額一万貫以上とす

區劃及び政治

大字名	地積（段別）	小字名稱	
南齋院	一四一九、三二九	土居 中屋 西側	大正寺 中津 國松
北齋院	一五九〇、二二五	御產所 本村 清水	松江 本村 清住 大可賀
別府	八五一、四一四		
山西	一七三一、四二九		
合計	五五九二、四〇七		

味生村誌

本村役場位置味生村大字北齋院字國松の西

戸數　全村の戸數は六百十九戸にして其内譯左の如し

村會議員數十二名内譯南齋院四名北齋院四名別府一名山西三名

南齋院　百五十八戸　北齋院　百四十二戸

別府　八十二戸　山西　二百三十七戸

人口　人口の總數は三千五十六人にして内男千四百八十七人女千五百六十九人寄留民は男五十人女六十三人なり

人情風俗　南部は質素にして よく勤勞に堪へ北部は稍々進取の氣に富み半農半商の風あり習慣風俗普通禮法の如きは他地方に異ることなし而して總戸數六百餘戸の内百戸は生活豊にして家屋の如きも比較的立派にして少なくも土藏一棟及び大なる門戸を搆ふ而して其他の凡そ百戸は所謂中流にして獨立獨歩農業を以て家計を營む其餘は小作人にして傍ら商工の行商を兼ね常に勞働を以て口糊を凌ぐものにして衣食等の如きも實に粗品を以て甘んずるものなり

教育　本村大字齋院には明治維新前には神官都子野伊賀守全安房守の宅に於て寺子屋教育をなし明治七年に至り齋院學校創立全二十年三月廢校全年四月大字山西々府小學校と合併國松小學校となり全二十三年齋院尋常小學校となり南北齋院及び別府部落の子弟通學せり

本村大字山西には明治維新前には神官田内和泉守の宅に於て寺子屋教育をなし後三津又古三津村神官の宅へ通學す明治七年九月西府小學校創立全二十年三月廢校全年四月大字齋院の齋院小學校と合併國松小學校となり全廿三年齋院尋常小學校分教場となり全廿五年八月三本柳尋常小學校となる

右の如く本村には爾尋常小學校と隣村古三津村との組合立高等小學校ありて教育大に進歩せり加ふるに齋院には農業補習學校山西には夜學校ありて勉學するもの頗る多し

衛生　避病舍は大字別府石原にあり患者二十餘名を入るべく衛生組合を設けて各大字に組合長を置き清潔法の勵行に勉む

警察署裁判所等官衙　三津警察署味生村巡査駐在所は大字北齋院字國松本村々役場の隣りにあり（其他官衙なし）

宗教　宗教は重に眞宗にして眞宗禪宗あれども少し

神社佛閣　村社福水大明神社は大字別府にあり社地を立産の森と稱す祭神は高皇産靈尊魂産尊足産靈尊の四神なり往時神功皇后三韓征伐の歸途皇子御降誕の御時此海濱に御著船御上陸遊ばされ初湯の水を授け給ふ里人此地に社を建て福水大明神と號したり後年越前守藤原爲時の御傑中子なきを憂慮し神に祈る神託あり伊豫立産福水に祈るべしと是に於て人を此地に遣はし社地の白砂を執らせ臥床に置かしめ姙娠して女子を産む即ち紫式部なり後此地を御産所と稱す（以上福水神社傳記）

村社飯岡大明神社　は大字別府にあり社地を飯岡山と稱す祭神は大日靈尊猿田彦大神宇賀の御玉神若玉神保食神の五神なり文武天皇の御宇役の小角伊豫に下り當地岡上に登り四方を眺望して誠に景色の宜しき處にこそ此處自ら飯粒の形をなせり之れ五穀神を鎮座すべき地なりと麓に下り潔齋沐浴して五穀祭を行ふ或夜宇賀魂の神稻種を老人に授け毎年欠典なくは地方を陸田とすべしと時の國主幣帛を奉り祈誓す日ならずして潮自ら退きしを以て潮止めを築き陸田となす是より河野家より毎年玄米十石を五穀祭料として献納せらる（飯岡神社々記）

村社高家八幡大神社　は大字北齋院にあり阿蘇山又朝山と稱す祭神は健盤龍神品陀和氣命帶中比古命息長帶比賣命の四女神にして往古山城國加茂大神齋院に侍する從五位下一色式部大輔源朝臣氏勝當地に居住し八幡大神加茂大明神とに奉仕す依て山名を阿蘇山といふ後世誤て朝山と云ふ此山の西

味生村誌

に當れるを烏山と云ふ此山上に舉田天皇奉齋元暦元年神託によりて仲哀天皇神功皇后二柱を勸請文治二年宮殿再興其後正治二年正月十日火災により朝山阿蘇大神と合祀朝山高家八幡と稱す終に阿蘇山の舊號を失ひ高家八幡大神と稱す康永元年二月伊豫の國主河野新三郎宮殿を再興すと（以上全社傳記）

大宮神社　は大字南齋院字西側にあり往古大宮又五郎と云ふ武士あり或る劍客の爲めに殺さる其臣共死骸を此小丘に埋葬せり後里人此地を發掘して刀劍を得之れを自家に祭る一夜里人に神託あり依て此丘上に祠を建て其刀劍を奉納せりといふ（以上古老の傳）

村社日吉神社　は大字南齋院字上宮内にあり祭神は大山昨神大己貴神猿田彦神の三神と他に二十神を配祀せり弘仁十年始めて稱山王とあり又弘仁十一年近江國滋賀郡坂本村に鎮座する日吉神社を此幸舍の名ある處に奉齋したるものにて此宮所上宮の内と稱するは全く近江大宮二宮の名を基としたるものなり古歌にも（近江なる小比叡の山をいつしかとうつしまつれる此宮所）とあり而して古くは山王二十一社とも山王權現社とも稱し奉りしが王政維新より日吉神社と稱す

村社清水八幡大神社　は大字別府字清水にあり祭神は應神天皇仲哀天皇神功皇后竹内大臣玉撰姫臣の五神を鎮座す人皇十四代仲哀天皇の御宇神功皇后御渡韓の際當所より十町八坂浪といふ所に奉せられ此處に鎧の脇當を納め給ふ是より脇宮八幡大神と號すといふ（全社記）

朝日八幡末社地主神社　は大字山西字城の山一に天皇山にあり祭神は地主權現牛頭天王を合祀す

眞言宗淨明院長福寺　は大字別府にあり山號を仮岡山と號し人皇四十五代聖武天皇の御宇行基菩薩佛法流布の爲め此地に來杖せられ此淨梵の靈地を卜して寺を建立せらる本尊は藥師如來にして全菩薩の作なり國守河野家の尊崇高く元祿年間舊松山の城主松平家温泉郡の祈願所となせらる本堂並に客殿共普請當郡搗ひとなる寶物は不動明王の畫像一幅（紙地彩色弘法大師の筆）五大明王の畫（絹地彩色畫與

敎大師墨跡）

制札　淨明院右軍勢甲乙人等濫妨狼藉事堅加制止事若違犯族者可處嚴科の狀如件大永四年十月十五日道直在判

棟札　元祿七年本堂並に弱子再建温泉郡中大壇那舊松山の城主松平定直公發願主御用人山田四郎兵衛御代官田邊傳右衛門現住法印眞海代

眞言宗常福寺　は大字山西字打越にあり南光山普門院と號す淨明院の末寺なり長久元年の開基にして人皇四十六代聖武天皇の御宇行基菩薩御自ら此尊像十一面觀世音を彫刻あり是より三丁西田中に小堂を建立せられ開服供養あり爰に當寺開山沙門機入東地主權現の社頭は淨淨の靈地なりとて此處に安置す今の常福寺是なり

大德寺　は大字北齋院にあり淨明院の末寺なり本尊は阿彌陀如來にして聖德太子の御作なりと云ふ其昔當庄岩子山に古城あり城主一色姓の祈願所なりし由緒は元和安永年間兩度の火災の爲めに燒失して詳ならず

寶藏寺　は大字南齋院にあり淨明院の末寺なり本尊は地藏大菩薩にして由緒不詳

交通（イ）道路　三津濱町より味生古三津朝美の三村を經て松山市に通ずる縣道を松山街道といふ長さ十五町幅四間にして人馬の往來貨物の運輸極めて繁し本道は慶長年間加藤左馬允嘉明松前より勝山へ移城の際築造せしものにして當時は幅三間弱其兩側に各幅一間高さ三尺の堤塘を作り之に櫨及び松樹を點植せしかば櫨の紅葉する時は其美實はん方なし又夏期には旅人の松樹下に息ふもの多かりしと然るに明治五年廢藩置縣の際双方の堤塘を破壞して道幅を增し縣道に改作せらるゝに至る從て以前の並木は次第に枯凋し現今にては僅に松樹の所々に點々するを見るのみ

三津濱町より大字山西字大可賀及び生石村大字北吉田を經て郡中に至る里道を郡中街道と稱す長さ十町三十間幅三間あり以前は僅に海濱に一小路の通じ居るのみなりしが嘉永年間舊藩郡司奥平貞幹

味生村誌

同村里正一色義十郎の兩氏新田開設の際現今の如く開墾せしものなりと

縣道筋大字山西字三本柳より南に岐れ別府を經て土橋口に通ずる里道を土橋街道と云ふ長さ十町三十間にして幅一間半あり

大字山西及び別府より北齋院を經て南齋院に至り生石村大字高岡の村界に沿ひ仝村大字宮久に通ずる里道を用合街道といふ長さ三十町にして幅一間二合あり

縣道より北に岐れ大字山西字本村の人家の中央を北に古三津村に通ずる里道を津城道といふ長さ二町餘幅一間半あり

本村役場より官衙及び町村役場への里程左の如し

縣廳へ	正東	一里十町	郡役所へ	東	一里六町
三津濱町へ	北西	三十二町	古三津村へ	北	十八町
朝美村へ	東	二十町	生石村へ	南西	十八町

(ロ) 橋梁

名稱		種別		所在
新井手橋	石	幅一間	長四間	齋院樋川筋に架す
山王橋	仝	仝七尺	仝四間	仝川筋桑木にあり
井内地橋	仝	仝五尺	仝二間半	西側にあり
金比羅橋	仝	仝五尺	仝四間	北齋院樋の脇にあり
津田橋	仝	仝二間半	仝五尺	仝
御產所橋	仝	仝四尺	仝四間	御產所にあり
三本柳橋	仝	仝一間	仝四間	三本柳にあり

其他大字山西縣道筋字松江より山濱田に至るの間幅三尺乃至四尺長四間の石造の橋十一ヶ所あり

(ハ) 郵便電信　三津濱郵便局の區域内にして集配一日二度なり

(ニ) 鐵道　伊豫鐵道株式會社の私設線路あり明治廿一年十月の布設にして長二哩あり

生業　(イ) 農業　農產物の種類は米麥雜穀其他野菜類にして其狀況は小作七歩自作三歩にして穀類は重に三津濱に蔬菜は三津松山南藝に販賣す但し穀類の輸出地は重に廣嶋地方にして其產額は

米　六千六十五石三斗一升八合　麥　二千六十六石七斗五合

雜穀　三十三石二斗

別に農事試驗場を云ふが如き機關は備はらざれども村農會の事業として明治三十四年四月より十ケ所の試作地(二反一畝十五歩)を設け農事改良の資に供せり

(ロ) 水產業　附製鹽　別に漁獲等の利なしと雖も大可賀附近に於て採藻をなすこと毎年數千貫千製鹽は古三津村製鹽所に於て合製するを以て其狀況數量等詳ならず

(ハ) 商業　織物仲買鹽野菜の行商を初めとし綿染業穀物商果實菓子小賣等にして工業は大工左官石築業等にして別に記するに足るものなし

財政　本村は農村にして傍伊豫絣の製造を業とするもの多し而して本村は敢て富裕なるにはあらざれども貧民なく從て村經濟としても將個人としても郡内中位以上にあるべし而して稅源は農產物を主とす

名勝舊蹟　產砂森は大字別府字御產所福水大明神社の境内最高の勝地にして青松繁茂し風光明媚なり

大可賀新田は大字山西にあり埠頭長く海中に延び鬱山其西南に屹立し海岸は白砂連亙干潮の際は老幼男女つどひ集り漁をなし其景色絶佳なり

朝美村誌

岩子山の城趾は岩子山の頂に在りて奥田長房の古城趾なり岩窟あり老樹繁り山腹には岩子石と稱する石材を出す又一說に岩子山城には一に大空城といふ南北朝の時代細川家の將完草入道居城せり眞治二年河野通堯九州より歸國し花見山を取り此城を攻め落し完草入道父子自殺せり其墓は一本の柿の木其印なりと云ふ

大字南齋院字宮の内日吉神社より二丁餘南に杭結といふ池あり此池は慶長年間松前城を勝山に移す時此里の河筋を今の石手川に附け換ふ時役掛り人足共等皆此淵に身を清め朝夕日吉神社に祈誓して其成功を奏したること諸記に見ゆ此淵は後堤を築き池となし今尚存す里人呼で杭結の池又祓の池ともいふ長十二間幅三間三尺あり齋明天皇熱田津の石湯に行幸ありし時此淵の堤に息はせられたり里人桃樹を以て几器を製し奉る天皇此器を用ひられ終りて之を投棄せらる後此器に芽を生じ果を結ぶ里人之より桃樹を絶せしことなしと云ふ所以ある哉此堤を御器屋と云ふ

口碑　大字北齋院字國松に國松の井と稱するあり岩石を穿てる井なり部落民皆此井水を以て飲料水とす傳へ曰ふ天明年間大旱あり地方其害を被る殊に甚し田圃は已に枯れ住民は將に餓死せんとす一農あり呼で彌六といふ性律義にして大ひに衆望あり神託を受くるど稱し岩石を穿つて七晝夜神水墳出流れて川となり田圃に入ると城主松平家に聞へ褒賞を給はり姓を大泉と下され武士に進めらる

朝美村誌

沿革　朝美村は往古の味酒郷の大部を占め味酒衣山南江戸北江戸山西の五に稱へしが町村制實施の際南江戸辻澤衣山味酒の五大字を以て編制せり而して村名の起因は當村鎮守神朝日八幡宮の頭字と阿沼美神社の尾字とを取り朝美村と命せし者なり

大字名の起因は確に知れたるものなし故に今暫く口碑俗傳を記して後日の明を待つのみ

衣山　古の衣山村なり此地に衣山あるを以て名つく衣山は「キヌ山」と訓す昔此山の東に寺あり名僧住めり一年旱魃の爲めに雨を祈りけるに忽ち急雨來り晴著の干したるを流せしとかされど万民の喜び限りなく是より誰云ふとなく衣山と呼びしと古跡志に見へたり

味酒　味酒郷の中心なりしを以て名づく古の味酒村なり

辻、澤　此地方は昔の北江戸村にして共に命名の起因を知らず只言ふ辻は人家既に連りて四辻をなし澤は未だ沼澤の地たりしより然かいひしならんと

南江戸　古の江戸村の地にして北江戸に對して南と命せしなり江戸の起りは石手川が江となり此地方に樋の設けなどありて所謂江の門戸を爲せしより斯くいひ來りし者なるべし

位置及境域　溫泉郡の西部樞要の地位を占め松山市に聯接し三津濱町道後湯之町への往來交通の衝に當る東は松山市(葢町)に接し東北は松山市(木屋町三津口町淸水町)及御幸村に隣り西は味生村(大字北齋院山西)に南は雄群村(大字生石竹原)に北は久枝村(大字久万)に境を絡へり

廣袤　本村東は大字味酒(小字淸水)西大字衣山の(小字三郎)端に至る一里十一町南は大字南江戸(小字生石)より北大字衣山(小字宮の下)に至るまで三十一町あり

面積　本村の總地積は四百三十六町餘反歩にして其細別左の如し

田	二百九十一町九反六畝歩	
畑	三十二町七反六畝廿七歩	
宅地	二十四町二反二畝十二歩	
山林	七十二町三反六畝一歩	
雜種地	十四町八反八畝十八歩	

朝美村誌

地勢 本村の地形は不完全なる凹字形をなし中央部より東北南は地位平坦にして田圃開け殖産蔬菜の利に富めども西北部は江戸山の支脈連亙して一は味生村の大字北齋院に至り一は全じく別府に亘り唐山と其支脈とは久枝村の大字久万に連る故を以て大字衣山辻澤南江戸の部落は山趾を周りて家居を搆へ山間の平窪地に點々たる耕地を見る然れども近來山腹以下は開墾して畑となし古谷又は峠と呼びたりし所も今は只其跡形を存するに過きず

山誌 本村は所謂道後平野の末端地に位すれば高山峻嶽なし然れども江戸山唐山の二山ありて西部諸村に亘る小山巒の起點をなし其脈延びて海に迫る其他は概ね丘陵なり

江戸山 は南江戸にあり北の方辻澤より西味生村に跨る其松山市の西に位するを以て一に又西山と呼ぶ本村第一の高山にして其麓曙橋より頂上千疊敷に至るまで昇り六町餘直立尺一町餘周圍一里に餘る樹木青翠花卉に富み四時杖を曳くもの絶へず殊に彌生櫻花の綻ぶる頃は雅俗老幼手を携へ行厨を腰にし思ひ〳〵に茅花を摘み草花を手折り薄暮尚弦歌の聲を聞く滿山名所古跡を以て塡められ麓に有名なる神社佛閣多し山名の起因は村名に因みて云へるものにて山の西部(味生村)より粘板岩を發掘す全山赤土より成れり

唐山 は大字衣山にあり一に和氣寺山又金比羅山と云ふ本村第二の高山にて其城延びて久枝村に至る昇り三町餘直立尺四十間あり山腹に金比羅宮あり春秋二季の祭典には遠近より賽客集ひ來り時に餘興の催あり頂上は海の見晴し極めて佳なり土質は総て江戸山に仝じ

朝日谷 は江戸山の前面辻澤南江戸の境にあり此邊樹木茂り草深し谷を降れば朝日池あり古此池に朝日神社のありしを以て名づく今は共同墓地となれり

八幡谷權現谷 は其地に奉祀せし神名に因みたるものなり其に江戸山の北面にあり傳へ云ふ此八幡宮の近邊に大なる岩ありて岩面に赤子の足跡あり毎夜赤子の泣聲を聞きしと現に谷北の部落を赤子

と呼ぶ其岩は十數年前誰人かに取り去られ今は其跡を留めず

地藏坂は衣山にあり今此地方を地藏の本と呼ぶ元松山市三十六町に三体の大地藏ありしが其一を此地に移して暫く祭祀せり(今は衣山圓通寺境内にあり)斯る丙ありて地藏坂の稱あり三津街道八町畷より字澤分れに至る昇降殆んど二町餘今や概平坦に歸し車馬の往來難を訴へず石原坂は衣山隧道附近字三郎といふ所にあり舊江戸山支と唐山支と連接せしものなるべく之を切り開きて曙新道をしつらひたるものにて今を去る十數年前までは尚岩石の凸起ありて人馬の往來を妨げたりといふされど現時は殆と平地の樣をなし勾配僅かに一二間なるのみ

水誌 本村には名たる河流なし何れも大河の支流を謂するに止る就中稍名あるものは北に清水川(大法寺川又江戸川といふ)南に土橋川を擧ぐべし

清水川 は石手川の支流にして幅二間餘水淺く〻して大雨の後にあらざれば濁流を見ず大字味酒辻澤南江戸の四部落を流る其小字清水を流るゝ間を清水川と呼び辻澤に至りて大法寺川と稱へ南江戸の境より江戸川といひ流れて味生村の北齋院に至り土橋川と合し二筋の細流となり一は三津地方へ一は生石村地方へ流れ共に海に注ぐ

古老云ふ今より五十年程前には現時の如く車馬の通ひもなき時とて下郷より藩主へ上納すべき貢米など小舟を以て此川を溯り松山市の出口まで屆け居たり此際には深さ三間に餘り常に清流を湛へたりしも御後淺渠を怠りたるより遂に今の如きに至りしなりと

土橋川 は全じく石手川の支流にして松山市を流るゝ中の川の下流なる川幅廣き所三間に餘る水淺けれども大旱にも涸れず大字南江戸の南部を流れ味生村の北齋院に至り江戸川と合す以上の二川共に灌漑の便に供す

池沼 重なるものは江戸堀朝日池法塔寺池安城寺池新池古池金比羅池等とす何れも灌漑用に穿ち

朝美村誌

たるものにして成因沿革更に之を知るに緒なし

江戸堀　は面積二町歩の大池にして本村南江戸が味生村に接するの界にあり池の中央を以て村界となす深さ五間餘鯉鰌の類を産す

朝日池　は朝日谷の此にあり略三角形をなす周囲三十間深さ四間毎年水涸れ産魚を止めず安城寺池は澤と赤子の中間にあり此邊池沼多けれども此池を以て押すべし周り三十五間深さ三間あり今より凡百年以前に安城寺持の田面に灌ぐの用に穿ちしものなり

古池新池は共に衣山にあり古池は周り二百五十五間新池は百十六間あり深さ各四間産魚甚少し

氣候　本村の氣候は二部に分つを得べし大字味酒は松山市に交入接續するを以て寒暖の度松山市に仝し大字南江戸辻澤衣山は山麓を廻りて部落をなす故に寒暑共に山の影闇を蒙る夏は江戸山唐山の松に殘り上涼風軟に南西方より吹き來り避暑は此地に適すべく冬は西山風身に凍みて堀江沖よりの「あなじ」風と共に顔をば劈くべし

されど茲には全村を通じたるものを擧げん其月々に於ける平均温度は左の如し（三十六年調）

一月	六度	二月	十度	三月	十二度	四月	十八度				
五月	廿一度	六月	廿二度	七月	廿五度	八月	三十一度				
九月	廿七度	十月	二十度	十一月	十五度	十二月	十一度				

而して氣温は一年に於て北半球にては八月を以て最高時季とし一月を以て最低の時季とすれば更に左の如く見做すこと得べし

最高温度　三十一度　最低温度　六度　平均温度　十八度

風は三月九月に最も多く薩潮二八月といひて農家の忌むべき暴風の襲來することあり通常夏時は南西（マジ）より吹き冬時は北西風（アナジ）又北東風（コチ）を以て定風とすれども又日々に朝暮に異ること多きは温帶地方に常に見る處なれば茲には之を載せ難し

雨量の最多期は六月及び九月なり殊に六月は梅雨とて氣候不順温度の上昇と共に氣流の上騰を來し微弱なる數多の低氣壓を生ずこの如く消滅新成已むことなきを以て降雨霏々として連日開けざることあり其他二三月の頃春雨とて細雨瀬々降ることあり雪は一年中見ざることあり偶積雪を見るも僅かに二三寸に過ぎず嚴寒空模樣怪しくなるの日多く霰を降らす

地質　本村の地質は詳に知るを得ざれども地殼地層の有樣によりて略水成岩の漂積土壌より成れることを知る

山は概ね赤土より成り松柏樹多し

大字味酒の地は埴土壌土の中間より成り蔬菜に適し大字南江戸は砂土壌土より成り稻麥に適し

大字辻澤衣山は塊土埴土より成り多く稻麥を栽ゆ

要するに南江戸の地は石手川の浸潤せし地なれば地質河邊を整るに等しく淳田さへありて腐敗の植物を蓄積し一日昔時を回想することを得れども衣山が太古海濱なりしとの口碑は地質上に於て受取り難し

天産物及其分布　天産の植物は山地に於て松柏科に屬するものを以て森林をなせども伐採の爲か良材に乏し

礦物は江戸山より出づる粘板岩（味生村）衣山附近の土とす（壌赤土）此地の赤土は燒物に適し瓦火鉢の類をして今戸燒に似せしめ以て生業を營むもの多く又壁塗の材として遠近に積出す量夥し

古昔此附近にて「ハンド」燒なるものを製造したりしは僅に知る處にして今に「ハンド」山と稱する丘陵あり

區劃及政治　本村を大別して五大字とし大字辻に村役場を置く村會議員の數は十二名あり未村是の調査な

し

戸數　全村の戸數は六百五十六戸にして之を各大字別にすれば左の如し

味酒	二百四十三戸	衣山	百三戸
澤	五十二戸	南江戸	百六十七戸
		辻	九十一戸

人口　人口の惣數は三千四百七十一人にして內男千七百十五人女千七百五十六人あり更に之を分てば原籍民千七百十五人寄留民千七百五十六人なりとす

人情風俗　氣質は朴實にして言語は略松山市風の言語を用ひ別に方言訛言等の記すべきものなく習慣普通禮法等普通にして是亦特に記すべきことなく衣服は流行を追ふの風あり併し餘り華美に流れず其他普通にして記すべきものなし

教育　學校としては村立朝日尋常小學校あり明治九年一月十日の創立にして其當時は溫泉郡第六大區五十一小區北江戸の內字澤の安城寺に假設せしものにて南江戸北江戸生石衣山の四部落を以て一區城とせしなり然るに明治十六年四月廿二日北江戸の內字澤へ秀麟校を創立して本校とし南江戸へ分校を設けありしが明治二十年五月四日朝日尋常小學校となれり通學區域は本村一圓にして高等科生は松山市へ依托せり

衛生　避病舍は大字澤寶塔寺の北にあり明治三十四年の建築なり衛生組合は大字毎に組合を設け組長副組長を置き衛生上の事務を司らしめ清潔法は春秋兩度大清潔法を實行せしめ役場並に駐在巡査協力して檢査をなしつゝあり

警察及裁判所　大字辻に朝美村駐在所あり松山警察署の管轄に屬せり

神社佛閣　朝日八幡大神は大字南江戸にあり持統天皇の御宇創建す元は字八幡谷に鎭座ましゝ延文六年正月修理す平範有今の地に移し山崎八幡大神と改め稻荷神社へ合祀し明治三十五年一月回祿の災に罹り今は境外なる稻荷神社へ合祀

至り朝日八幡大神と改稱したりしが明治三十五年一月回祿の災に罹り今は境外なる稻荷神社へ合祀あり

山內神社　は大字南江戸にあり松山の藩士山內與右衛門の靈を祭る毎年三月廿三日其祭禮を行ふ

大寶寺　は大字南江戸にあり靈照山藥王院大寶寺と稱す當寺は再度の火災にて數株の櫻樹燒失し漸く一樹殘れるのみ昔崇德院讃岐より此地へ行幸の時御車を返し櫻を叡覽ありて「名にしおはゞまたも來て見ん花の春夕影殘す雪の古寺」と御製ありしは此寺にて之より古寺とも云ひならはせり此寺の上の山を花見山といふも櫻花によりたる名なり堂前の櫻を姥櫻と稱し春季の候觀櫻者の來遊甚多し大寶元年是に植う傳へいふ姥ありし乳なきを憂ひ此寺に來り祈りて歸る其際堂前の櫻を折りたるに忽ち乳汁出でしにより之を嬰兒に含ましめ漸く飢を免れたるにより爾來姥櫻と稱すといふ當寺に安置せる釋迦如來の像阿彌陀如來の像は國寶の一に數へられ明治三十三年六月內務省より修繕を施さる其費額三百八圓七十九錢を要したり尙本堂は三百年以前の造營にして保存を要するものなりとて明治二十二年二月九日內務省より保存金壹百圓を下賜せられたり

十輪院　は眞言宗豐山派なり抑當院の由緒は今を去る二千有餘年前行基菩薩の志願に基き當村の中央に創立し本尊地藏菩薩並に閻魔大王を安置し堵谷山十輪院地藏寺と號す桓武天皇の御宇延曆二十年日本帝國にて三体の一なる寶器愛染明王を賜はり信者之を米吹愛染明王と稱するに至れり其後屢々火災に罹り堂宇再建の機會なし檀徒六十人あり

寶積坊　は大字南江戸にあり眞言宗にして天平年中里人丸山に於て黃金の觀音像を拾ひしより此寺を建てしといふ當院にも姥櫻の株分けせし者あり

寶塔寺　は大字辻にあり寬永中蒲生家長の臣上坂勘解由當寺を創立し寶塔寺と號す明治五年廢寺となり今は只一宇の堂を存するのみ堂內に五重の塔あり其下に日蓮上人の遺齒を埋め居れりと毎年舊

朝美村誌

三月廿八日祭祀を執行す參詣者多く頗る賑ふ

交通（イ）道路　一の縣道あり八丁嶺をいふ幅四間にして延長十五町東は松山市に西は三津濱に通ず其他は狹小なる里道のみなれども交通便利なり

本村より諸官衙及村役場への方位距離等左の如し

縣廳へ	東南	十八丁
温泉郡役所へ	仝	十七丁
雄群村役場へ	南	二十丁
味生村役場へ	西	十八丁
久枝村役場へ	北	二十四丁
御幸村役場へ	東北	二十丁
道後村役場へ	仝	壹里
松山市役所へ	東南	十三丁

（ロ）鐵道　伊豫鉄道線路本村東部より西に彎曲し八丁嶺に沿ふ其延長三十八丁餘古町停車場は大字味酒にあり

（ハ）郵便電信　松山局の區内にして郵便は一日一度の集配なるのみ甚不便なり電信は古町停車場に附設せらる

生業　本村の主要なる農産物は米麥にして其産額米は七千六百九十六石麥は六千七百八石二斗にして松山市及三津濱町等に販賣す本村に一の果樹園あり園主は大字辻三好馬之亮にて其園を旭谷園と稱し桃林檎梨等を植う其反別三町餘あり

工業には一の紡績會社大字味酒にあり明治二十五年十一月の創立にして産額四千二十三俵（一俵は四十九人）なり

財政　村經濟の一般を述ぶれは明治三十九年度の歳入は六千九百五十四圓歳出仝樣にして其税源は地價割營業割所得税附加税營業税附加税戸數割等なり而して各種納税高は明治三十八年度に於ける分壹萬八千七百三十五圓二十一錢なり各種の撰擧有權者數左の如し

衆議院議員	九十六人	縣會議員	百三十九人
郡會議員	百三十九人	村會議員	二百十六人

貯金の有樣　學校生徒の貯金を爲す者五十六人にして金高二十七圓十錢なり之を生徒惣數に分頒せば八錢餘の少額に過きず大に奬勵しつゝあり

古三津村誌

沿革　本村は往古は久枝郷と稱したりしに郷名を廢するの後三津村と名けたるを海岸を埋立て現今の三津濱町の組織せるにより古の字を附して古三津村と稱するに至りしなりと傳ふ其年號等は詳ならず三津の字につきては確實なる記錄等の存在なきを以て詳知すること難けれども或は伊豫王子第三の御子御船を著けしより三津と號すと云ふ此説によれば後に三の假字を用ひたりといひ或は熟田津飽田津就田津の三ツの津を取りて三津と云へるなりとの説もあり

位置及境域　本村は郡の西部にあり舊和氣郡中の一村にして松山の西稍北一里にあり東は字長谷奥より起源し三津越道路に至る山畦田嶺を以て久枝村大字久万に界し西は海岸より起源し紆餘東北に屈曲し稍又西して三津濱町を擁環し南は字長谷奥より起りて海岸に至る山畦田嶺を以て味生村大字山西に

古三津村誌

接し北は三津越に起り字松の木堤に至る田畦及溝渠を以て新濱村に界す

廣袤　東西十五町三十間南北十七町二十間にして周廻二里二十町あり

面積　本村の總地積は二百七十八町六反三畝二十歩にして其内譯左の如し

田	百三十八町八畝十二歩
畑	五十四町八反五畝十七歩
宅地	十二町二畝十二歩
山林	六十六町三畝二十五歩
雜種地	八畝二十四歩
鹽田	三町七反五畝廿三歩
其他	三町七反八畝廿七歩

海岸線　延長五町廿五間あり砂濱にして屈曲なし

港灣　港灣と稱すべきものなく海濱は遠淺にして船舶の碇舶する所なし

潮汐　滿干潮時に於ける差は九尺にして潮流には著しきものなく滿潮には北流し干汐には南流す

地勢　東北には山を負ひ西は海濱に接するを以て西下するに從ひ漸次低下すれども概して平坦なり

山誌　興居島山の餘勢高濱に起りて太山寺山となり夫より起伏して東に走り久枝村字船が谷に於て南に屈し味生村大字山西と本村との境より東折して朝美村大字衣山に亘れり而して山は何れも赭土にして樹木少し遂年開墾して畑となし北部には林檎桃梨等を仕付け東部には柿を多く植付けり

天滿山　は高十五丈にして朝美村大字衣山久枝村大字久万味生村大字山西の境界にあり山脈衣山の唐土山より起り大字久万野津が山に連れり

大明神山　は高九丈周回五町三十間にして村の東南にあり朝美村大字衣山に起り味生村大字山西權現山を界とす

東仙寺山　は高六丈周回十五町村の東に孤立し鄰塚山井留山の支丘あり

福岡山　は高三丈周回八町二十間にして是又村の東にあり山脈久枝村大字久万の久万山に接續せり

高山　は高十五丈周回五町にして村の北方に立てり

船山　は東北に孤立し高一丈五尺周回一町あり

北福岡山　は村の東にあり高三丈五尺周回一町四十間あり

水誌　御稜川は幅十三間深さ一尺より九尺に至る漫流にして滿潮には舟筏を通ず石手川齋院樋及城塚諸溝の末流にして味生村大字山西より來る三ケ所の水門あり流末は新濱村三津濱町の間を流れて海に注ぐ

千本川（センボ）　は幅一間深さ二尺にして本村三津越溝及新池溝の派流合して字塘の下に起り字堀川に至り御稜川に入る

松の木川　は幅二間深さ二尺にして新濱村より來り字松の木に於て船が谷溝と合し本村と新濱村との境を過ぎ今治支道板橋に至り新濱村に入る

以上の諸川流は皆本村水田に灌漑をなす

紹池　は本村の東方久万越にあり東西百間南北百二十間にして水源は大字久万龜ノ甲泉に出で大字久万より來る深さ一丈五尺あり

天滿池　は村の東方字天滿にあり東西二十七間南北二十間にして字天滿の諸溪を入る

勘六池　は村の東方字柳谷にあり東西三間南北三間にして字柳谷の溪流を入る

三津越池　は村の東方にあり東西五十五間南北三十八間にして近傍諸溪の水を入る

長尾池　は新濱村の内本村飛地字長尾谷にあり東西四十三間南北五十間にして字北山の溪流を入る

古三津村誌

東醍醐寺池西醍醐寺池　共に新濱村の内本村飛地にあり東池は東西十五間南北十間西池は東西十間南北八間ありて共に字北山の溪流を入る

盤田　小松縣盤田は俗に御手濱又西濱と稱す舊藩制の頃は藩主の有たりしを以て御手濱の稱あるなり舊御臺場の南數町にありて山西村の盤田と相列べり反別三町七反五畝廿三歩あり

氣候　松山地方と敢て差違なきも土地海濱に接するを以て從て風力强し冬季にありては西北の風殊に烈し溫度は極暑三十六度極寒五度内外を昇降せり

地質　山は火成岩にして花崗石の粉碎したるもの平池は水成岩にして沖積土なり

區劃及政治　本村は單獨の一村にして大字なし本村新立梅田町菊屋堀川の五部落にして村役場は字本村にあり村會議員の數は十一人なり

戸數　戸數は六百四戸あり

人口　人口は三千十七人内男千四百八十八人女千五百廿九人にして更に之を原籍と寄留とに分てば原籍民は二千六百九十七人男千二百五十九人女千四百三十八人にして寄留民は三百二十二人男百九十二人女百二十八人なりとす而して移住民には廣嶋縣人多く皆農業を營み寄留民は本縣人多くして行商又は勞働をなすもの多し而して本村の他村に比し寄留民の多き理由は三津市街にては細民の居住すべき家屋乏しきと公費の負擔重きと借家稅の廉ならざるとに依り自然三津市街と連續せる字堀川菊屋新立梅田町等に住せば勞働者は稼口多く行商をなす者は僅の資本を以て松山及其近在に日用品の行商をなして一家の生計を立て得るを以てなり

人情風俗　前項に述べたる如く堀川菊屋新立梅田町等には寄留民多きを以て氣質輕薄に言語も從て粗野なり然れども字新立の内にて三津通町筋は店舗を開き商業を營むもの多く且大半原籍民なれば三津市街のものと敢て異ることなし從て地理に通せざるものは一般に三津市街と思考せるが如しされば氣質言語共大に三津濱町に近し字本村は寄留民少なく土著の者衆きを以て寄留民の多き部落とは氣質も大に異りて朴實なり

教育　本村には村立古三津尋常小學校一校ありて（高等小學校は味生村と組合にて味生村にあり）本村兒童を收容せり

抑も當校は明治七年十一月一日の設置にして久枝學校と稱したりしが二十年五月簡易科を設置して古三津簡易小學校と改め續て二十五年九月一日尋常科に變更し現在の校名を稱するに至れり

衛生　避病舍は字松原に建設しありて傳染病患者は之に收容することゝせり清潔法は定時の外隨時施行せり

警察及裁判所　本村は三津市街と連續せるを以て駐在所の設ありて三津警察署の直轄にして住吉町派出所詰の警官晝夜數回巡回せり

宗教　宗教には眞宗眞言宗法華宗あり其信徒は眞宗三百十七人眞言宗二千六百九十人法華宗十人にして眞言宗は寺院に於て毎月兩三回づゝ說教をなし法華宗は朝夕大鼓拍子木を擊ちて題目を唱ふる聲喧し

神社佛閣　嚴島神社は字新立に鎭座す當社は昔字東山にあり別當は東仙寺にして瀛津島大明神といひ祭神は瀛津島姬田心姬市杵島姬の三座を祀る崇峻天皇の御宇の創營なるが人皇四十二代文武天皇の御宇四年伊豫大領散位越智宿禰玉興故有て安藝國嚴島より勸請して御津大明神と崇め玉ふ人皇四十六代聖武天皇の御宇神龜三年士人に靈驗ありて神殿の結構を極め士人の尊敬益厚く又夫より人烟追々繁殖す弘安八年九月河野對馬守通有奉祭し本殿幣殿經殿廊門の結構悉く造營す此所を假宮島といふ當時旅所の地なり今之を菊屋島といふ觀應二年足利尊氏西國下向の時釣島沖合に於て難風に遭ひ召船御津浦に難を避く尊氏上陸して大明神に參拜して身一寸八分の銅佛一軀を納め尙熊村の地二町五反を寄進して祈願所とす後慶長五年九月佳原城主平岡遠江守大熊城主戒能備前守等と謀を合せ數千の

古三津村誌

兵を率ひ來りて松前城を攻んとす此時加藤嘉明の留守居佃十成此擧を聞き急に三津浦に出張夜襲して遂に三將を斬る此戰爭に於て本社悉く兵火の爲に灰燼す依て仝七年現今の地に造營して南面とす

久枝神社　は一も記錄等の存在なきを以て由緒等詳ならず

法雲寺　は本村字千本に在り永正五年創營し東仙寺と號す東山の一名今は東仙寺山ともいふ享祿元年今の地に移し西光寺と改む天文十二年四月河野左京太夫晴通を此寺内に葬る法名を法雲寺殿天質宗性大禪定門と號す慶安二年四月改めて法雲寺と號す

義光寺　は本村字中條にあり此寺は當國由里島にありしを此地に移すといふ

各種團体　本村には青年同志會なるものあり村内(本村)青年輩の組織せるものにして其目的は舊來の弊習を除き風儀の改善を謀るにありて事務所を本村義光寺に置き毎年總會を開き尚必要ある場合には臨時に開會することゝし其目的を達せんことを期しつゝあり

交通　(イ)　道路　縣道は三津濱街道と稱し三津濱町より松山に通ずる道路にして三津濱町と味生村大字山西との中間に於て本村を貫通す幅三間ありて兩側には數百年以前に移植せし「センダ」松等の老樹あり道路平坦にして修繕行屆けるを以て滊車に積載せざる貨物は車馬を以て皆本道を通行せり里道は字新立より字本村を過ぎ味生村大字山西に通ずる者あり長十町余にして幅一間乃至二間あり三津松山間を往來するに本道を通行するもの多し本道は字本村に在りては幹道たり次に字堀川より正東に通じ字本村の北方に於て分岐し右すれば久枝村大字久万に出で左すれば仝村大字西長戸に出る里道あり幅狹くして漸く馱馬の通行し得るに過ぎずされども本道は松山に出づるの徑路なれば往來少からず次に三津濱町より本村字堀川を經て新濱村に出で太山寺越を越へて堀江に出づる里道あり幅一間三尺にして本村に屬するものは僅に二三町に過ぎず

本村より官衙及町村役場への方位及里程左の如し

縣廳及溫泉郡役所へ	東南	一里十五町	
味生村役場へ	南	十二町	
三津濱町役場へ	西北	九町	
新濱村役場へ	北	十二町	
久枝村役場へ	東北	二十五町	

(ロ)　橋梁　縣道筋に架したるもの石造にして石橋と稱す木造なりしを石橋になしたるより稱するに至る字新立より字本村に通ずる御稜川に架せるものは石造にして御稜橋と稱す河名より取りて命名せしならん三津停車場より三津濱町に通ずる御秡川に架せるもの石橋にして住吉橋といふ三津住吉町に接せるを以て命名せしならん三津濱町より字堀川に通ずる御秡川に架せるもの石造にして堀川橋といふ地名より取りて命名せしならん

(ハ)　鐵道　伊豫鐵道の線路あり明治二十年の布設にして字堀川に三津停車場の設けあり

(ニ)　郵便電信　三津濱郵便局の管轄にして郵便は一日二回の集配とし電信は隨時配達せり

生業　(イ)　農業　農産物の種類及産額左の如し

米	四千六百石	麥	八百八十五石
甘藷	三万七千五百貫目		

(ロ)　林業　山林の樹木は多く松にして薪となすに過きず

(ハ)　製鹽　鹽田僅に三町七反五畝廿三歩に過きざるを以て產額從て少なく平年三千二百五十石にして鹽務局三津濱出張所に收納せらる

(ニ)　商業　米穀小荒物等日用品の商業に過きざるを以て別に記するに足るものなし

(ホ)　工業　舊御藏場の北方に煉瓦製造所あり高本重三の所有にして製造甚た盛なり

財政　本村は戸數六百四戸にして内字本村に屬するもの二百戸枝村(堀川苅屋梅田町新立)に屬するもの

古三津村誌

四百四戸にして即ち戸數は枝村の分本村の二倍以上あれども諸稅等の負擔は之に反して七と三との比なるを他に財源なきを以て村經濟は困難なりと云はざるを得ず諸稅の納額は左の如し

國　稅　五千九百七拾壹圓七拾九錢五厘
縣　稅　貳千貳百九拾四圓四拾七錢
村　稅　貳千參百九圓五拾錢六厘

各種有權者數左の如し

衆議院議員選擧有權者　六十二人
縣會議員選擧有權者　九十三人
公民權を有する者　二百三十五人
所得稅納稅者　三十四人

貯金の有樣　村民の貯金は詳ならず學校生徒の貯金額七拾五圓五拾錢五厘なり

名勝舊蹟　高山城は字高山の頂にあり河野氏の臣高山某居住せりといひ傳ふ山の兩に登城の道あり河野諸代記錄に湯月殿直勤の御旗本近習衆の内に溫泉郡衆高山雅樂介といふ人あり此人の居城なるべし

純友館跡　は大明神山に在り天慶三年六月藤原純友筑前博多より逃げ歸り此處に居る本國の警固使橘遠保之を擊ち純友及其子重太丸を擒にす純友は獄中にて死しければ首を打て京都に函送す重太丸は京都に至りて誅に伏す遠保は功を以て宇和郡を賜はる近年此地に畑を開きしが古き石垣を堀り出せり之れ純友の館跡なり其近傍に古松一株あり純友駒繫ぎの松といひ傳ふ其松天保年間に枯れ倒れたり又其北方の田間に純友駒立て石と云ふあり又其東北東仙寺山の西麓に鬼塚と呼ぶものあり純友が重臣の墓ありといふ

茅屋島古戰場は字茅屋口にあり慶長五年九月十八日河野家の遺臣村上掃頭能島内匠曾根兵庫河野家

滅亡の後は藝州毛利家に寄食せしが河野家の斷絕を遺憾に思ひ本國河野の遺臣荏原城主平岡遠江河内村大熊城主戒能帶前等と謀を合せ河野家を再興せんと兵を率ひ來て此地に陣す松前城主加藤嘉明は此時關が原出陣の留守なりしが嘉明の將伯十成城を守り居れるに此擧を聞き急に當地に出張し夜襲ふて遂に三將を斬る村上の墓は當村乘松五市の宅地能島の墓は岩城八平門前の田の中曾根の墓は岩城晃次の宅地にあり何れも古松あり

鼠塚は鼠塚山に在り純友が乳母の墓なりと傳ふ

穗藻　本村字千本に在り田圃僅の地に之を生ず二葉にして穗の長さ五六寸ありて花を生ず砂糖又は擣漬にして貯ふ之を千本の穗藻と稱して賞味するなり

三津濱町誌

沿革　抑々當市街の沿革を考ふるに上古より道後礦泉の湧出するを以て景行帝を始め奉り諸帝の行幸の都度御船の著する場所となりたるが如し案より古昔御船の著せし地は今の當地にあらずして味生村の内の山西又は久枝村の内の船が谷の邊ならん然るに後世に至り追々干潟となり埋立をなし古三津村を生じ遂には當市街を生じたるならん故に其地域僅に四五町に過きず三百年前加藤嘉明の伊豫郡松前城を移してより當港を以て大坂城へ往來の乘船場となせりそれより次第に戸口繁殖し古三津村より獨立して一市街をなすに至れり寛永年中（十二年）久松定行伊勢國桑名城より松山に封せられてより幾ばくもなく當港を以て上國人の乘船場となし別邸を置き（御茶屋なるもの）船奉行船大將大船

三津濱町誌

頭小船頭及び水主を置き又町奉行定番銃手組等を設く故に當地古三津兩地には士族四百餘戸散在す船見番所もあり明治四年廢藩後は彼の番所なるものを公寶に附したるを舊松山藩の徒士窪田高平なる者之を買收して濱船問屋を開けり是れ當地濱船問屋の始めなり其後航海の業隆盛に赴きて毎に帆檣林立船舶の來往繁くなるに至り商業亦日々に隆盛なり

位置及境域　三津濱町は溫泉郡の西方海岸にありて北は新濱村の大字新濱に境し東は古三津村南は味生村大字山西字大可賀西は硫黄灘に面す

廣袤　東西は四町にして南北八町あり

面積　當町の總面積は三十町七反一畝六歩八合二勺なり

海岸線　沿岸十町餘にして屈曲出入等なく白砂青波と相交り夏季海水浴をなすに適す

港灣　三津濱港は縣下沿岸の中央に位し縣廳の所在地なる松山市を距ること僅に一里有半戸數約二千人口殆一万を有し坂神各地中國西海に往來せる船舶の寄港するのみならず地勢上縣下海陸交通上唯一の要津たり

潮汐　明治三十八年六月三十日より三ヶ月間の實測によれば七月廿五日に於て檢潮標の最高十二尺七寸最低〇尺〇寸五分を示せるを干滿の最も甚しきものとし其高低の差は十二尺六寸五分なりとす又本潮流(沖合)の干潮は北より南に進み滿潮は之に反すれども港灣内は其干滿に論なく概して常に南より北に向ふものゝ如く其速度は一秒時間に六寸五分乃至一尺四寸なりとす此速度は一般に海岸を距ること遠きに從ひて其度を增し現に埠頭の最突出點を距ること六百二十間の沖合に於ては一秒時間に四尺二寸に達せり尙其干滿の差大なるに從ひて速度の增加するは勿論なりとす

地勢　河流堀川は南方より市街の東部を迂り北方を流る滿潮の時は帆船の出入繁し

水誌　產魚はギヅミ、ボラ、チヌ、コチ、ナアゴ、カレヒ、タコ、イカ、タヒ其他一般の雜魚を產す

氣候　海洋的氣候にして雨雪最も少し風位と風力は松山測候所の調査に依れば明治廿三年以來十三ヶ年間に於ける最も强風は三十二年八月廿八日にあり一秒時間に二十七米突の速度にして方向は北西なりしが冬季の强風は西北又は東南よりするもの多しと雖も興居嶋の墻壁あるを以て强風は常に正西より襲來す對岸距離最も遠く五十九浬を距て其間靑島を除くの外一の障害なき西南西は波濤連進の虞なき能はざるが如しと雖も多年經驗によれば最も强風の襲來は此方面よりするものゝあることなしして最强風の方向及距離により波濤の最大高を算出するに八尺二寸五分に過ぎず更に純然たる直進行路の距離を二十五浬と見做さば六尺七寸五分に過ぎず

地質　三津濱は多くは粘土と砂との混合層にして第三紀層より成る

天產物及其分布　動物にカレヒ、エビ等ありて植物礦物に顯著なるものなし

區劃及政治　三津濱町を分ちて須町、梅田町、桂町、廣町、新町、櫻町、柳町、住吉町、榮町、藤井町、須先町、三穗町、久寶町、久寶新濱、久寶古三津、心齋町の十六大字に區劃し新町に三津濱町役場を置きて全町を治む

町會議員の數　十八名なり

戸數　戸數は本籍寄留を合せて千九百七十七戸なり

人口　人口の總數は八千八百廿五人にして內男四千三百三十一人女四千四百九十四人なり

人情風俗　淡薄にして稍俠氣あり中等以上のものは風儀善良なれども下等の人民は多く他より移住したる勞働者にして音聲高く粗暴にして禮節に乏しく衣住を飾して食に奢る

敎育　本町に設立せられたる學校は三津濱尋常小學校三津高等小學校三津濱商業補習學校とす其沿革左の如し

今夫れ學校敎育の溢觴を尋ぬるに王政維新の前舊松山藩に藩學校明敎館あり其支校を本町久松家の

別邸所謂御茶屋に設置す之れ當地に學校を設けたる嚆矢とす

維新廢藩の後は有志者相謀りて私立學校の体にて繼續したりしが明治五年全國に學制を發布せられ全八年に至り當町に三小學校を設く曰櫻小學校曰桂小學校曰御津小學校とす明治十年に至り此三校合併して西洲小學校と稱す校長たりし者上田藤八氏池内信嘉氏服部其德氏渡部薫氏真鍋圓充氏等なり明治十九年教育令の改正と共に仝廿年三月三十一日を以て從來の西洲小學校を廢し仝年四月廿二日に至り更に三津尋常小學校を設立す本縣第一中學校二等助教論金子長齊氏校長に任せらる月俸拾貳圓明治廿三年市町村制實施となり二十六年五月三津尋常小學校を廢し三津尋常高等小學校を設く金子長齊氏校長たり然るに一般教育思想發達し教育の隆盛を來すと共に就學生徒の數益々增加したるよりこゝに尋常と高等とを分離して三津濱尋常小學校と三津濱高等小學校の二校となす時に明治三十四年三月なり尋常校は松吉守道氏校長となる月俸廿四圓後澤田一精氏其任に當り年長兒童の速成科を設く成谷嘉十郎氏校長となるに及び商業補習學校を併置して今日に至れり高等校は金子長齊氏を校長となす明治三十六年鈴江卯之太郎氏金子氏に代りて校長となり三十七年影浦未知滿氏鈴江氏に代り校長となる影浦氏上浮穴郡視學に轉するに及び三十九年四月越智郡河北尋常高等小學校長渡部忠太氏任せられて校長となり現今に至る三津濱商業補習學校は明治三十六年六月を以て設立せらる二年程度にして學科は修身國語算術商業及び商業簿記とす今や在籍人員廿五名あり而して通學區域は何れも三津濱町一圓とす

衛生　避病舍は古三津村字松原に在り明治三十三年の建築にして其廣五反五畝廿九歩あり衛生組合は全町を三區に分ち各區に正副組長各一名と委員五名とを設きて區内衛生の事に當らしむ其他年に二回の定期及び臨時に溝潔法を行ひ又全町に下水道を敷設して排水に便せり

警察及裁判所　警察署は桑町に在り三津警察署と稱す其管轄區域は二町十七ケ村なり

宗教　宗教の種類は佛教の他に宗教と認むべきものなし其中定秀寺善宗寺最勝寺は共に眞宗にして其檀徒及信徒は凡そ千五百人正覺寺及願成寺は共に淨土宗にして其檀徒及信徒は合せて略四百人あり他に日蓮宗の妙法寺あり町民は一般に宗教心は普通にして他に比して格別なし但し五六年以前近邊の僧侶等相謀りて玄道會を起し大に風教の事に盡力せしかば近來漸く其進歩を見るに至れり

神社佛閣　佛閣は六寺あれども正しき記錄あるもの少なく何時の時代に誰の建立せし者なるや不明のもの多し

善宗寺　は眞宗にして三浦氏世々住職たり三浦氏は桓武天皇の御孫高望王より出づ後下りて源頼朝の時相州衣笠の城主に三浦大助あり此人晩年に佛道に歸依し此地に來り清水といふ所に一宇の堂を造りて之に居り三浦氏世々住職たり松山の城主加藤左馬助嘉明之を櫻町に移したりしを松平定行桑名より當城主となるに及び大に此寺に歸依し堂宇を今の地に移せり後世々の大名の信仰厚かりき

當寺の寶物には

一聖德太子の四天王奏川勝の面

一佛畫　來迎佛　九百年位前のものならん見眞大師の筆なりと傳ふ

一顯如上人の刀劍　此刀劍は上人が信長との戰ひに用ひしものなり

一山内一豐の陣螺

等あり

定秀寺　も眞宗にして河野氏世々住職たり河野氏は高縄の城主たりし河野通定城を弟通秀に讓り自ら高縄山麓の一小庵に籠りしが石山の合戰に本願寺方として郎黨を率ひて上り戰ひ終りて北條に一寺を建立せしを後此地に移したるなり庭前に聳ゆる銀杏樹は此時彼地より移植せし者なりと當寺の寶物には石山の合戰に用ゐし鎗親鸞上人自筆の法名本山よりの感謝狀等あり

三津濱町誌

各種團体　三津濱教育會明治廿九年二月當町教育の普及を謀る目的を以て三津濱就學奬勵會なるもの生れ種々の事業に依り半途退學者を減じ及び貧困なる者には學資を給與する等大に活動し來りしが尚進んで教育の進歩發達を謀る目的を以て三津濱教育會と改稱し役員には會長副會長各一名幹事七名評議員若干名を置きて夫々會務を掌り事業大に擧り今後見るべきものあらんとす

三津濱小富士婦人會　當會は婦人相互の情誼を温め智德を研き和親共同博愛慈善の實を擧げ文明的道德を高むるの目的を以て明治三十九年三月に生る役員は會長副會長各一名幹事委員若干名又別に顧問若干名を置く生れて日尚淺けれども今後大に望みを屬すべきものあり

其他十餘年を經たる男女同窓會は今や全盛の域にあり又宗教上の團体はあれども特筆するに足らず

交通　（イ）道路　本町を通ずる道路を縣道里道とす縣道は榮町を起點とし夫より廣町桂町通町を經て松山に至る三津街道に連る又一は住吉町藤井町三穗町を通ずるものなり里道は他の町内を縱横に通ずる總ての道路皆之れに入る道路は平坦にして通運最便なり

當町より諸官衙及び村役場に至る方位及び里程左の如し

縣廳及郡役所へ	東南	一里二十町	
新濱村役場へ	北	十八町	
古三津村役場へ	東南	十二町	
味生村役場へ	仝	二十町	

（ロ）橋梁　主なるものを稻荷新地に通ずる新三津橋及三津停車場に至る住吉橋とす共に石造なり

（ハ）鐵道　私設の伊豫鐵道本町の東端を通ず停車場を三津驛と稱す松山古町驛まで二哩半高濱驛へ一哩餘とす

（ニ）航路　航路の主なるものを分ちて四とす（一）大阪航路（二）門司馬關航路（三）宇和島航路（四）宇品航路なり大阪航路は今治多度津高松神戸を經て大阪に至るものにして今治まで十三浬多度津まで三十五浬高松まで四十三浬神戸まで九十浬大阪へ百浬あり門司馬關航路は直路航にして五十浬あり宇和島航路は長濱別府八幡濱を經て宇和島に至る此距離七十浬なり宇品航路は菅戸呉を距て宇品に達する者にして二十五浬あり一日二回の定期船あり大阪細島への定期航海船としては蓑花二回の宇和島丸あるのみ近來までは本港に寄港する汽船の數三十六隻にして其噸數一万三千八百三噸は本形船の一年間寄港船數一万八百五十隻間の子船及び西洋形帆船の寄港數四千九百二十隻なりしが高濱築港以來頓に衰へて舊の如くならず其數も常に不定にして明ならず

埠頭は今より四十年前松山藩に於て築造したるものなるが明治十八年暴風により大破せしを以て更に修築を加へて現形を存するに至れり其規模狹小にして水深の如きも干潮僅に五六尺の所多く爲に汽船の碇泊に便ならず

（ホ）郵便電信　本町三穗町に郵便局を設け本町新濱古三津味生々石興居島の遞信事務を掌る

生業　（イ）水産業　捕獲採藻の業は新濱村の民過半之に從事し本町民は主として製造及び販賣に從ふ日々二百餘艘の漁船の捕魚の收利年額凡そ五万圓といふ販路は多く松山附近なり而して本町の漁業者は八人製造業者は百人あり製造品には乾鰈乾魚類蒲鉾鱶詰等にして其金額三万圓生魚には鯛、鱚、アナゴ、鰈等にして其金額二万七千餘圓なり

（ロ）商業　道後平野の要津松山市の咽喉にして舊藩時代より商業甚盛なり其種類は甚多けれども中にて最も主なるものは果物商生魚商古物商荒物商菓子商四十物商にして宿屋業之に次ぐ又酒造家四運漕業十八あり

銀行には三津濱銀行興産銀行及び五十二銀行の支店あり

新濱村誌

魚市會社は其資本金壹万千貳百圓にして平均一ヶ年の利益金壹万貳百圓三津の朝市と稱し全國に名高し其他果物會社精米會社等あり

（八）工　業　三津の竹籠細工は精巧を以て古より名高し

財　政　本町の經濟凡そ壹万五六千圓にして稅源の主なるものは各種營業及漁業なり所得納稅者三百有餘

衆議院議員の選擧權を有するもの百六十一縣會議員の選擧權を有するもの三百二十五なり

新濱村誌

沿　革　本村は元太山寺村の部屬なりしが慶安二年分れて今の新濱村となりしなり而して新濱村は往古は海なりしが次第に退潮して陸地に變せし者の如し故に現今小字浜と稱する所の如きは船舶常に碇泊し小字佐古の船が谷近傍まで出入せしと云ふ

位置及境域　溫泉郡の西海岸三津濱の正北にあり東は久枝村大字西長戸字三津越より起線し本村字地藏坂に至る巖子山脈を以て久枝太山寺の兩村に界し西は海に瀕し海岸を距ること四町にして四十嶋あり西北三十五町を距て、興居嶋に對す南は三津越より堀川下流に至る田畦及河流を以て古三津村に界し北は地藏坂より起源し字上の谷の內白石に至る山脈を以て太山寺村に界す

廣　袤　東西十五町南北四十町にして周廻三里十七町あり

面　積　本村の總面積は四百十五町八畝四歩にして其內譯左の如し

田　四十七町一反九畝十七歩

畑　五十九町二反六畝廿四歩

宅　地　十三町三反廿一歩

山　林　二百八十町三反八畝十一歩

墾　田　十四町一反五歩

雜　種　地　八反二畝六歩

海岸線　南浜山より高濱新茹屋上の谷の沿岸を經て白石の鼻に至る一里二十五町屈曲甚し、高濱の中黑岩は西に向つて突出し興居嶋の黑崎と相對す

港　灣　高濱港は前に興居嶋を控へ海深く天然の良港にして大船巨舶數十隻を容るゝに足る殊に伊豫鐵道の線路を此地に延長せしより昔日の漁村は忽ち變して大家高樓並び且近來滊船の寄港するに至りしより漸次繁盛に赴けり

嶋　嶼　四十嶋　は高濱の西數町にあり全島岩石より成りて絕頂に數株の老松蟠起せり周廻凡四五町あり春夏の交來りて漁りを爲すもの多し

九十九嶋　は字新茹屋の北方にありて全嶋に雜木茂れり周廻二三町に過きず

海　峽　高濱と興居嶋の間の海峽を高濱瀨戸と呼ぶ潮勢甚急激なり

岬　角　黑岩は高濱の南端にありて興居嶋の黑崎の鼻と相對して高濱港を擁せり

潮　汐　潮汐干滿の差は季節に依り多少の差違あれども通常九尺三寸なり

潮　流　本村は前に興居島ありて其間は所謂高濱瀨戸にして潮流急激なるを以て逆潮に會せば商船の進行甚困難なり

地　勢　本村は巖子及び經の森の山脈より起りて自然の形勢をなす其東北に連亘するものは起伏して久枝和氣二村の境界となり又西南に亘るものは僅かにして字小深里の東港山にて斷絕す巖子の西北部は海に瀕するを以て低地太だ狹く南方古三津村に接する部分は低地多しされども比較的高地多くして低地少し

町村誌

山誌　山には巖子經が森護摩が森の三山ありて直立凡八百四十尺あり

坂には東北和氣村大字太山寺に接する處に地藏坂（縣道）又奥濱より梅津寺に越ゆる大人越と稱する坂路あり

水誌　本村には河流と稱すべきものなく只十數個の溜池あるのみ

擅田　擅田は南部字松ノ木、港、小深里及び奥濱の四部落之を圍繞せり創開は慶安二年風早郡吉木村の葛右衛門と云ふものゝ開墾せしものなりといふ反別拾四町壹反歩あり新濱擅田と稱す

氣候　瀬戸内海に濱し其潮風を受くるを以て氣候は松山地方に比すれば溫暖なり然れども西風特に强く冬期寒風の烈しき時は歩行甚だ難む

地質　水成岩質にして砂土なり氣水の流通宜しき故乾燥し易し

天産物及其分布　高濱新菊屋及び上の谷の三部落共に魚獲の利徒あり新菊屋最たり又上の谷の煙草其利潤尠からず高濱には瀬戸貝あり

區劃及政治　本村は一村一部落にして數ケの小字より成れり村役場は字港にあり村會議員の數は拾二名なり

戸數　本村の戸數は七百三十一戸なり

人口　本村人口の總數は五千百二十八人内男二千八百五人女二千三百二十三人にして寄留民の數は四百七十二人なり

人情風俗　本村は字上の谷稻荷宮の風ありと雖も概して人情輕薄長幼禮なし就中專ら漁業に從事する字新菊屋の如きは言語擧動卑猥粗暴にして喧嘩爭論繁し男は船に漁し女は頭上に桶を戴き魚類を行商す家屋は字新菊屋の如きは倭小なる瓦屋の雜然密集せる觀あるのみ只高濱は新開の地として建物等漸次美觀をなしつゝあり衣食は質素なりと雖も往々間食の爲に費すを顧みざるの風あり

教育　現今尋常高等小學校を設置せり新濱尋常高等小學校と稱す通學區域は全村なり創立は明治七年一月にして當時岩子小學校と稱し學區域は字松原（今の三津久賀町の横町）松の木石風呂湊奥濱須先（今の三津須先町）古深里高濱新菊屋上の谷なりしが明治九年一月分離して新菊屋に狹隘なる校舍を新築して一校を設け松翠小學校と稱す學區域は新菊屋上の谷なり仝校は其後經費の維持に苦み岩子小學校に合併し後岩子小學校の新濱簡易小學校と改稱するや又分離して分教場の名稱となりて修繕を加へたり本校舍は明治二十四年六月岩子小學校舍の跡へ新築せしなり

明治二十五年十月新濱簡易小學校は廢校の姿となり新濱尋常小學校と改稱し分教場は獨立して新菊屋尋常小學校となれり廿六年八月校舍を增築せり三十三年四月新菊屋尋常小學校を廢し新濱尋常小學校に合併す明治三十四年六月更に校舍を副築し高等科を併置して新濱尋常高等小學校と改稱し現今に至れり

衛生　十個の衛生組合を設け清潔法は毎年二回之を施行し傳染病豫防法は各衛生組合協議の上之を施行す

警察及裁判所　警察は三津署の管轄にして字高濱に巡査駐在所あり裁判所は松山區裁判所の管轄に屬す

宗教　宗教は佛教にして其信徒は眞言宗七百五十人眞宗二百八十人黄檗宗三百人日蓮宗六百七十人淨土宗百八十人にして各宗とも盛衰なし

神社佛閣　港三島神社は本村の產土神にして字小深里にあり

龍宮神社は字白石にあり

梅津寺は字奥濱にあり寛永二年の創建にして支那の僧雪摩居士の開基なり

交通　**道路**　縣道二線あり一は三津濱より高濱に通するものにして明治三十七年の開鑿に係れり長十六町幅四間あり交通極めて便利なり一は三津濱より堀江村に至る街道にして和氣村大字太山寺との

新濱村誌

境界に坂路ありて通路聊困難なり

本村より官衙及隣接町村役場への方位及里程左の如し

縣廳及郡役所へ　東南　一里十八町

三津濱町役場へ　南　八町

鉄道　伊豫鉄道の高濱線あり明治二十五年三月三津驛より字高濱まで延長したるものにして高濱停車場は高濱にありて最終點なり

航路　大阪宿毛線、大阪内海線、藝豫線

宿毛線　大阪、神戸、高松、多度津、今治、守江、日出、別府、大分、佐賀關、川之石、八幡濱、吉田、字和島、深浦、宿毛

内海線　大阪より佐賀關までは前全斷にして日出に寄港せざるのみにして日向地は臼杵、佐伯土々呂、細島、内海に至る

藝豫線　昔戸、呉、宇品

高濱港より各港への距離左の如し

今治	二六浬	多度津	六五浬	高松	八二浬半	神戸	一四三浬
大阪	一五六浬	長濱	二〇浬	守江	六二浬	日出	六九浬
別府	七〇浬	大分	六八浬	佐賀關	五四浬	臼杵	六四浬
佐伯	七四浬半	土々呂	一〇六浬	細島	一一二浬	内海	一五一浬
川之石	七〇浬半	八幡濱	七一浬	吉田	七七浬	宇和島	七七浬半
深浦	九三浬	宿毛	九九浬半	昔戸	二一浬半	呉	二四浬
宇品	三一浬						

郵便電信　本村の内字佐子、松の木、石風呂、港、奥濱は三津濱郵便局字高濱、新茶屋、土の谷は高濱郵便局の區域に屬し集配は何れも二回なり

産業　農業　本村の農産物の主なるものは米麥甘藷にして其産額左の如し

米	七百四十一石	麥	七百二十六石五斗
甘藷	一万九千貫		

以上農産物の販路は三津濱町なり尚本村の山林は年々五町歩以上開墾畑となすを以て畑作逐年増加せり

林業　山林は自生に任せて栽培せず樹木は多く松にして薪となすに過ぎず

水産業附製鹽　水産物の主なるものは海魚及貝類にして其販路は三津高濱の魚市場なり今其種類産額を挙ぐれば左の如し

鰯	千五百六十一貫	鯛	二百四貫
鰈	二百二十二貫	鯖	五十八貫
鯊	三万九千百二十貫	鮑	千七百五十貫
海藻	千　貫	鰹	九百七十四貫
鯛	一万千五百貫	アナゴ	三百二十八貫
貝	千七百五十貫	竹輪	五百五十六貫

製鹽高は六千四百石なるが鹽專賣の爲自然衰退しつゝあり

財政　本村の經濟は敢て裕なりといふを得ずされども近來汽船の寄港增加し旅客の昇降頻繁となれるを以て從て商業も漸次隆盛に赴くへければ後來は有望なりと云はざるべからず財源の主なるものは鹽業及製鹽なりとす

興居島村誌

與居島村誌

沿革 本村は古來行政上一村として治め來り舊和氣郡に屬せり本島の内字船越に小千御子の御母和氣姫の命を埋葬し奉れり依て本島を母居島と稱せしが元祿十二年與居島と改め豫章記河野家譜等に見る
たり尚古昔沖の島と稱せし由母居島前の舊名ならん本島村は昔西方鷲か巣に群居して一部落をなせしが天正の頃海賊之を惱ませしかば住民去りて東方に移り泊、由良、門田に分住することゝなり次第に戸口の增殖を見るに至り後生業の關係上他の部落をも作りて現今は由良、泊の二大字を以て與居島村をなせり

位置及境域 溫泉郡内西方に位し東は海路十八町を隔てゝ高濱に對し北は水路凡三里を隔てゝ中島に向ひ西と南は燧灘に圍繞せらる

廣袤 本島は南北に長く東西に短く稍斜に北東より南西に延び南御手洗崎より北馬磯崎に至る長さ二里幅は最廣き所も一里に過ぎず最短き所は僅に三町に過ぎず

面積 惣地積七百二十九町五反五畝九歩にして其内譯左の如し

田	三十五町三反八畝十八歩
畑	百七十八町七反四畝廿七歩
宅地	十八町二反四畝十歩
山林	四百八十町三反二畝十歩
雜種地	七反廿一歩
鹽田	五町九反五畝廿七歩

海岸線 海岸は頗る屈曲に富み其延長七里十三町に及ぶ

港灣 泊港由良港、鷲が巣港ありて泊港は本島東岸の最南端にあり南は黑崎海中に突出し北は城山突出し由良港は其北にありて南は黑崎に對し小富士を擁し天然の灣形をなし共に其の灣入七町を下らず

東は高濱と相待て天然の良港にして海水の深さ三十余尋に及び船舶の碇泊交通甚便利にして遭難の
良港と稱せらる鷲が巣港は西海岸にありて南は御手洗崎北は鷲が巣崎海中に突出し釣嶋其前に横はり其灣入十町を下らず實に天然の良港をなせども其海遠淺にして大船を泊することを能はざるを恨む
其他御手洗、船越、北浦、馬磯、櫛等碇繫の便あれども其灣入極めて淺し何れも碇泊に不便なり全郡三津濱町との交通極めて頻繁にして商買物等總て全町に於てするれば定員十四五名乘の小形船を以て波海を業とせる者泊に二十四人由良門田に十餘人船越鷲が巣御手洗に亦各二三人宛あり郵便は毎日二回宛集配す當地は船商多きを以て電報發着頗多し

嶋嶼 本嶋を去る西南半里の所に釣島あり舊來本村に屬す地質岩礁砂にして東南より西北に長く其面積三十三町四反六畝二十四歩にして海岸線の延長三十町に過ぎず明治維新の際本村の里正石崎某の所有に歸したりしが今は東中嶋村大字宮野部落の所有となれり嶋の北部に有名なる燈臺あり南崖より
は石材を出す

山 小山島又「カモセ」島と稱する小嶋鷲か巣の正西二町の所にあり全島岩砂にして其形殆んど圓錐形をなし其面積百二十餘坪にして海岸線の延長は一町に過ぎず島頂數千の岩蒸巢くふ北浦の西岸に岩礁
あり之を琴引といふ岩礁の形人恰も琴を彈するの狀に似たるを以て名づくといふ

海峽 鷲巣崎黑崎神崎馬磯崎の四あり鷲巣崎は西北端に突出すること二十餘町其幅六町に充たず東岸の
南端なるを黑崎と云ひ北端なるを馬磯崎といひ其中央にあるを神崎と云ふ其長きものも十町を出で
ず其短きものは三町に充たず其幅何れも四五町に過ぎず

潮汐 滿潮干潮に於ける其昇降の差最甚しき時は二間余に及ぶ其最少き時も一間を下らず是れは大潮小
潮に於ける差にして別に季節に於て非常の變更なく依て特に其狀況を記載する程のものなし

潮流　潮流の主なるものは釣島の東北及黒崎の前面を通過するものと其の二つにして其釣島附近に於ける
ものは東南より西北に其の幅凡四町に過ぎず海底は岩石の起伏甚し黒崎附近に於けるものは東南よ
り西北に其幅六七町余海底岩石の起伏前者に比して一層甚しきを加ふ而して潮流の速度は一時間
約三里半に亡して其他興居島高濱間に於て五六の小潮流あるも記載する程の者にあらず

地勢　本島は火山層の一孤島にして南部の中央に高く聳ゆるを小富士山といひ其脈は三方に延びて南西
に向ふ者は御手洗崎となり東南に趨くものは黒崎となり北に走るものは本島を縦貫して又分れて一
つは東北に走りて馬磯崎となり一は西に趨きて蕊巣崎となる斯の如く土地狹長に山脈中央を縦貫せ
るを以て到る所山ならざるはなく住民は只山麓海岸の稻平坦なる所を求めて部落をなせるに過ぎず
地勢斯の如くなるを以て隨而川と稱すべき程のものなし且常水なし海岸の形勢は頗る屈曲に富む

山誌　小富士は南部の中央にあり俗に之を泰山とも云ひ又古くは基山とも稱したり其形殘河の富士山に
似たるを以て此名あり高海拔千五十尺傾斜頗る急なる圓錐形をなし滿山松樹を以て掩はる高濱と相
待て山水の賞本縣第一と稱す此山は其形狀より見るも地質より察するも其昔噴火の壯觀を呈したり
しと疑ふべくもあらず殊に山麓は集塊凝灰炭等の散落せるあり加ふるに近傍寄生火山と見るべき
者あり況や本島は正しく阿蘇火山脈の通過する所なり斯の如く小富士山の火山たる証跡歴々として
見るべき者あるに拘はらず通常の地理書に地文學的に研究したる記事を載したることなし

水誌　地勢の然らしむる所川と稱すべき程のものなく從て池沼濕布等は更になし然れども只灌漑用に充
つる蕊巣島に於て溜池の數四十二個あれども何れも小池にして周圍五十間に過ぐる者を見ず幅て產
魚の肥すべき者なし今其溜池を部落別に記すれば左の如し

高濱泊　十二　由良　二十・　門田　十
瑞田　泊由良馬磯の三ヶ所にあるを明神夷子といひ二町九反七畝十七歩由良にあるを中藻といひ一町二反八畝十二歩馬磯にあるを馬磯といひ一町六反九畝二十七歩あり

氣候　温和にして純然たる海洋性氣候を有し寒暑共に甚しからず極暑の時も廿七度を超ゆることゝ稀にし
て極寒も一度を降ることゝ稀なり雨量は瀬戸内海一般の特性として頗る少し降雪は稀なり氷も亦冬季
中四五朝之を見るに過ぎず風向は温帶の特性として一定せず或は一日の中に於て二三回其方向を變
することあれども概して朝夕の時は夏は南西風(俗にマジといふ)多く冬は北西風(西アナジ)若くは東
北風(北ゴウし)多し

地質　火成岩にして又砂土埴土なり

天產物及其分布　主なる者は諸種の魚類貝類海藻等にして魚類は鯛鰯鰹鮪鰺アナゴ烏賊蛸鰤ホゴ沙魚等と
し貝類には榮螺貽貝等あり海藻は鹿角菜(食料)林產は松樹にして之を大束(長凡一尺五寸位に切り一把目方凡四貫目)と
なし廣島地方に積送り薪材となす本村住民の多數は松の落葉を掻き集め或は伐採せし松の根を堀り
取りて之を自家の燃料に充つ

區劃及政治　村治上の區劃は之を大別して泊由良の二部落とし更に細別して泊を船越御手洗釣島の四小部
落に別ち由良を門田馬磯北浦鷲が巣の五小部落に區分す
行政教育衛生其他總ての事務は村役場に於て直接に之を取扱ふ傍由良泊兩部落に總代を置き徵稅等
の一部を補助せしむ村役場は本村中央部由良に在りて村長助役收入役各一名書記三名小使二名を以
て組織す村會議員は十八名にして內十二名は由良六名は泊部落より選出せらる本村の總地積は七百
二十九町五反五畝九歩なり

戸數　本村の總戸數は八百七十七戸にして內泊三百五十戸由良五百二十戸なり

人口　人口の總數は五千五百九十五人にして內原籍民は五千百八十八人男二千五百八十一人女二千六百七人寄留民は四

人口百七人男二百十二人女百九十六人にして多數寄留民の原籍地は廣島なり其由來は航海業農業之れが主因をなる移住民なり

人情風俗　純粹の農民は質朴なり其他は一般に輕薄にして言語野鄙普通禮法を知れる者極めて少なく多くは長上に對しての言語作法の區別を知らず德義を重んぜず公益の何たるを知らず唯に私利をのみ謀る殊に他鄉人に對して一時親切らしく交はるも畢竟外面を假裝せるのみ元來男子の多數は航海業なるを以て止は大阪神戸を始め瀨戸內海の諸港下は馬關長崎等に往來して常に諸種の下等商人と交通せるに狡り着實の風なく稍傲慢にて慓悍なり嫁娶婚姻は多く村內に於てし他町村との出入は極めて少し當地には純粹の農工者は至て少數にして家は農といふも家族中の一二人は大抵航海業に從事せりされば一家の榮枯浮沈の激變甚しく貧富の懸隔頗る甚し

衣服飲食共に奢侈に渉り家屋と衣服と比較して其價額の衣服に勝るものあり酒宴を開くこと頗繁にして又飲れり平素の常食物は航海者は米とし家族は半麥位の家最多きが如し酒煙草肉卵菓子等の贅澤物を消費するの量頗大なり職業を務むること極めて緩慢にして船乘の外は如何に農繁の季節と雖も星を戴きて出て月を踏みて入る等の事なし家屋は瓦屋最多く草屋は或る部分には多くあるも全体より評する時は極めて少數なり

陰曆八月十五日は氏神祭日にして神輿守の青年由良泊の兩組に分れ爭鬪の惡弊あり

博奕の盛なること當地の如きは蓋し縣下に稀なるべし少年以上の男子にして之を知らざるもの指を屈して數ふる程なり甚しきは一家の主婦にして之を扱ふもの少からず

教育　學校は現在二校ありて其本浦にあるを泊尋常高等小學校といひ高等科四年程を併置す泊校の通學區域は本浦船越御手洗釣島の四部

落なり而して釣島は就學義務を免除せらる由良校の通學區域は由良鷲巢北浦西田馬磯の五部落なり而して兩校の沿革概要左の如し

由良校は明治六年由良に由良小學校を設置す當單級小學校にして其校舍は寺院を用ひしが明治十七年に至り兩校を合併して由良字重王に校舍を新築し中和小學校と名けたり明治二十年三月三十一日限り中和小學校を廢し仝年五月廿三日に至り由良尋常小學校を設置し明治三十四年堅固なる校舍を建築し尙明治三十五年一月十八日以後高等科四年程を併置したり泊校は明治六年十一月創立して小富士學校と稱し後兒不蓋小學校と改稱す而して創始の際諸般の準備甚不完全たるを免れず寺庵を以て假りに校舍に充て神官重松某之れが教員たり明治十年六月校舍を新築し併て教員寓所を建て明治二十年學政改正の際泊尋常小學校と改む其後明治三十四年七月高等科四年程を併置し泊尋常高等小學校となる明治三十六年一月校舍を改築せり現今の學校是なり

衛生　衛生組合は小字船越の高地にあり漁業家及農業家は比較的に不潔なり衛生組合は由良門田泊の三部に分れ三十戸毎に一人の委員長を設く通常消潔法及種痘の勵行は一年二回とすれども臨時之を行ふことあり

警察及裁判所　本村には泊由良の二個所に駐在所ありて三津警察署の管轄に屬し泊駐在所は泊御手洗を管し由良駐在所は馬磯門田北浦由良船越鷲巢釣島を管す

宗教　教派眞言宗最多く眞宗之に次き淨土其次にして近來天理教を率するものあり信徒の數は天理教は十數戸淨土宗五十余戸眞宗百五十余戸其他悉皆眞言宗なり盛衰の狀況に至りては記すべきものなきも迷信の度最も甚し

神社佛閣　和氣姫神社は仝島の氏神社にして船越にあり和氣姫の命を奉祀せるものにして陰曆八月十五日祭日なり勸請年代不詳往古は船越の宮といひ天喜二年船越八幡宮と稱し明治三年船越和氣姫神社

と改稱し郷社に列す實物記すへきなし賽客一孤島なるが故本村人民の外地町村より來るもの稀なり

嚴島神社は泊に鎮座せり市杵島姫命を祭れるものにして天正八年九月十五日當島領主石崎四郎三郎之を勧請す毎年六月十七日の祭典は頗る殷賑なり

中嚴前社は由良になり濱宮社大將軍社は門田にあり中嚴前社は市杵島姫命濱宮社は豐玉姫命大將軍社は武内宿禰を奉祀す

弘正寺は泊城の上の麓にあり眞言宗にして其堂宇は絶壁の下に建て前は海に臨み景色絶佳なり高志大守高僧の出身寺なり永錄十二年門澤の城主村上信濃守弘正の創設に係る依て弘正寺と云ふ

觀音寺は由良にあり眞言宗にして小丘の中腹にあり前面海に臨み風景の絶佳なること弘正寺に讓らず其堂宇甚壯麗なり本寺は僧行基の開基にして正觀世音を安置す初め字泊にあり後今の地に移す

各種團体　果樹協會漁業組合溫泉郡產牛組合衛生組合水產組合等の設置あり

交通及航路　本島は狹長なる一孤島にして中央に山脈全通せるを以て周圍の海邊に住居す道路は惡しと云ふにはあらざれども人家稀比せるにより甚狹隘にして且凸凹あり故に當地には車は全く無用に屬し馬も亦一頭もなし總て運搬物は人の肩によるされども海邊なる故隔離せる所へは船を以て回漕するが故に不便を感することなし泊より船越を經て由良に至るには道路海岸に沿ひて平坦なり唯船越に於て高十四五米突上り下り百間程の一小阪路あるのみ其他の部落に至るには何れも多少の山坂を超ふさるべからず然れども左程困難を感ずる程の坂路にあらず

三津濱との交通極めて頻繁にして賣買物總て全町に於てすされば定員十四五名乘の小船を以て渡海を業とせる者泊に二十余人由良門田に十余人船越集御手洗馬磯にも各一二人宛あり

本村より官衙及町村役場への方位及里程左の如し

縣廳及郡役所へ　東南　三里余

三津濱町役場へ　仝　一里二十町

新濱村役場へ　仝　一里十余町

橋梁　本村には川なし依て橋梁の記すへきものなし

埠頭　由良泊共に天然の灣形をなす其他各部落何れも人工或は天然の小埠頭ありて小船を碇泊するの便あり中に由良泊は双方及高濱と相待て天然の良港をなすを以て暴風の日には滊船帆船の區別なく近海のものは悉く碇泊して風波を避く

燈臺　釣島に有名なる二等燈臺あり

郵便電信　郵便電信は總て三津濱局下に屬し郵便は午前午後各一回（但し由良泊を除く外は毎日一回とすることあり）（其内釣島は風波の爲數日間配達せざることあり）と云ふにして由良に郵便受取所あり總ての郵便事務を取扱ひ又各部落に切手賣下所並に郵便箱の設あり電信は一も通信上不便を感することなかりしに近時由良郵便局の設置を見るに至り益々便利となれり

生業　農產物は米麥甘藷甘蔗苹菓梨桃枇杷柑橘類等にして田は全島に於て三十五町三反八畝十八歩畑二百七十八町七反四畝廿七歩にして其產額米六百五十五石六斗麥四千二百五十二石六斗四升九合果物畑反別二百町余にして其產額三十二万七千八百七十貫餘にして金額四万二千圓に出たり近來果樹の栽培非常に盛にして桃林檎夏橙密柑梨枇杷の產額夥しき中にも林檎は本村の特產物にして其味の美なる果實の大にして色澤の美麗なる等蓋全國に比類稀なるべし大阪神戸廣島長崎等へ輸送するもの少なからず尚林檎に就て歷史的情況を左に記述せん

柳も林檎の當地に始めて植付けられしは今より廿八年前即ち明治十年二月の頃大阪の果樹商之れが苗木を携へ來りて賣捌きしことありき其當時にありては誰も其果樹の性質を知ものなきを以て之を買ふものなかりしに獨り泊の山本權四郎といふ人試に苗木を買ひ之を所有の畑に植付けしに三四年

を經て實を結び始め十四五年の頃三津市場に於て非常に歡迎せらるゝに至りしかば當地の人大に注目する所となり先を競ふて接木栽植するに至り今日に於ては一廉の産物として世に知らるゝに至れり其初め植ゑし中にて生育非常に宜しきものは今は其高四間余あり周圍に枝を密生し恰も密柑の木の如く繁茂せりされは此一株にして毎年收獲四五十圓を下らす多き年は殆んど百圓に達す稱して日本第一と云ふ

林　業　本島の山地は悉く松樹にして（自然の發育に任す）之を大束（長凡一尺五寸位一把目方凡四貫目）となし廣島地方に積送り薪材となす當地住民の多數は松の落葉を掻き集め或は伐採せし松の根を掘り取りて之を自家の燃料に充つ現今石炭を燃料に使用するは三戸の洗湯と二三戸の鍛冶及三ヶ所の製鹽場のみ

養蠶及牧畜　養蠶をなすものなし只獸類中牛二十余頭を見るのみ

水産及製鹽　水産の重なるものは諸種の生魚海藻及製鹽とす鹽田は御手洗由良馬磯の三箇所にあり御手洗にあるを明神夷子といひ二町九反七畝十七歩由良にあるを中藤といひ一町二反八畝十二歩馬磯にあるを馬磯といひ一町六反九畝二十七歩にして一ヶ年の製鹽五千五百八十石其金高八千九百貳拾八圓に達す生魚は鯛、鰯、鰈、鮪、鰆、アナゴ、チヌ、烏賊、鮹、鰕、沙魚貝類には榮螺、貽貝等あり海藻は鹿角菜（食料）及肥料の外記すべきものなし魚類を捕獲するには網又は釣りを以てすれども重に網を以てす其方法大別二種あり一は人力を以てす一は舟の進行力を以てす網は曳網地曳二十六船曳百十四旋網三底刺網十三なり海藻を採取するには通常二本の竹を以て狹み卷き取るか又はかぎを竹の先に付け之を以て掻き取るを常とす魚類は大抵三津濱及松山市に販賣す毎年の收獲高參萬圓を下らす

航　海　航海業は本村の主要なる生業にして船商の盛衰は直に本村の貧富に大影響を及すものなり

り寧本村は船舶に依りて左右せらるゝと云ふべし而して其船舶は合の子と稱する帆船にして三百噸内外の者最多し乘組員は船長と共に七八人を通例とす最近の調査に依れば使用せる船舶は西洋形帆船四十五隻（五十噸以上二百噸まで）日本形帆船十二隻（五十石以上千五百石以下）小廻船百二十四隻漁船百二十二隻にして航路は主として瀬戸内海及九州西海岸なれども時に或は太平洋を航して伊勢内海或は東京灣に至ることあり積載の船貨は重に石炭にして肥筑諸港にて之を買ひ讃岐阿波備前備中播磨及神戸大阪等の鹽濱砂糖屋鉄道會社等に賣捌ものなり而して通例一ヶ年に十航海をなし最も早きは十二三航海をなすものあり船員の月給は船長（船長の外は船方といふ）十八圓にして其他拾貳圓以下參圓五拾錢以上なり尤も飲食料は別に之を給す

商　業　會社組織の商業を營むものなく從て銀行の設置なきは無論にして全島に於て小賣商店四十戸程あるも其大部分は菓子店にして小數の雜貨店あるも何れも小額の賣上高にして事々しく記載する程のものなし隨て其賣直段非常に高價と云はざるを得す之れ三津濱本島間交通頻繁なるを以て少しく財産を有するものは總て三津濱町に於て買物をなし細民のみ小賣店に於て買物をなすが故勢小賣店は高價に賣ちさるを得す遊客旅客何れも小數なれば旅店と稱すべき程のものなく唯五六の木賃宿あるも其中泊只一の旅館の体裁を備ふるものあるのみ舊暦六月十七日には泊嚴島神社へ參詣する人頗る多し

工　業　本島工業の主なるものは船大工にして常に定員十四五名位の小船を製造しつゝあり（大工數廿余名）時に四十万斤積位の帆船を製造することあるも是は年に二隻に及ぶこと甚稀なり其他鍛冶業をなすもの十數人あるも何れも小仕掛の仕事にして工業の組織及其他の事も記載するに足るものなし

礦　業　礦産は殆皆無なり唯黑崎山の中央に石炭層ありとて試掘せしものありしも極めて薄層にして

して且粱質宜しからざりしを以て中止せり釣島より少許の花崗石を出すも採掘の狀況運搬用途販路を記載する程のものにあらず鷲が巣より少許の瓦土を出す重に小帆船を以て衞間地方に販賣す

財　政　本島住民の大多數は航海者なるを以て其收得金高最其大多數を占め農は其次にして漁之に次ぐ今之を各部落別とする時は釣島は農を第一とし漁之に次ぎ鷲が巣は漁を第一とし農を第二とし商を第三とす由良は農を第一御手洗は農を第一とし漁之に次ぐ泊は航海業を第一とし農を第二とし商を第三とす馬磯は農を第一とし商漁之に次ぐ北浦は漁とし航海業を第二とし農之に次ぐ

各種納稅高左の如し

國稅	三八〇〇圓〇〇〇
縣稅	三六〇〇圓〇〇〇
村稅	五〇一三圓〇〇〇

各種有權者別及其數左の如し

衆議院議員	二十二人	縣會議員	六十五人
村會議員	四百二十一人	被撰擧人	三十七人
所得納稅者	四十二人		

總額四百六拾七圓八拾五錢

貯金の有樣　村民の貯金者現今二百有余名にして其總額貳千圓以上なり明治三十六年末までは實に僅少のものなりしも時局以來頓に增加したるものなり

學校兒童貯金の實施は明治卅五年三月にして三十六年末は人員三十二人（由良校分）金額百七圓參拾參錢貳厘なりしが奬勵の結果漸次增加して現今にては百六十五名に及び金額參百八拾余圓に達す而し職員の貯金は現在六名にして金額拾六圓拾九錢貳厘なり泊校は現在額七拾五圓七拾五錢五厘

にして其預入兒童數六十六名なり

特殊の富源　本村特殊の富源は果樹、航海業、水產物にして果樹本年收獲豫算拾壹万圓航海業拾余萬圓水產物三四萬圓を下らざるべし

名勝舊蹟　船越に鎭座せる船越神社は全島の氏神社にして河野氏の遠祖伊豫王子の妃和氣比賣を奉祀せるものなり和氣姫の御陵は封土高一丈境內方八間の正方形をなし中央に古松一株蟠蜿たりしが慶應元年九月二十二日の暴風雨に吹き倒され枯死す其後小松數株を植樹し現に其松は成長しつゝあり此所なん則小千御子の御母和氣姫の命を埋葬し奉れる所なり之に依て本嶋を母居島と稱せしが母の字を憚りて元祿十二年興居島と改む云々と豫章記河野家譜に見ゆ今の和氣比賣の神社の少し北にあり

明澤の城址は本浦組の中央點より東北二町四十間の所海中に突出せる斷崖絶壁の上にあり上部平坦にして東西六十間南北十二間現今老松蟠生す之を城山といふ古河野氏之に城き村上信濃守弘正をして之を守らしむ天正年間石崎四郎三郎日爲之を守護し本島を分領す云々と伊豫日記に見ゆ

人物　貞婦　向井ヒサ　義僕　竹內　作藏　慈善家　堀內　新三　宮田　兵吉　公益を起したる者　小林佐七郎　山本權四郎　道德家　堀內　匡平

本村由良部落に故小林佐七郎なる人あり（後呼て仙果翁といふ）殖產の志厚く嘉永四年の頃字北浦の山林五反歩を開墾し自攝津東野に至り桃苗五百本を購求栽植し熱心培養に勉めたるの功空しからず生育殊に宜し三四年を經て結實し初年熟果の季節に際し三津濱より仲買人來り自一手に買取らんことを望みたり然れども是迄で多數の桃果を買收するは地方に例なき最初の事とて標準とすべき價格なければ仲買人は米二十五俵を以て悉皆の收實に換へんことを請ひ袋に双方實買の約整ひて未だ桃果を採取せざるに先ち仲買人は米俵を海岸に運びて山積したり村民之を見て斯る小數の桃樹は此

多數の米を產するに足るものかと驚愕せり翁此の結果を得て人々に奬むる所ありければ愛に初めて桃樹栽培の意外に利益の多きものなることを知り小池幸作坪内市藏なる人も翁に續きて栽植奬勵せるより續々村内に栽培者を增加し其產出も年々共に增加するに至れり

初め翁が栽植せし桃樹の種類は豐大なる油桃の一種にして地方未だ斯かる良種の桃果なく翁に依て初めて栽培し紹介せられたれば世人は冠するに佐七桃の名稱を以てせり其後本島一般に夥多の桃果を產出するに之れが種類の增加するに伴ひ更に興居島桃と通稱するに至れり其後安政元年の頃翁は再東野の種苗家を訪ひ梨、枇杷、梅の良苗を求めて之を自園に栽培し繁殖の道を開きたり本村枇杷、梨の栽培亦之を嚆矢とす翁は實に其半生を果樹栽培養植に務め靜に果園の清氣を飛し七十六歲の高齡を得て明治二十二年一月十八日六花繚亂滿山に舞ふの候に於て沒去したりき

明治二十四年の頃縣廳より苹果苗數種を本村に配付し其試驗を委せられたり

其苹果を栽植せし篤志者は左の如し

堀内　新三　田村昌八郎　山田元五郎　中本小三郎　篠塚　國藏

然るに當時は西洋林檎と稱し其種類名稱を知るを得さりしが以後講究の結果左の數種なることを知了せられたり

レッドアストラカン(祝)　ヒルマンドクラーク　メナジエー　ニュータウンピッピンサンダースリンヌウペッパン

其後各試植の苹果は數年を經て結實するに及びしが其栽植の方法幼稚にして十分の成蹟を見るに至らす漸く生育を全ふしたるもの祝レットアストラカン、ヒルマンドクラーク、の數本に過ぎす

明治三十三年第三回内國博覽會の東京に開設せらるゝや田村昌八郎氏は視察として之に赴き奥羽北海出品苹果の出品麗はしく群列せられたるを見て前途好望の果物なることを確認し且其栽培の狀況を取調べ歸鄉後之を山田元五郎氏に詢るに氏も亦苹菓栽培の有利なるに嘱望し大に志を傾けたるの時協力斯業に從事せんことを誓ひたり茲に於て田村氏は受賞者四十余名の書を撰して種類撰擇に務め全年秋季東京青森岩手の府縣より田村氏山田氏苗木を購求し山林を開墾して翌年春季移植したりと之れ本村苹菓栽培の今日を得し大基因なり而して種類撰擇に際し照會せし博覽會受賞者は青森岩手福島秋田山形及北海道の一道五縣に渉り土地氣候の關係により地方々々良種と認めたる種類に多少の等差あると本邦輸入後自己が初めて栽培せし種類を擧げて之を加へし弊ありたるにより良種として撰擇せられたるものゝみにより良種として撰ばれたるもの三十一種の多きに及びしが暖地に於て苹果栽培の行はれざる當時の事とて其良否は試驗の結果を俟たざるべからざれば悉く採て栽培試驗することゝはなりぬ又其名稱左の如し

紅魁　初　小町　丹頂　黃金丸　祝　紅絞　大錦
歷徵　紅玉　青龍　赤龍　緋威　緋衣　美麗　醉美人
甘露　鳳凰印　初日の出　深綠　大紫　大猩々　小猩々　小錦
臘月　倭錦　蝦夷衣　國光　黃金　鶴玉子　柳玉

兩氏は熱心栽培に從事し苦て果物の改良發達を以て自ら任し勸奬大に勉めたり其自子も曾ならず育發ゆる苹果は青紅累々として結實を始めたり奬勵の下結實の確証を得て苹果熟は旅然として一村を壓し之より頓に栽培者を增加し數年にして藩殖普及するに至れり爾に試驗の苹果中紅魁祝柳玉紅玉の四種は最優等の種類なることを認め奬勵せられたるにより村内及暖地に於ける新規栽培者の享受せし利益甚大なりとす且栽培法の改良發達せられたるもの亦少にあらざるなり

明治廿九年十一月田村山田二氏は苹果栽培視察の爲め相携へて東北地方及沿道の果樹を調査し歸來親しく其狀況を示して益誘導に盡したり

興居島村誌

全三十二年果樹栽培に熱心なる田村昌八郎田村次郎田村晴太郎山田元五郎小林光次郎（小林佐七の實子）宮田兵吉福島安次郎七氏の發起により興居島果樹協會を組織したり本村果樹栽培業は前述の如く嘉永の昔に起り茲に五十四年其間些少の頓挫なく明治二十三年以後長足の進歩を以て改良蕃殖し來り初め廿五俵の米を以て開かれたる果物の收入は今や年々四万圓以上の產額を得るに至るの盛況を呈し全村農作物中其產額第一位を占むるのみならず縣下重要物產の一に數へらるゝに至れり而して栽培總反別は約二百町歩にして之を類別すれば左の如し

名稱			
苹果樹	一〇〇、〇〇〇	七八、九五〇貫	二一、〇〇〇圓
桃樹	六〇、〇〇〇	一八〇、〇〇〇	一二、六〇〇
梨樹	二〇、〇〇〇	二六、九二〇	四、二〇〇
雜果	二〇、〇〇〇	四二、〇〇〇	四、二〇〇
計	二〇〇、〇〇〇	三二七、八七〇	四二、〇〇〇

備考　苹果の產額其植付反別に比し少額なるは移植後未だ年を經ず幼木の果園多きを以てなり雜果は枇杷柑橘類を主なるものとす

現今本村に於ける一反歩以上の果樹栽培者は總數三百二十五人にして全戸數一千戸に對し三割以上の多數に及び内由良に百四十人泊に百五人門田に八十人を有せり（三十六年調査）

門田に故堀内匡平といふ人あり幼より勤儉にして學を好む壯年に及び學大に進む節儉勉勵篤行寡言常に身を以て人を率ゆ村民擧て其德に服し鄉黨其風に馴致せんとす頗る中江藤樹先生の風あり切に藩中の非政を改良せんことを建白して用ひられず時に各所に貼札するものあり官吏以て匡平の所爲ならんとて獄に投ず牢中に投ず三年大に獨立自治の道を計り節儉勉勉にして罪人を憐み或は村民を救恤す寃晴れて免さる後藩に事あり藩主の命に依り京師に使し大功あり曾て獄中に在りて良夜不見月文を作す舊小松藩士近藤春蕣其首に叙す今其叙文を左に示す

讀堀内桑崖翁良夜不見月文叙其首

堀内新三持其父桑崖翁獄中自書和文一編來示余曰是亡父遺筐中所得者也亡父當慶應年間公武踏躙之際深懷勤王之志因上書舊松山藩府建白其說藩府不用且避幕府之嫌疑遂見幽閉在獄三年獄中無聊慨慨無措性固巧緻因裂楮紙撚之編造汗衫以遣心其紙片之端切斷之者裏之糊之爲一大紙書其所撰良夜不見月一篇以寓意焉蓋亡父之心以吾心死獄此一紙聊以表吾意焉耳已而被免歸家遂藏之筐中既歿後適得之筐中願君記其顚末遺諸後世使子孫永有所警戒余取閱之寸許三角紙片綴之爲一大紙細字成文一見而翁忠貞之心與其微密之思皆可想也因問白獄中有刺血書者有拔衣襟而書者今獄中何由得之細書之筆硯乎新三答曰昔聞之獄囚曰支米八合亡父因日食五合剩三食獄積之爲藥資且以頗知醫療之法因救獄囚病者獄囚皆感其恩惠獄吏亦憐其義心遂爲請有司給墨針因得書此余因又想翁之仁惠能恤物也且又聞之翁之出獄也藩府之意亦中變方定動勤王之議遂起翁差遣列藩周旋其事賜祿俸若干則翁不特厚於勤王其盛忠於藩侯侯亦可知也既辭祿退隱自娛蒔有廢藩置縣之令於是人皆感翁之先見矣噫若翁者既有忠貞之節又有仁恤之心有先見之明有微密之思衆善之集不可勝紀皆於此一紙見之是豈可不重哉可不珍哉況爲翁之子孫者見之豈可不念繩其祖武哉遂書以贈焉若夫方詞之古雅和平不怨不迫有古騷人之風者則有覽者審之此不不復贅

明治癸未七月　舊小松藩士　近藤春蕣　撰

門田に故竹内作藏といふ人あり故堀内匡平氏の僕たり誠實以て主人に事ふること三十餘年始終一貫曾て主家全員不在なること月余作藏留守番を勤む時に大暴風運りに及ぶことあり村中の家屋大抵其害を蒙らざるなし甚しきは全家破壞す時に作藏の家屋も其風害を蒙り破壞せんとす妻走り來りて歸

宅を促す作藏應ぜず其後近隣の人來りて破壞甚しく全滅の憂あるを以て歸宅を勸告するもの幾人幾度なるを知らず作藏嚴然として曰く吾主命を奉じて留守す如何なる事あるも私事の爲め門を出づべからずと遂に歸らず而して自宅全く破壞に歸す而して其後主家を留守する數十日に及ぶ然れども其間一足も門を出でずと以て如何に主家に忠實なりしかを推知することを得村人義僕といふも實に適評と云ふべきなり

本村長堀内新三氏慈善之大要を概括せば變災疾病其他事故の爲貧困に陷り艱難せるものに對して常に施米施金をなし以て救恤するのみならず亦貧民の爲に產を興すの道を授け小作人中災害に罹り困窮せる場合又は收穫平年に劣る時は小作人の訴を待たず其年賃を減じ或は全免するを常とす其他進で公共事業の爲めに私金を投ずるを客ずず今其一例を示さば村公共事業にして之を設置するに其費目なく且之れが費用を徵收し難きものある時は自其全額を拋て以て之を設置せしことさへありしと云ふ以て其他を推知するを得べし

伊臺村誌

沿革　本村は上古伊代村と稱して一村なりしが今より凡三百年以前分離して上下伊代の二村となる天正年間河野の臣伊代伊左衛門の領せし地なるにより伊代村と名づけしといふ又一說に村の中央に臺の成と稱ふる所あり因て代を臺と改むといふ明治二十三年町村制實施により上下合併して伊臺村とする

位置及境域　本村は溫泉郡の東北方に位し東は湯山村北は五明村及堀江村に接し西は潮見村に隣り南は道後村に界す其形狀方圓なり

廣袤　東西二里南北二里十町あり

面積　本村の總面積は四百八十七町八反四畝六歩にして其內譯左の如し

田	百九町六反三畝七歩	畑	三十六町一畝七歩
宅地	九町三反九畝七歩	山林	三百三十二町四反歩
雜種地	四反十五歩		

地勢　本村は郡內の高原地に屬し周圍山を以て圍繞され中央の部稻平坦にして田畑開け其間を一條の川流貫通せり

山誌　勝岡山　は本村の稻東部に峙ち其高約二百四十八尺絕頂は少し〻平坦にして古木鬱蒼たり

國見山　は西北隅に聳ゆ高約二百尺なり

蛭原畔　は勝岡山の西北方に相並びて屹立し其高さ勝岡山を拔くこと約十二尺にして本村第一の高山なり

高塔峰　は本村の南方に位し高さ約百六十尺あり昇降頗る峻險なり

長四郎山　は西方潮見村の境に位し高さ約百九十尺許あり

水誌　川は伊臺川と稱して水源は堀江村大字小栗より來るものと本村大字上伊臺より發するものとの二あり此二川字清岡にて合し太松に至り曲折して東方に流れ遂に湯山村大字食場にて石手川に合す其長凡一里二十五六町にして幅四間乃至五間あり頗る灌漑に便にして鰻、鯰、鮒、ドンコ等を多く產す

池は養谷池道之池キョーデ池等最大なり何れも田土の養水を貯へり

氣候　氣候は寒暖宜しきを得て積雪等を見ること甚稀なり且大暑と雖も三十度を昇降しつゝあり風向は冬は北風多く夏は南風多し

地質　地質は火成岩より成り砂土埴土等最も主なるものなり

伊臺村誌

天産物及其分布　天産物には山には松最も多く之に次ぎて櫟等の雜木繁成し雉子山鳥兎等の動物を產す其他菌類にては松茸茶茸初茸等あり川池には鯉、鮒、鯰、ドンコ等最多し而して人生上に及ぼす利益は松櫟雜木等を最とす

區劃及政治　本村は上伊臺下伊臺の二大字に分ち上伊臺には實川、須倉、蓋谷、本村下伊臺には松組、梅組、櫻組、氷室等の小字あり其面積は左の如し

上伊臺　八百九十九町二反十六歩　下伊臺　二百八十八町六反三畝廿歩

村役場　は下伊臺にあり村會議員は十名なり

戸數　本村の戸數は二百五十四戸にして其内譯左の如し

上伊臺　九十四戸　下伊臺　百六十戸

人口　人口は千五百三十人にして男七百九十六人女七百三十四人なり内原籍民は男七百六十九人女七百九人にして概ね工業を目的として移住せるものなり

人情風俗　氣質は朴直篤厚にして裕なり言語は概して野卑にして方言訛言は松山附近一般に行はるゝ者にして特に本村限り使用する所の者はなし下伊臺は一時遊藝に耽り華奢を競ひ村内頗る疲弊を極めしが近頃大に悟る所ありて衣食住總て質素を旨とし勤勉貯蓄をなすの風に赴けり上伊臺は從來頑固の民多く隨て万般の事守舊の風ありしが近年兩部落共協同一致して著々弊弊を打破し改良に向ふの兆を表はせり

教育　伊臺尋常小學校は明治七年八月十日の創立にして當時は勝岡小學校と稱し下伊臺に本校を置き上伊臺に第一分校を置き大栗村に其第二分校を置き本校は西法寺を假用し分校は何れも其所在地の共有家屋を使用せり當時は設備大に不完全にして生徒は唯文庫を前に置き端座して業を受けつゝありたり後明治十六年末に至り第二分校を廢し明治二十年四月學制の改正に依り從來の分校を合併して簡易科伊臺校を置く茲に於てか忽ち教室の狹隘を訴ふるに至り舊屯倉の一部を修繕して校舍に充てたり是即ち現在の校舍なり後廿三年四月簡易科を廢し四年程の尋常小學校となる爾來生徒漸次增加せるを以て屯倉の全部を取込み教室となせり

夜學會　は伊臺村青年夜學會と稱し明治三十七年十月の創設にして高等小學校に入學し能はざるものに主として修身國語算術の三科を授く

衛生　避病者の設けありて傳染病患者を收容す又衛生組合を兩部落に設けあり定期清潔法　は毎年二回にして特に傳染病流行の際は臨時清潔法を行ふ

警察及裁判所　松山警察署道後分署の所轄にして下伊臺に巡査駐在所あり裁判所は松山區裁判所の管轄に屬す

宗教　宗教は神道黑住教天理教法華宗天台宗眞宗等なり而して神道及天台宗は祖先傳來の宗教にして村民十中の九は之を信仰せり眞宗は一部の人民の信徒を有するのみ其他の黑住教天理教法華宗等は何れも一盛一衰しつゝありて現今著しく盛況を呈しつゝあるものは一もなし

神社佛閣　神社には天神社客王神社の二あり何れも村社にして一は畠田別尊一は管公の靈を奉祀す

西法寺　は大字下伊臺にあり延暦十一年桓武天皇の御宇一條院宮の建立にして河野對馬守鬼門鎭護の靈場なりといふ治承元年火災に罹り堂宇悉く灰燼す後嘉永元年國守通有伽藍を再建す時に備中國命金山より辨慈上人此地に來り本尊無きを歎き叡山より惠心僧都自作の藥師如來を奉じ來れりといふ此寺に名櫻あり薄黑櫻といふ

各種團体　在鄉軍人會なる者を組織し軍人は勿論一般青年の志氣を奬成せんが爲め夜學會を設け或は其他の方法を以て地方の青年と相會し在營間の教育を未だ冷却せざるに溫め一方には普通教育の發達を

伊臺村誌

謀り併せて鄉黨の風紀を改良し良兵良民を造るの主旨を達せんとす本會は明治三十七年二月の設置なれ共其當時より時局起り在鄉軍人は略召集せられたるの故を以て規定の事業を實行する能はず漸三十九年四月に至り初度の通常總會を開きたるのみ

交通 道路　五明村より祝谷に通ずる里道は長凡一里十八町幅四間にして本村大字上伊臺字實川及び大字下伊臺字松組瀬戸風を經て道後村大字祝谷に達す該道は五明並に本村より松山市に交通する爲に開鑿したるものなり

大字下伊臺字梅組より湯山村大字高野に通する里道は長凡十八町幅三間にして本道も松山市に交通する爲開きたるものなり

本村より官衙及隣接村役場への方位及里程左の如し

縣廳へ	西南	一里十六町	郡役所へ	仝	一里十八町
湯山村役場へ	東南	十八町	五明村役場へ	北東	一里
潮見村役場へ	西	一里			

橋梁　橋梁は何れも耕作用の爲架せる粗造のものにして別に記載する程の者なし其中大松橋清岡橋一の坪橋白丸橋等重なるものにして清岡白丸の二橋は石造其他は土造なり

郵便電信　松山局の區域内にして集配は一日一回なりとす

生業 農業　農産物の主なるものは米麥にして之に次くは大根芋胡蘿蔔牛蒡等の野菜にして其産額少なからず多く松山地方に販賣す祇園坊梯は當村の名産にして販路は松山地方の外に商人の手を經て阪神地方に輸出す

林業　山林には多く松樹等を栽培し薪となして松山地方に販賣す

商業　山間の僻地にして漸く日用品の販賣を爲すに過ぎず

工業　特に記すべきものなし

財政 經濟の概要は輸出品の金額輸入品の金額より稍超過するに過ぎざれは敢て豊富なりと言ふべからざるも亦敢て困難なりといふを得ず

貯金　は組合を設けて之を實行しつゝあれども其人員金額共少許にして盛況なりといふを得ず學童の貯金も明治三十四年實施の當時は見込みきにあらざりしが爾來漸次不成績にして目下中絶の姿なり

名勝舊蹟 大字下伊臺西法寺境内に薄墨櫻と稱する名櫻あり花の頃には枝を曳くもの多し此櫻を薄墨と稱するは當寺は嵯峨帝の薄墨の綸旨を藏するより此名を得たりしなりと

御幸村誌

沿革 御幸村は山越姫原の二大字より成る元山越村等の名ありしが町村制實施によりて御幸村と稱す其當時の區域は祝谷姫原山越の三村を合せたりしも明治三十三年に村區域の變更ありて祝谷は分離して道後村に屬したり

此地は上古天皇御幸の跡なれば因みて御幸村と稱す大字山越は往古舟津の里久味の山越、松山越等の傳により名づけ姫原は允恭天皇の御代輕太子輕皇女の遷り住居せら孔薨去の後此地に奉葬し御墓今に現存せらるゝより名づく

位置及境域 本村は溫泉郡内の殆んど中央に位し東北は斜に一帶の山脈を以て道後村大字祝谷に接し南は朝美村西は久枝村に隣りし北の一部は潮見村に接す

御幸村誌

廣袤　東西凡十三町南北十町餘にして殆んど平方形をなす

面積　本村の総地積は二百二十八町五反五畝九歩八合あり其内譯は左の如し

田	百三十七町二段七畝二十八歩	畑	七町七段四畝八歩
宅地	九町五段二畝六歩七合	山林	四十六町三段六畝廿四歩
官有地	十八町二畝十五歩	雑種地	九町六段一畝十八歩一合

地勢　東北一帶の連峰ありて全村概ね高燥の地多く東南より西北に傾斜せり

山誌　村の東南隅に御幸山あり連峯中の最高きものにして高四百八十尺山頂に神社あり山麓に御幸寺あり櫻谷に傍ひて車回しの坂等あり

水誌　湯川　は本村の東南より斜に西北に流れ久枝村に入る石手川の支流にて幅二間深さ尺に盈たず

御幸寺池　は御幸寺山の南麓にあり廣さ八段歩深三間餘あり其開鑿は詳ならざれども今より九十年前なるべしといふ

松田池　は寺町の傍にあり明治十年の起工にして全十三年に成る廣さ四町餘深さ三間あり其形殆んど三角形をなす

姫原池　は大字姫原の山麓にあり面積七段餘歩深四間あり其開鑿詳ならず

隅田池　は姫原池の少し西にあり面積八段餘歩深三間明治二十六年の開鑿なり其外彫浦池矢執谷池老間の泉鯉の池等あり以上何れも灌漑に便にして鮒、鯽、鯰等を産す

氣候　氣候は中和にして酉寒の時と雖雪の積ること稀なり嚴暑の時攝氏三十五度嚴寒零度に降ることなし

地質　全村概ね火成岩より成り山越には砂地に壌土を交ゆるものあり

天産物及其分布　山林には松杉櫪の樹木あ是等は材木りとし或は燃料に用ふ

區劃及政治　本村は大字山越姫原の二部落より成り山越に小字新宅町、東組、西組、北組、中組、下組、新屋敷、西條谷の八區をなし姫原に上組、下組あり其地積は左の如し

山越	百六十八町六段三畝一合	姫原	四十六町七段七畝四歩三合

戸數　全村の戸數二百九十九戸にして山越二百六十一戸姫原三十八戸なり

人口　男女其數近く総計千八百九十九人内男九百五十二人女九百四十七人にして其内寄留民は男六十三人女六十人なり

人情風俗　氣質概ね溫和なれども新平民といふ側のものは却て粗慢なる風あり言語は市街接近地なるを以て方言訛言の特に舉くるものなし然れども尙野卑なる言葉を混じ居れり普通禮法は一般懇篤の風あり

教育　本村の教育は龍泰寺を以て校舍に充て同車學校と稱せしに始まる後千秋寺に移す明治二十一年同車學校分れて山越祝谷の二校となり山越にあるを同車學校と稱し舊村倉を以て校舍に充つ祝谷にあるを笑祝學校と稱し是又村倉を以て校舍とす町村制實施後御幸尋常小學校と改稱し祝谷には分教室を置きたりしが明治三十三年祝谷分離して道後に合併したるを以て山越姫原の二大字となり茲に校舍を新築し三十四年一月新校舍に移る現今通學區域の最遠きは姫原奥の谷にして道程十一町なり

衛生　各大字に衛生組合を設け衛生の事を司り清潔法は毎年春秋二回定期に之を行ひ避病舍は大字山越千秋寺境内に設置し傳染病患者を収容す

警察裁判所　警察は松山警察署管轄にして巡査駐在所あり裁判所は松山區裁判所の管轄に屬す

宗教　本村は佛閣多き地なるを以て隨て佛教を信ずるもの多く殊に山越はは市街に近接せるを以て其信徒多く其數約三千あり

御幸村誌

神社佛閣　本村には二社と十五箇寺あり左にこれを概擧すべし

村社還熊神社　本社は大字山越にあり本社の由來を尋ぬるに貞觀元年八月南都大安寺行教勅を奉して豐前宇佐宮より山城の男山へ八幡神の分靈を遷宮の途中海上風強く浪荒れ神船漂ひ伊豫郡松前の浦に着く國司此事を聞き行教を迎て國中道後に八社道前に八社八幡宮を建營し分靈を祀る後天正十八年十一月合祀し還熊八幡と號す慶長五年九月國主加藤嘉明の臣伽十成薩州勢を政ひる時此社兵火に罹り神體を持出したるの外寶物悉く燒失す其後の建築詳かならず古來旅立するものは此神を拜し置けば必ず故所に還るとの意にて今に賽客絶ゆることなし

村社　輕神社は大字姫原にあり允恭天皇第一の皇子輕太子皇女輕を祭る太子罪あり皇女と共に伊豫に流され此地に住み給ひ後薨去ありたれば御墓も此處にあり依て往古より奉齋し來れり

一說には道後へも入浴の節此地に住居せられしなりと信ずへきなし

御幸寺　往古舒明天皇の行宮ありし所にて岡本の庭寺なりと云ふ眞言宗新義派なり由緒詳かならず

天德寺　臨濟宗妙心寺派にして釋迦牟尼佛を祭る慶長八年加藤嘉明建立す境內に佛堂一宇あり聖觀世音を祭る延寶三年奥平次郎太夫の新築なり

弘願寺　淨土宗鎭西派にして阿彌陀如來を祭る享錄元年二月創立本尊は惠心僧都の作なり然るに安政六年三月十六日本堂燒失翌年八月再建すとあり

長建寺　淨土宗鎭西派にして阿彌陀如來を祭る天正十一年開山す眞畢上人丁吟和尙の代なり寶物には惠心の筆傳敎大師の來迎佛あり

法華寺　日蓮宗一致派にして十界具足大曼荼羅を祀る後水尾天皇慶長年中該寺を開くと寶物に日蓮上人の筆蹟ありと云ふ

不退寺　淨土宗鎭西派にして本尊は阿彌陀如來なり寶物に弘法大師の作地藏菩薩の木像あり

淨福寺　淨土宗鎭西派にして本尊は不退寺に同じ正親町天皇元龜三年五月十日の開山なり

龍穩寺　本尊は釋迦如來迦葉尊者阿難尊者なり曹洞宗總持派にして開山は右本寺龍文寺月湖和尙之をなす開基は人皇第七代孝靈天皇第三の皇子其英眞五十二代刑部大輔河野通宣公延德二年六月十五日當寺を創建し前記月湖和尙を請して入院せしむ寶物には蜀江綿の袈裟光明皇后御眞筆の法華經全八卷あり

來迎寺　淨土宗鎭西派にして本尊は阿彌陀如來當寺は往古道後村に在りて西ノ宮別當所なり領主河野家の創建に係る元天臺宗と見ゆ天文十二年淨土宗に改め智恩院の末寺となし良莊和尙中興せり古說詳かならず良莊を以て開山とす寶物に慧心僧都の來迎佛あり寺內に足立重信の墓あり

東榮寺　禪宗曹洞派にして本尊は釋迦如來なり昔は味酒村にありしを寛永十三年當寺開基の見道和尙創立す

千秋寺　禪宗黃蘗派なり貞享四年建立即非和尙の開山にして寶物には大毘槃の畫像（唐畫）十六羅漢の畫像（狩野永眞筆）其他種々あり古は有名なる寺院なりしが今や廢頹古觀を呈せす松山市共同墓地に使用せらる

龍泰寺　曹洞宗總持派なり創立詳かならず天保元年四月當寺二十世住職石天和尙再建す之を中興となす

西禪寺　曹洞宗總持派なり天保三年正月龍穩寺の住僧十三世本牛和尙の開山明治六年廢寺となり仝十三年龍穩寺三十四世の住職天然和尙再建中興せり

法界寺　淨土宗鎭西派享保五年二月創立本尊は惠心僧都の作なり

大行院　姫原にあり天臺宗寺門派なれども由緒詳ならず

交通

（一）道路　湯川に沿ふて南山越朝美村境より潮見村に至る縣道あり其幅三間長凡拾町あり南

御幸村誌

山嶺高橋より道後村大字祝谷に至る里道あり其幅凡三間長七町弱なり縣道は北部より市街に入るの要路たるを以て道路平坦里道も道後へ行くの要路なれば是又平坦にして共に交通便利なり

（二）橋　梁　高橋は木屋町筋の突き詰にして學校の近所にあり橋と稱する程のものならねど古來有名なり又古町に至る所に一の橋あり之れ古　勅使橋のありし所と聞けど今は無漏橋と稱す共に石造なり

（三）郵便電信　松山郵便電信局の管轄に屬す

生業　（一）農業　農産物は米麥蔬菜大に地味に適す近來蔬菜を栽培するもの多く其產額は平年にありて米二千五百四十八石麥千八百石雜穀五十石野菜の收入凡百圓なりとす販路は多く松山市なり

（二）商工業　本村の商業は小賣商のみにして地方民の日用品を供給するに過ぎず製造業又規模小くして見るに足らず

財政　本村の稅源は多く農產物にして貯金は年々增加するの傾向あり

名勝舊蹟　御幸山の南麓に御幸寺あり舒明天皇行宮の跡なりと云ふ

大字山越龍穩寺に十六日櫻と云ふあり每陰曆正月十六日に花を開く今に同日杖を曳くもの多し此花樹櫻谷と云ふ處にありしを幾星霜を經たる後其窟を移し今の所に移し植ゑたるものと聞く倘櫻谷に其古木の驟あれども谷間は却て同期に花を見ざること多し其傍に碑ありて其碑中「いつの世の事にかありけん和氣の郡山越の里に名を吉平となん呼ぶ翁ありけり云々」其大意は此翁老後病床にありて命旦夕に迫ると云ふ時其子に向ひて最早世に望なけれと唯櫻花を見て死なんことの口惜しと云ひたるを其子一夜櫻下に祈願せし爲め夜中花咲き出て爲めに其病痾全く癒ゆるに至るとあり斯くも愛度き花なれは代々の帝王溫泉に浴し玉ふ御序に此所に御幸ありたりきと云ふ

嘗て或帝の此花を叡覽遊ばされしとき花未だ咲かず御本意なく還幸遊ばされし跡より花咲くと申奉りしにより急ぎ御車を回させ給ふことありて其坂を車回しの坂と云ふ事あり又勅使立ち御車を停めたる所ありて勅使橋と云ひしものあり、

碑　大字山越字岩田に黑色の岩あり昔源爲朝が弓術を習ひたる所にて矢取櫛現と云ふ小祠ありと云ふ

舊法に　北山越邑有神祠曰矢執權現古鎭西八郎爲朝登千金越山試弓童子從側焉四矢勢不疾爲朝曰有說乎童曰有癸先生復射癸小子解之輙蹲矢而癸焉童子持其矢爲朝心畏憚是神也不及癸冀受教童子乃授許弓之秘訣既而忽不知在癸云々

潮見村誌

沿革　本村は町村制實施にあたり吉藤　大內平田、谷、志津川の四ヶ村を合して一村となし潮見村と名づく蓋し潮見村なる村名は大字吉藤と谷との境界に接し河野家の子孫大內伊賀守信泰の居城趾潮見山なるものあり因て名づけしなり

大字の起因　吉藤は大字吉藤某字に藤の木と稱する所あり往昔此所に一大藤樹あり因て起りしものならん大字谷は往古谷別里なるあり因て之より起りしならん大字大內平田は此邊大內鄉なるあり因て起りしものならん大字志津川は往古三津の一なる飽田津と稱する津あり此地其津に接近せしに因する故ならんか

位置及境域　本村は郡內中央部の北にして北は堀江村東は伊豫村南は御幸村西北は和氣村西南は久枝村に境す

廣袤　東西凡三十町南北凡二十五町あり

面積　本村の總地積は四百五十五町一反三畝廿六歩にして內譯左の如し

潮見村誌

田　百七十七町七反三畝九歩　畑　廿九町三反二畝二歩
宅地　十四町七反二畝三歩　山林　二百三十二町七反七畝廿一歩
雜種地　五反八畝廿一歩

地勢　山脈は東北にありて南北に延ひたり地は東方高くして西北に低し隨て河流は西北に向て流る

山誌　山は潮見山松舟山等名高く何れも大字吉藤にありて舊蹟なり而して潮見山は直立凡一千四百四十尺松舟山は直立凡一千八百尺ありて土質は何れも壤土及埴土なり

水誌　河湖池沼灌布に就ては別に記すべきなし灌漑に於ては大字谷の内小部分に於て習慣上石手川の水を引くのみ各大字には各數個の溜池あり以て灌漑の用に供す概して灌漑の上に就ては蓋し便利の地ならん

氣候　氣候は溫和にして極暑三十四度極寒五度なり風向は春夏は南、北風多く秋冬は西、北風多し

地質　地質は多く埴土にして又砂土を交ゆ

天産物及其分布　天産物として別に記すべきものなし

區劃及政治　本村は吉藤大内平田谷志津川の諸村を合併して一村となしたるものにして元村名を大字名とす村役場は大字吉藤にありて村會議員の數は十二名なり

戸數　本村の總戸數は三百四十二戸にして其内譯左の如し

吉藤　百三十一戸　谷五十五戸　大内平田八十八戸　志津川六十八戸

人口　人口の總數は二千十三人内男九百六十三人女九百七十人なり又寄留民は八十人にして内男四十人女三十九人なり

人情風俗　全村擧て農業者のみなれば人情質朴にして概して之を評すれば善良なりといはざるを得ず而して官語及習慣上特に記すべきものなし

教育　學校は村立潮見尋常小學校と潮見村外五ヶ村立鴨川高等小學校あり抑も潮見尋常小學校の創立は明治七年三月にして吉原小學校と稱し鏡原、吉藤、谷、東長戸四ヶ村の組合にして全十五年七月迄で吉藤村誓願寺本堂を借り入れ机腰掛の如きも極めて不完全なりし全年十二月大内平田村大内小學校と合併せり是より先校舍狹隘を告ぐるに至りしを以て全年八月全村舊殿倉へ移轉し而して東長戸村は分離して安城寺村急水小學校へ通學せり爾來五六の星霜を經二十三年町村制施行と全時に吉藤、谷、大内平田、志津川の四ヶ村合して潮見村となり組合中の山越、姫原の二ヶ村は御幸村となりしを以て分離し村立小學校を設置せしが時勢の進歩と共に就學兒童增加し校舍狹隘となりしを以て廿五年四月校舍を新築し三十三年潮見尋常小學校と改稱せり

衛生　衛生組合を設け各大字に衛生組長及副組長を置き衛生一般を掌らしむ避病舍は稍不完全たるを免れずと雖も内容に於ては殆と整頓せり

警察及裁判所　警察は松山警察署の管轄にして巡査駐在所あり裁判所は松山區裁判所の管轄に屬す

宗教　宗教は黑住教及佛教にして其信徒數は多く佛教にして盛衰なし

神社佛閣　鄕社阿沼美神社は大字大内平田にあり延喜式内の神社にして其創立年代詳ならざれども伊豫舊記編に載する所によれば元明天皇和銅五年八月勅詔を以て國司越智宿禰玉興越智郡大三嶋より當藏の二神を勸請合祀し三島新宮地の御前と號せりと又大沼大明神とも阿沼美の宮とも稱へられしこともありしが如しそは天保五年社前御幸橋再興に當り丈余の地中より石額を堀り出せり其額面は阿沼美神社其後文錄年間阿沼美三島新宮と稱へられしこともあり然るを寛永年中より三島新宮大明神と稱へしも前記石額發見と共に藩命を受け社號を式内阿沼美神社と稱し奉れり明治四年鄕社に列せらる

村社三島神社　吉原熊野神社は大字吉藤にあり聖武帝の御字神龜五年國司平致宿禰勸請し奉し社殿を

潮見村誌

遣答し越智郡大三島より大山祇命雷神高龗神を勧請し仝年九月紀伊國熊野神社山城國貴布禰神社を勧請せしものにして潮見山城主大内伊賀守氏泰の氏宮として崇信浅からざりしと

村社天満神社　は大字谷にあり往昔菅公山田山の山頂に芝を布き休憩ありしを以て芝布天神と稱すといひ傳へり

蓮華寺　は大字谷にあり眞言宗にして今の本堂は和氣郡中の建造に係るものなり往昔行基菩薩諸國巡錫の時室岡山頂に瑞光の輝やけるを遥拜し登りて見れば光明の中に藥師の尊容あり因て一刀三禮の藥師像を刻み伽藍を建立して之を安置せりと

各種團体　別に記すべきものなし

交通　縣道　今治街道は大字吉藤谷大内平田の西部を貫通せり道路平川にして車馬の往來便利なり

里道は各大字に通ずれども別に記すべきものなし

本村より官衙及近接村役場への方位及里程左の如し

縣廳及溫泉郡役所へ	南	一里十三町	御幸村役場へ	南	十五町
久枝村役場へ	西	十五町	堀江村役場へ	北	二十町

郵便電信　松山郵便局の區域内にして一日二回の集配あり

生業　生業は單に農業のみにして婦人は常に綿を製造す此収入比較的多し

財政　本村は農村にして經濟の点よりいへば本郡内中位にあるべく而して税源は地租割戸數割なりとす

名勝舊蹟　潮見山城は大字吉藤にあり永錄中大内伊賀守信泰の居城なりき今久枝村及本村の神職に大内家あるは此人の裔なり

松船城趾　は大字吉藤にあり往昔松船兵衛の居城なり又白石若狭太郎及其子兵衛太郎等の居城にして其霊を祀れる小祠あり

久枝村誌

沿革　本村は古日左恵太郷と稱し和氣郡に屬せしが明治廿三年町村制實施後高木安城寺東長戸西長戸久万の五ヶ村を合同して久枝村と改稱し以上五ヶ村を大字名とせり

位置及區域　本郡内の中部より稍西北部に位し南は朝美村に接し東は御幸村潮見村北は和氣村西は新濱村及古三津村に接し東西に狹して南北に延長せり

廣袤　東西十町南北一里十町あり

面積　總面積四百十五町廿九歩にして其内譯左の如し

田	三百二十九町壹反七畝三歩	畑	十九町七畝二十五歩
宅地	二十二町三反三畝廿六歩	山林	四十四町五歩

地勢　山脈は西南に柴山、鳶が谷、鹿が谷、本山、丸山、野津子山、幅岡、大久保の諸丘綿亙して朝美村大字衣山の唐土山に連なる西より東に延長せり西北に大谷山あり山脈舟越山に連る河流は大字久万に龜の子泉あり之より出源する久万川あり西長戸安城寺を通過して和氣濱に注ぐ吉藤川は潮見村大字吉藤より來り東長戸に入り西に流れて久万川に合す

山誌　本村の山は悉く西南隅に在りて大谷山は直立二十五間柴山は十五間鳶が谷は十六間東山は十三間丸山は六間野津子山は十間あり土質は總て埴土なり

水誌　久万川　は本村の西部にあり長さ二里余新川吉藤川を合せ北流して和氣村に入る

池には新池勘左池長谷池綛池太郎丸池角田池馬の蹄池牛引池惣の内池市坪池等なれども皆小池なり

久枝村誌

其内紀池最も廣し而して其位置は西南に紀池あり其西に新池あり其東南に長谷池あり其東に勘左池あり東南方に太郎丸池あり正東に角田池あり西南に馬の蹄池あり東北方に惣の内池あり北に牛引池及市の坪池あり産魚としては鮒鯰鰻を以て最とす

久万川　は朝美村龜の子泉より發し新川は石手川の支流にして御幸村大字山越より來り吉藤川は伊蕊村の谿水を合して本村に來る

氣候　北風最多く冬季の風は常に激烈を極む溫度は最高三十度にして最低五度を降ること稀なり

地質　地質は水成岩にして埴土なり

區劃及政治　本村は四ケの大字に區劃し村役場は大字四長戸にあり村會議員の數は十二名なり今各大字の地積を擧ぐれは左の如し

久万	百二十九町五反二畝十四歩	東長戸	六十五町七反三畝十三歩
西長戸	六十一町七反八畝廿八歩	安城寺	百三十九町五反一畝十歩
高木	二十八町四反四畝廿四歩		

戸數　全村の戸數六百九十六戸にして各大字別左の如し

久万	百八十五戸	東長戸	百二十二戸
安城寺	二百三十二戸	高木	四十七戸
西長戸	百十戸		

人口　人口の総數は三千四百六十七人にして内原籍民三千四百十八人寄留民四十九人ありて更に之を分ては男千六百六十九人女千六百二十人なりとす

人情風俗　本村人民の幾分は其氣質傲慢にて人の短を指摘して快とし又言語は野卑にして粗暴の弊あり然れども其大分は一致團結の良風あり故に一村の統治甚難からず

衣食住は贅澤なりと云ふを得さるも其程度は稍高き感あり又風俗は松山市街に接せるが爲自然華美

の風に傾けり

教育　明治八年教育令を施したるを以て安城寺村に鬼水小學校（安城寺高木）久万村に原泉小學校（久万）西長戸に長畝小學校（東西長戸）仝時三小學校を設立し皆村庫を校舍に充て開校せり後明治二十年五ケ村の行政區域となるに及んで以上の三校を廢し更に西長戸村字角田に長戸尋常小學校を設立すへきことを指定せられたるも當時未だ新築の運びに至らざるを以て假りに元鬼水學校を本校（安城寺高木東長戸）元原泉小學校を分校（久万西長戸）として開校せり後明治廿三年町村制實施の際長戸尋常小學校を久枝尋常小學校と改稱し仝時に久万分校を分教場となす其後明治卅二年生徒數增加の爲現在の校舍に收容する能はざるを以て大字東長戸の庵寺を借受け第二分教場を設け東長戸西長戸の兒童を通學せしむ當時の校舍は何れも舊村庫に修繕を加へ假用せしものにて本校の如きも間口五間奥行三間半の不完全なる二階造りにして之れに百四十余名の生徒を收容し教場は周圍に小窓を穿ちたるも雨天の時等は暗夜の如く少しも教授すること能はす空しく生徒を歸せしことあり運動場は僅かに三十坪内外にして少しも運動の用を爲さす且參考書類教授用器械は一も備へなく職員たる者の大に遺憾とせし所なりしが明治三十三年十二月現今の校舍を新築し仝三十四年九月一日之に移轉せり其後三十七年五月副築工事を起し南方に二教室を增築せり以上の外本村に左の學會あり

久万部落に修道館あり明治三十二年二月の開始にして修學生百人あり東長戸に文農會あり三十五年十一月の開始にして修學生十五人あり西長戸に弘學舍あり三十五年十月の開始にして修學生十人あり安城寺部落に練磨會あり三十五年十二月の開始にして修學生二十三人あり又高木に尚文會あり三十五年二月の開始にして修學生十五人あり

衛生　避病舍は大字西長戸にあり衛生組合は大字毎に設け清潔法は春秋二回に日を定め村役場吏員駐在所巡査戸毎に臨檢し組長副組長之を監督して村長に報告す

警察所　三津警察署の管轄にして大字西長戸に巡査駐在所あり

宗教　宗教は佛教天理教黒住教神道等にして其信徒數佛教七百六十三人天理教八十一人黒住教百六人神道五十人にして各教共敢て盛ならざるも亦衰ふることもなし

各種團体　學業修養の目的を以て各大字に夜學會を設け青年子弟の教養に勉めり

交通道路　今治街道は松山市より越智郡今治町に通ずる縣道にして本村の東端を南北に貫通す幅三間長村内を通ずること七町あり俗に之を七曲りといふ道路平坦にして交通繁く貨物の運搬最便なり

其他の道路は其數二十あれども皆里道にして幅一間長六七町に過きず

本村より官衙及隣接村役場への方位及距離左の如し

縣廳へ　東南　一里十町　温泉郡役所へ　東南　一里八町

御幸村役場へ　東南　二十九町　潮見村役場へ　東北　十町

吉三津村役場へ　西南　二十町　新濱村役場へ　西北　二十六町

和氣村役場へ　西北　三十町

橋梁　新川に架せるもの六あり久万川橋四反地橋と稱す幅長共二間余ありて木造なり

久万川に架せるもの六あり久万川橋四反地橋角田橋砂川橋遍路橋田井橋是なり此内久万川橋は石造にして他は悉く木造なり長さ何れも三間以上あり

郵便電信　三津局の區内に屬し一日一回の集配あり

生業　農業　農産物の主なるものは米麥雜穀野菜等にして其産額左の如し而して之れが販路は三津松山なりとす

米　八千二百二十一石七升一合　麥　三千六百石

林業　樹木は多く松にして自然の繁殖に任せ伐採して薪となし三津松山等に販賣す

商業　商業区多く行商にして特に記すべきものなし

工業　工業の主なるものは瓦、土細工、籾磨櫨蠟等にして數千圓に過ぎず

財政　本村は農村にして敢て豊富ならざるも中等以下に降ることなく重なる税源は地租割戸數割等なりとす

名勝舊蹟　本村には名勝舊蹟の見るべきもの少し只大字久力に一小丘あり此所に万景山成願寺の建立せるありて同所は勝景の地なるを以て國主万景の山號を附せり全景一目瞭然たり就中東西の景を最とす東は松山鎮臺城を始めとし市街及道後の温泉山越姫原吉藤等の諸村一目の下にあり北は鹿嶋堀江和氣濱を望み南は唐山衣山に近接し西は三津港灣を距て十數里の綠海を眺望し防長の島嶼又眼中にあり伊豫の小富士は眼前に屹立し千帆氣船の來往頗繁にして間斷なし實に天然の公園と言ふも過言にあらざるなり春時遊客酒瓢を携へ來り遊ぶもの多し且又時々陸軍並に諸學校の運動野外演習あり

沿革　本村は明治廿三年舊和氣濱村馬木村太山寺村の三村を合併したる際當時戸長役場の所在地なりしを以て和氣濱の濱の字を除き之を村名となしたる者にて現今和氣濱馬木太山寺の三大字に分つ

大字太山寺　はもと新濱和氣濱と共に一村にして久枝郷に屬せしことあり天正十八年諸郡郷邑内の小字名を悉く村名に改め太山寺は有名なる巨刹太山寺あるに因りて名づけしなり大字和氣濱は伊豫舊記に別の里とあり日本武尊の御子十城別王を始め其子孫の居館ありしを以てもとの郡名村名となりしものならんか又別に和氣姫の事蹟に因るとも云ふ大字馬木は伊豫古蹟志に馬來ると又風土記に有摩城ありと又天智帝の御宇古跡中に右間城(水城の名)ともあり

位置及境域　本村は温泉郡の西北に位し南は久枝古三津新濱と界を接し西も亦新濱の内なる新浦屋及上の谷と山嶺を以て隔り北は海に瀕し東は平野を以て堀江潮見の諸部落と交はる

廣袤　東西三十二町十七間南北一里五町十間あり

面積　本村の總面積は五百二十六町八反二畝廿七歩一合三勺にして其内譯は左の如し

畑	三十七町五反九畝七歩	田	三百七十七町五反二畝九歩
宅地	二十一町七反一畝四歩	山林	百六十町一反五畝五歩
雜種地	一反三畝十八歩	其他	廿九町七反一畝十四歩

海岸線　殆んど一直線にして屈曲少なく其延長二十五町六間あり

嶋嶼　犬頭島は大字和氣濱にあり面積約百平方尺にして高三丈許りの小島なり其東南五町の沖に岩礁あり里人之を中瀬といひ干潮には其頂水面に現はるれども滿潮には見ゆす

潮汐　滿干の差夏季に於て著しく而かも平時は僅かに三間半許りなり

地勢　西部より東に低平なり西峰最も高く此村の目標たるべし

山誌　船が谷山は一に佐古山と呼ぶ高さ二十五丈と稱し其西部は新濱に屬す樹木少し南山脈之に續き高三十五丈あり南は新濱古三津の山峰に接し其脈西に走りて岩子山に連る此間に國見峠あり浦戸大谷姥が谷は此東方の麓にあり更に地藏越を横りて南方の山脈を上下せば遂に西方の高嶺に達す岩が森は藏王權現靈廟の地跡にして峯は三德に擬して霧常住の香煙を糾ひ溪は大悲に象りて水不斷の梵音を洗ふといふ經が森は高く天に聳へ古松は清風に吟じ老杉は俗塵を拂ふ往古聖武帝の御納經ありしと所なれば經の森といふ此北に峻坂あり高濱への通路にして東の谷を鬼の谷と呼べり鬼の谷越約六町の登りにして降りは遠し北に進めば弘法大師が經行の蹟といへる護摩の森あり中谷城林丸山山田勇ヶ峰等相連り相重なる勇ヶ峰は曾て温泉の出でし所山脈彌々北に走り支脈は南に折れ東に曲り蜿蜒

として谷を爲し或は野に盡く此間或は山麓に沿ひて大煙稀に上るを見る經田大久保清水等は概して其東南に屬し登り尾牛の子宮ヶ谷片岡坂退等は北東に屬す北山中其最高き所約四十八丈あり土人此山を森谷ヶ峠と呼べり

水誌　太山寺川　は西峰諸谷の水を集め本村（太山寺の麓人家の所）を迂回し東に流れ北に曲りて海に入る幅二間深四尺許水少し此入口を樋の尻川といふ

久万川　は村の東方にあり久枝村大字久万より來り北に流れて小字入木屋に至り海に注ぐ幅四間五尺深一間あり

池は本村に許多ありて正數殆んど九十以上あれども大なるものは新池大谷池入山田池經田池尾池等なり

氣候　盛夏三十四五度にして極寒五六度なり

地質　山は大体火成岩平野は堰土泥灰砂土石灰部分々々に於て其主成分たり

區劃及政治　本村は和氣濱、馬木、太山寺の三大字より成りて村役場は大字太山寺にあり村會議員の數は十二名なり今各大字に屬する地積を擧ぐれは左の如し

和氣	百二十三町八反八畝廿七歩	馬木	六十九町二畝十歩
太山寺	三百三十町三畝六歩		

戸數　全村戸數は六百三十六戸にして其内譯左の如し

和氣濱	二百十六戸	馬木	百九戸
太山寺	三百十一戸		

人口　人口の惣數は三千三百六十三人内男千六百九十二人女千六百七十一人にして寄留民は七十九人内男五十五人女廿四人なりとす

人情風俗　百事奮態に安んし進取の氣象に乏しく公益の事業擧らす陰暦を襲用し國家の祝祭日には越人の

異を見る如く迷信の念遺傳的に深く言語粗野にして禮法を辨へず併し吉凶相慶弔し隣保相助くる等の美風あり衣服は年を逐ふて華美に赴き住居食物は他に比しては低下にあらずして中等なり年中の最大至樂は秋祭なるものゝ如し

教育　明治八年今の大字和氣濱回明寺の客殿を以て校舍とし鶴間學校を設立せり當時の通學區域は今の大字和氣濱及馬木なりし其後十五年馬木村は分離し全村舊殿倉を以て校舍とし柳原學校を設立し全時に鶴間學校も和氣濱村舊殿倉に移轉せり二十年小學校令改正實施の際和氣濱馬木太山寺の三村を合し和氣濱尋常小學校を設置し校舍は再び回明寺の客殿を假校舍に充てたり然るに合併上双方人民の苦情甚しく合併は名のみにして太山寺の如きは兒童を就學せしめざるものありて紛議を重ね郡長を初め其他當路の人々交々出張して調停に手段を盡されしも其効なし其後漸く一時の彌縫策として翌年六月大山寺に分教室を置けり爾來町村制實施の後も部落感情惡しく到底圓滿の局を結ぶべき見込なきを以て廿五年改正小學校令實施と共に大字太山寺に太山寺尋常小學校を設置し和氣尋常小學校(通學區域馬木和氣濱)と兩立して現今に至れり

衛生　避病舍は大字太山寺にありて傳染病患者を收容す各大字に衛生組合を設け衛生の事務を掌り潔法は定時の外臨時に之を施行せり

警察及裁判所　警察は三津署の管轄にして大字太山寺に巡査駐在所あり裁判所は松山區裁判所の管轄に屬せり

宗教　神佛二教あれども多くは佛教にして古來盛衰なし

神社佛閣　鄉社勝岡八幡宮は大字和氣濱字片岡の山腹にあり祭神は帶仲日子天皇息長帶日賣命品多和氣命多祀理昆賣命市杵島比賣命多岐津比賣命相屬には小千命を合祀す始め太山寺なる中野山に宮居せしに永享の頃回祿し寶物舊記も燒失す後此地に移し小千の御子凱旋の故を以て當國諸社の祭禮に當社

を初めに祭るなり其祭りは舊八月七日なり而して明治三十一年以前の社殿は須賀專務の建立なりせ村社諸山積神社は大字太山寺字浦戸山の麓にあり祭神は大山積命高龗神雷神又別殿に青麻三光社(俗に中風の神と稱す)天御中主神月讀命天照大神なり

村社佐古神社　は大字馬木にあり一に七郎明神といへり大巳貴命少名彦命猿田彦命を祭り相殿には河野通盛仝通遐及隨從六騎士の靈を祭れり

太山寺　は大字太山寺にある巨刹にして天平十一年行基聖武天皇の勅を奉じて此寺を創營し最勝法華及七層塔を設く鳥羽帝の時七堂伽藍を營み龍雲山鑑持院太山寺と號す四國巡拜五十二番の札所なり明治廿一年內務省より保存資金貳百圓下賜三十四年御歷代勅納の觀音七軀を國寶に編入せられ修繕費七百五十余圓を下賜せられ三十七年內務省告示第五十七號を以て其本堂と仁王門とは國寶の建造物に編入せられぬ

古蹟志に敏達帝のとき豐州大野郡の人眞野長者靈驗によりて擬營せりと天平四年六月十一日行基佛像を彫刻して之れを安置し堂宇を宏壯にせり帝勅して祈年宮となす後冷泉帝勅して觀音を安し是れより保元初年に至る七帝皆卽位毎に勅して觀音を安す天明十七年河野通直勅を奉じて此れを修繕し且つ三層樓を營む天平十三年七層の石塔を鎭守社の後に作り其內に經卷を藏す住職英大乘經を山頂に瘞め名けて經の森と云ふ蒲生候鐘樓を營む運慶力士を刻み金剛門に置き弘法書する所の額を揭ぐ又行基手刻の四天王を坂上門に置く傍に辨才天堂あり云々

善福寺　は大字馬木にあり眞言宗にして寺錄に天平年中庵僧某此所に留錫し圓粲像を畫き數日にして去る里民之を崇敬し一宇を建て安置す又弘仁中空海自作の藥師を安置し善福寺と號す其后西國寺の家臣肥後入道良圓伽藍を建て大內郷三貫の地を寄附せり云々とあり

圓明寺　は大字和氣濱にあり四國巡拜五十三番の札所にして眞言宗準林中本寺須賀山正智院圓明寺

和氣村誌

[illegible]寺錄に當山は本尊は阿彌陀如來脇立勢至觀音菩薩にして共に行基菩薩の作に係る天平年間中行基菩薩上表以開して聖武帝の叡聽を繫り堂宇を西山の尾崎勝岡の海濱に創建し海岸山圓明寺と號せり後堂海四國巡回の勅願剃の故を以て第五十三番の靈場を定めらる又後世學佛道の指南車と稱せらるゝ八宗闡要は實に文永戊辰年當山に於て疑山大德の述べられし者なるは問書の欽文に依り明なる當寺堂宇の結構輪奐たる楚楚を連ね五彩燦然として眞に美を盡したるものなりしも後屢々兵燹に罹り衰頽したりしを須賀專齊なるもの其廢亡を嘆き大願願を起し力を尊ら七堂の再興に盡し加ふるに蓮慶の彌陀佛を感得し之を安置し更に辨財天の堂宇を作り當山鎮護の神となし乞時は山號を須賀山と改め聖僧重盛阿闍梨を請じて住職となし之を中興第二世とす衛來世代を累ぬること三十二年所[illegible]三百年に垂々とす而して寺門の益々隆盛を見るは一に當山の靈跡たるに依る云々今同寺の什寶中重なるものは左の如し

不動明王立像（弘法大師の作）

正觀音像（春日作）

涅槃圖像（不詳）

十六羅漢並に文殊　釋迦（明兆筆）

文殊菩薩（狩野永印筆）

地獄の圖（應擧の筆）

堀江村誌

沿革　本村は明治二十三年町村制實施までは堀江福角現櫃大栗の四ヶ村わりしを合併せし者なり往古の起原沿革詳ならず二三の古書に依れば文武帝の詔勅により稚行基南海道を巡視し堀江の濱に舟を船し云々又神功皇后三韓御親征の御歸途堀江谷田別の里に國常立尊天照大神を祭り給ひ云々今福角松

尾にある內外大神社は其古蹟なりとあり故に堀江の名は既に其以前にあるも認知れり而も堀江花見山の城主福角左衛門尉（源頼義伊豫守時代）領地を開拓し後之を福角と稱せりとあり現上は大內郷に屬せり

權現に八阪權現あり神鏡五年の勅請なりと[illegible]城に接せり或は福角を殺き權現起り尙之より古刹雄群山繁盛寺附近に移住せし者大栗と稱へし者なりもといへり郷名は高尾か大內か未だ詳ならず

位置及境域　本村は溫泉郡の稍北方に位し山脈を隔て東は伊臺に北は粟井に南は潮見和氣に界し西は堀江灣に臨めり

廣袤　本村は東西四十七町南北三十八町餘の小部落なり

面積　本村の面積は六百三拾四町四反拾七歩にして其內譯左の如し

田　貳百四拾六町三反六畝八歩　畑　六拾壹町貳反三畝歩

宅地　貳拾壹町貳反三畝拾五歩　山林　貳百八拾八町六反貳畝貳拾九歩

雜種地　拾六町九反四町貳拾五歩

海岸線　本村の海岸は單純なる灣にして屈曲甚少なく海岸線の延長三拾貳町あり

港灣　堀江灣に堀江港あり港內水深く殊に對岸興居島及睦月野忽那等は天然の防波堤を成りて實に良港なり然れとも地方に豪商なきと交通機關の發達せざるとに依り未聚多の寄港船なし

潮汐　滿干潮は滿干の差三間余なり

地勢　本村には著しき山脈なく高縄山の支脈分走して東北二方を圍めり故に河流は西流して海に注げども流域概ね短く平野も狹小にして東より西に等邊三角形をなせり而して此等の大部分は概ね燥地に屬し卑濕地に屬するは或一部のみ

堀江村誌

山　誌　本村には著しき山脈高地なきを以て山坂等に於ても之と同じく著しき者なく僅に一千尺余の丘岳あるのみ而して此等地質の大部は火成岩より成れり

水　誌　村内の耕地を潤せる者三大川あり郷谷川、權現川、大川之れなり

郷谷川　は水源を大栗及大西谷(栗井村)に發し二者水鳴に於て相合し福角北谷を過ぐ堀江の中央部を貫通して海に注ぐ

權現川　は上流二派に分れ一は水源を權現の南部吉藤境に發し一は大栗に發し中流福角に於て相合し權現川となり堀江の北部を過ぎり海に注げり

大川　は石手川の支流なり和氣村大字馬木字遍路橋以下堀江村の流域にして和氣堀江の界を流れ和氣村大字和氣濱に至り海に注ぐ

以上三川の中郷谷川權現川の兩川は長さ一里余大川は遍路橋以下十五六町なり而して此等の上流地は濫伐の結果水源涵養の根を斷ち暴雨至らば水量忽ち増せども平常は少量の水あるのみなれば灌漑の便少なく又產魚なし

氣　候　氣候は概ね温暖にして雨量多し而して特徴の氣候なし

地　質　全地の大部分は火成岩より成れり更に土壌の主成分によりて之を分てば砂土泥灰土埴土等なり

天產物及其分布　天產物として特に記すべきものなし

區劃及政治　本村を政治上堀江福角權現大栗の四區に分つ而して之を統治する村役場は大字福角の中央にありて村政に參與する議員は十二人なり

戸　數　全村の戸數は七百六十八戸にして其内譯左の如し

堀江	三百二十七戸	福角	二百八十九戸	權現	六十二戸
大栗	九十一戸				

人　口　本村の人口は三千七百六十六人にして内男千九百十一人女千八百五十五人原籍民三千七百六十五人寄留民五十三人なりとす

人情風俗　之を文化の度より云へば堀江最も高く福角權現大栗順次低し之を人情より云ふ時は大栗權現福角は誠實にして堀江は一般に人情稍輕薄にして德義に乏しく朴質者を愚鈍視　經濟者を智者視するの傾向あり飲食は稍奢侈の狀あれども衣服は古風を存して質素なりしが近來世俗の風習につれられ漸く華美に傾かんとするの兆あり

教　育　本村は明治四十一年三月までは堀江大栗の二尋常小學校を從き堀江校に農業補習學校を附設し又本村外五ケ村組合を以て鴨川高等小學校を附設せしが其後大栗校を廢し堀江尋常小學校大栗分教場を設き幼年兒童を收容することゝせり學齡兒童就學歩合は近年著しく増加して殆んど百中百に近き狀況を呈せり高等小學校入學者にありても又大に其數を増し尋常科卒業者の大半は入學することゝなれり

衛　生　各大字に衛生組合を設け組長及委員を置けり

警察及裁判所　警察は三津警察署の管轄にして大字堀江に巡査駐在所あり裁判所は松山區裁判所の管轄に屬す

神社佛閣　正八幡神社は大字福角字北社にある村社にして足仲彦天皇祭田別天皇氣長足姫命を祀る沿革由來詳ならず

内外神社　は大字福角字松尾にある無格社にして挑幡千々姫命天照皇大神を祀る沿革由來詳ならず

大字權現字八坂口に村社八坂熊野神社大字大栗字宮の下村社天滿神社大字堀江字夷子町に正八幡大神末社三穂社等あれども祭神由緒等共に詳ならず

光明寺　は大字堀江字西町にあり京都知恩院の末寺にして淨土宗鎮西派に屬す眞福寺は大字堀江字小路にあり本郡太山寺の末寺にして眞言宗新義派に屬す

堀江村誌

淨願寺　は大字堀江字極樂町にあり京都東本願寺の末寺なり

醫座寺　は大字大槊字大上にあり本郡常信寺の末寺にして天臺宗山門派に屬す

東林寺　は大字福角字北辻にあり本郡太山寺の末寺にして眞言宗新義派に屬す

宗教　宗教の主なるものは神道眞言淨土眞宗天臺黑住教天理教等にして其信徒數は神道二千九百八十七人眞言七百六十二人淨土五百九十四人眞宗四百八十九人天臺三百五十人なり而して黑住教は其勢微弱なれども天理教は近來盛にして信徒數人口百分の七八に上れり

交通　**道路**　松山今治間の縣道は本村の西部大字堀江の中央部を過きり里道亦多岐にして交通自在なり

航路　堀江港は藩政時代に於ける三津港に次ぐの要港なりしかば貨物の集散頗繁なりしかど廢藩後は陸上の交通不便なるが爲自然衰微して現今僅かに肥料の輸入穀類の輸出等臨時航海あるのみ

郵便電信　本村大字堀江に三等郵便局あり其配達區域は堀江和氣粟井及び五明の四ケ村にして其集配は市内三回縣道附近二回其他一回なりとす

生業　**農業**　本村農産物の主要なるものは米麥及蔬菜類にして多く藝州地方及松山地方に販賣す而して其産額は左の如し

米	六千七百八十二石	麥	二千八百石
蔬菜類	二千百六十一圓		

林業　林産物の種類は松杉櫸等にして大なるものは材木とし其小なるものは薪として松山地方に販賣す

水産物　水産物の種類は鯵、鰯、鰕、蝦、蟹、アナゴ、鰈、スズキ、雜魚等にして一ケ年の收獲七千五百圓販路は多く松山三津等なりとすれども廣島一方へ輸出することもあり

商業　本村の商業は穀類肥料織物仲買の外は甚振はず只日用品の販賣をなすに過きず

工業　伊豫絣一ケ年の製造高約拾万反竹籐の製造高又約三万本にして共に松山、廣島、神戸、大阪、九州、地方に販賣す

財政　本村經濟の大体を通觀するに貧富の懸隔甚しからず所謂中流のもの多し稅源は農工漁業等を主なる者とす

貯金は逐日隆盛なるが如きも現在額人員七百名にして預入額七千五百圓なり

五明村誌

沿革　本村は元五明郷と稱する一部の小村落たりしを町村制實施に際し五明村と改稱せしものなり

位置及境域　本村は溫泉郡の稻北部に位し元風早郡の東南方に在る小村にして北方一帶は悉く高縄山脈を以て河野村大字関谷大河内及粟井村大字筏に隣りし東は全山脈にて河野村大字九川及湯山村大字湯山の内水口に接し南は山系屹起して湯山村大字藤野々及柳に界し西方も亦山系を以て伊豫村大字上伊豫及堀江村大字大槊粟井村大字西谷及客に接す

廣袤　東西長さ二里十一町にして南北幅員一里十五町あり

面積　總地積八百三町八反八畝二十三歩にして其内譯左の如し

田	八十三町四段八畝歩	畑	九十四町五段十八歩
宅地	八町九段八畝廿二歩	山林	六百十二町八反十二歩
雜種地	四町一段廿一歩		

地勢　本村は前にいへるが如く四方周らすに山岳を以てし殊に柳谷の北方及梅の木の東方等は山嶽重疊

せり而して三四の小川は何れも此山間に發源し南行するに從ひ漸次相併流し遂に湯山村に流出す大字上總梅木の二部落に至りては山岳四周す

土地高低の度は恩地梅木及柳谷の一部大崎と稱する一部落は最高地に位し菅澤城山は稍低く神次郎小屋上總は最低地なり

山岳　大月山は高縄山脈中にありて大字柳谷の東北部及梅木の北部一列の高山なり土質肥沃なれども緑肥及干草採取の爲畑作の習慣として毎年春期之を燒拂ふを以て全部草生地なり此山脈東西に分れ其東方に至るものは梅木上總の背後に走り支脈は中途より南曲して上總梅木を別つ又西に行くものは漸次南に折れて東側を柳谷城山神次郎に至りて輯系す而して大月山柳谷うはが瀧山立山等を除くの外は概ね樹木繁茂せり其他坂峠谷崖等の記すべきものなし

水誌　五明川は源を大字柳谷字立山の溪谷に發し西南流して恩地城山及神次郎を經て遂に湯山村柳に至り石手川の幹流と合す此川の流路延長一里三十二町五十七間幅員最廣部八間内外にして渇水することなし然れども降雨續積の時にて漸く丈余に達するのみ水利の便は本村各川中冠頭にして其灌漑を受くるもの柳谷七反五畝歩恩地七町五反四畝歩神次郎二町四段四畝歩なり

支流柳谷川　は源を柳谷字黒田に發し全字及城山の中央を南流し城山字宮の向にて五明川に携流す此流末までの延長一里十三町三十一間にして幅員最廣部にて僅に五間内外流水の度は五明川に亞ぐものなり灌漑を受くる耕地は總計六町六反一畝歩にして内柳谷五町三反九畝歩城山に屬する分一町二反二畝歩なり

上總川　は大字梅木字戎造り(大月山)に發源し南流して全字及上總を經て湯山村藤野谷に至り石手川上流と合す流路延長一里二町五十八間本川は幅員最廣部僅に三間水勢急流にして平水量深六寸内外なり然れども渇水することなく梅木にて一町八段三畝歩上總にて一町一段七畝歩に灌漑の便を與へ得るなり

支流菅澤川は源を大字菅澤字上山に發し全字の中央を東南に流れて大字神次郎字堂の元にて幹流五明川と合す流末までの長さ二十五町廿七間にして幅員僅に三間なり平水量は一尺强なれども水利の便は五明川に亞げり其受灌耕地計七町二段八畝歩にして内七町八畝歩は大字菅澤に屬し二段歩は神次郎に屬す

支流市道川　は源を大字梅木の西南隅字横尾に發し西南に流れて神次郎字小久保に至り五明川に合す合流までの水路延長十九町十六間にして幅員僅に三間常に流水の絶ゆることなきも水量甚僅少なり此川の灌漑を受くる者二町七反七畝歩にして悉く神次郎に屬する耕地なり

其他恩地に好ケ曾川柳谷に大崎川小屋に小屋川菅澤に西谷川等あれども何れも極めて小なるものにして最も流路の長き好ケ曾川と强も十八町十八間にして最小なるもの西谷川の如きは僅に八町五十六間なり以上の四川は何れも水勢微弱灌漑の耕地も亦僅少にして其合計せしもの漸く七町九段歩なり池沼湧布等の記すべきものなし

氣候　氣候は夏季炎天の際は間々華氏九十度内外に騰ることあり嚴冬嚴寒の時と强も全零度以下に降るが如きは甚稀少殆んど全村中和にして農作に適す降雨は概して多く降雪の期に至り非常なる烈寒の時は大字梅木上總等は積雪尺余に達し人馬の通行を絶つことあり

地質　概していふ時は大字菅澤は大部分埴土質にして肥沃なり農作最豐穣す神次郎小屋上總及梅木は山林耕地共大抵砂土質にして耕耘容易なり城山柳谷恩地等は粘砂の混せるもの多し

天産物及其分布　動物は記すべきものなし植物は主に喬木種にして就中松杉檜及其他燃料を以て其最とす鑛物は著しく掲記すべきものなし

區劃及政治　本村は八大字に區劃し村役場は大字菅澤にあり村會議員の數は八名にして未だ村是の調査な

し今各大字に屬する地積を擧ぐれは左の如し

菅澤	二百五十八町六反貳畝九歩	神次郎	百六町五反壹畝貳歩
城山	六十一町九反貳畝十九歩	柳谷	百六十九町三反四畝廿六歩
恩地	四十町三畝十七歩	小屋	十二町八反二畝十五歩
梅木	九十六町三反六畝九歩	上總	五十八町九畝十三歩

戸數　惣戸數は二百六十一戸にして各大字別左の如し

菅澤	九十五戸	神次郎	四十一戸	城山	二十一戸
恩地	十六戸	小屋	三戸	上總	十四戸
柳谷	四十六戸	梅木	二十一戸		

人口　人口の惣數は一千四百四十二人にして內原籍民一千四百二十人男七百三十五人女六百八十五人寄留民廿二人男十女十二人なりとす

人情風俗　氣質は朴直にして言語通常なれとも往々野鄙なる言語を用ふ場久の習慣あり禮法は普通にして衣食住共に質素なり

教育　學校としては五明尋常小學校一校あり其沿革の大要を述ぶれば從前は菅澤に五明學校城山に城山學校上總に風巽學校の三校ありしが教育令の改正に依り五明、城山の二校を合して城山簡易小學校を設き風巽學校を上總簡易小學校とし其後又學令の改正に依り城山校を五明尋常小學校(四年程)上總校を梅木尋常小學校(三年程)とせしが其後二校を合併し現在の五明尋常小學校を設置せり而して大字菅澤神次郎城山柳谷小屋梅木七部落の學齡兒童は五明尋常小學校に通學し大字上總は地理上遙山村井河尋常小學校に委托して教育しつゝあり

衛生　避病舍は各大字毎に一個を設け衛生組合は大字毎に組合を設け清潔法は毎年一回定期清潔法を施行し尙必要と認めし場合は臨時清潔法及衛生講話會等を行ひ清潔法

施行の際は警察官及役場吏員は衛生組合を督勵して之が實行を期す

警察及裁判所　大字菅澤に松山警察署道後分署五明村巡査駐在所あり裁判所は松山區裁判所に屬す

宗教　其重なるものは佛法にては天臺宗日蓮宗神道にては黑住教にして神佛共に盛衰の狀況落ち變動なし

神社佛閣　鄉社は粟井村に在る八幡宮村社は河內八社美津氣神社甲社河內社嚴島社大山祇神社等にして河內八社の祭神は國象女命金山彥命埴山姬命伊弉命伊弉命天吉葛命小黃命淺秋津姬命にして其由來は河內社は創立年月不詳河內八社大明神と稱せしを明治三年藩命に依り改稱し明治九年村社に加列す祭日は陰曆八月廿七八兩日なり

美津氣神社の祭神は月讀命市杵島姬命思姬命瀧津姬命にして創立年月不詳美津氣大明神と稱せしを明治三年藩命に依り改稱明治九年村社に加列す祭日は陰曆八月廿七八兩日なり

各種團体　教育の普及實業奬勵青年風俗の矯正等を目的とし五明村青年會なるものを組織し會員凡百名あり會合の狀況は毎年四月總集會を開き會務上に付討議決定及報告をなす

交通　(イ)道路　本村より官衙及村役場への方位里程左の如し

縣廳へ	西南　三里四町	溫泉郡役所へ	西南　三里六町
粟井村役場へ	西　一里十町	河野村役場へ	西北　一里三十町
伊臺村役場へ	西南　三十町	湯山村役場へ	南　二里

(ロ)郵便電信　堀江郵便局の區內にして集配は毎日一度九時より午後二時までの間に於て之れをなす

生業　(イ)農業　農產物は穀物にては米、麥、野菜にては大根、胡蘿蔔、牛蒡、芋等にして其產額は米一千六十一石麥二百八十石大根二万一千二百貫胡蘿蔔一万五百貫牛蒡七千六百貫芋一万六千三百貫

等にして右の内大根(夏作の分)胡蘿蔔牛蒡等は本村の特產物と稱して不可なき見込なり販路は大抵松山市三津濱等とす

(ロ) 林　業　樹木は松、杉、檜、榧、樫其他燃料にして松杉檜は建築用材とし其他の樹木は燃料として共に松山市へ運搬販賣す

財　政　本村の各種納稅高は左の如し

直接國稅	一千六百七十二圓	縣　稅	六百六十九圓
村　稅	一千三百三十三圓	所得納稅者	五　人

各種有權者の數左の如し

衆議院議員撰擧權	三十八人	縣會議員仝上	百十三人
郡會議員仝上	縣會議員に仝し	村會議員仝上	百八十六人

貯金の惣額は五百九十四圓四十一錢三厘なり

粟井村誌

沿　革　和銅六年諸國の鄕名を定めらるゝに當り往古より粟井の泉と稱する湧泉ありて湧き出づる泉泡恰も粟粒に似たるに因みて粟井鄕(現在の粟井五明の二村)と稱ぜらる而して其前後に於て各村即現在の大字たる小川、磯河内、鴨の池、河原、和田、安岡、久保、鹿之峰、苞木、常竹、本谷、西谷、大西谷、客、麓、平林、小川谷の十七部落を成立したるも其名稱の起因多くは探るに道なく只鴨の池麓苞木の三部落は河野家に屬する鴨池某麓某須保木某(後苞木に改ひ)の居住地なりし故を以て村名としたるなり

町村制實施に際し鄕名を村名とし十七村を大字として村役場を大字久保に置き現時に至るなり

位置及境域　本村は溫泉郡の北部に位し東は五明村に南は堀江村に北は河野村に接し西の方は瀨戸内海に面す而して村全体の形狀は東西に長く南北に短くして殆と長方形をなす

廣　袤　東西一里十八町南北一里

面　積　本村の總地積は七百四十三町九反二畝三歩にして之を内譯すれは左の如し

田	二百四十八町四反六畝十八歩	畑	四十九町九反七畝二歩
宅　地	二十三町三反六畝廿四歩	山　林	三百十八町八反七畝十九歩
雜種地	七反六畝廿四歩	其　他	百二町四反六畝六歩

海岸線　陸海相接する殆んど一直線にして長廿五町に至る

港　灣　本村には港灣なく外來の船は大概河野村大字柳原の港に碇泊して陸路此所の便を達す

潮　汐　滿干の差は大概一丈を昇降すと雖も毎年八月(陰曆六月十六日)の頃滿潮の際海水三四尺も高きり

縣道以西の田地は浸潮して時に作物を枯死せしむることあり

地　勢　本村は東部に高縄山脈を負ひ其山嘴西に延びて麓に諸谷の水を流す土地東部は高く漸く西に低し其高きは海拔實に二百尺に至る

山　誌　宅並山は大字小川にあり高さ七百八十尺山脈東は本村鍛治が佐古山に連り北は粟井坂に至りて盡く松樹繁茂せり

横山　は大字麓にあり高千六十八尺にして本村第一の高山なり山脈東は河野村大目山に北は小屋の谷山に連續し全山老松及雜木繁茂す

小屋の谷山は大字麓にあり高七百八十尺山脈東は河野村大月山に南は横山に連る全山雜木繁茂せり

祇園山は大字小川谷にあり高九百尺山脈東は河野村大目山に連る全山松樹繁茂す

粟井村誌

水誌　拂川は大字小川に在り長十九町二十七間幅一間三尺灌漑の田地三町六反歩あり源を同字濟僧谷より發し西流して海に入る

粟井川は　大字麓、小屋、谷山に發し大字客に至り客川を合し大字本谷に至り小川谷川と西谷川を合し村の中央を西流して海に入る長一里十八町幅下流に至り十間に至る其灌漑を受くる田地百町に餘れり

西谷川　は大字西谷にあり長二十町幅四間にして源を五明村大字菅澤に發し粟井川に入る灌漑を受くる田地六町余あり

長井方川　は大字客にあり長十七町二十間幅一間三尺にして同字福幸山より發し北流して字前田に至り客川と合す灌漑を受くる田地四町歩に及ぶ

小川谷川　は長十八町二十間幅二間にして源を荻峠山に發し南流して本谷に至り粟井川に入る灌漑を受くる田地二町七反歩あり

池は其數多ければ也も其中大なる者を擧くれば左の如し

柳谷池　前田池　門田口池　早稻地池　新池　伊座上池　砂田池　木原谷池

氣候　氣候は概して溫暖にして嚴寒の候と雖も積雪稀なり溫度は夏季に於て三十二度冬季に於て四度を示せり常風は春季東北風夏季西北風秋冬季は西風なりとす

地質　火成岩に屬し其土質の主なるものは壤土及砂土とす

區劃及政治　全村を十七大字に區劃し大字久保に村役場を置く村會議員の數は拾貳名なり

戸數　全村の戸數は五百三十三戸にて其内譯左の如し

小川	七十一戸	磯河内	四十三戸	鵜の池	六戸
河原	十八戸	和田	三十戸	安岡	十戸
久保	四十二戸	鹿の峰	四十二戸	苞木	四十一戸
常竹	二十六戸	本谷	三十四戸	西谷	四十一戸
大西谷	十九戸	客	五十二戸	籠	二十九戸
平林	七戸	小川谷	二十二戸		

人情風俗　本村は純然たる農村なるを以て一般淳朴にして從順なり隨て進取の氣象に乏しきは免るべからざる所なり而して風俗習慣の主なるものを擧くれば

年中の行事は凡て陰暦に依れる事

陰暦七月所謂中元には盆踊と稱し青年男女相集り大道又は寺院等にて大鼓を敲き歌を謠ひて踊り廻る事

氏神祭に神輿を轉倒し或は高所より轉落し以て快ひとなし居る事

婚禮に無用の費をなす事

神社佛寺に對する信仰心厚き事

衣食住共に質素にして特に記すべきものなし

教育　義務教育としては明治廿年六月一日設立の粟井尋常小學校ありて全村の兒童を收容し尋常科卒業後中流以上の子弟は本村外七ヶ町村組合立風早高等小學校に通學せり

衛生　本村の避病舍は明治三十三年の設置に係り患者十四名を收容するに足る衛生組合は本村を三區に別ち各區に組合長と委員を設け時々集合して衛生上の講究をなし且毎年一回各區内人民を召集して衛生談話會を開催する事とせり

警察及裁判所　本村は三津警察署の所轄にして巡査駐在所あり裁判所は松山區裁判所の直轄なり

宗教　宗教は全村佛教なり而して之を細別せば禪宗黄檗千七百十六人眞言宗千百四十人日蓮宗二百人の信徒あり

粟井村誌

神社佛閣　宇佐八幡神社・は大字磯河内に在り豊前國宇佐八幡宮を勸請したるものにして往古より粟井五明二村の氏神なり明治四年四月郷社に列す

正八幡神社　は大字小川にあり櫻田別命足仲彦尊氣長足媛尊の三神を祀る嚴島神社は大字鴨之池にあり市杵島姫命思姫命湍津姫命を祀る

加茂神社　は大字和田にあり大巳貴命高彦根命を祀る

遠正田神社　は大字河原にあり倉稻魂命を祀る

古和氣神社　は大字安岡に在り大巳貴命を祀る

市宮神社　は大字久保にあり天御中主尊を祀る

河内神社　は大字鹿の峰にあり伊弉諾尊岡象女尊速秋津姫尊を祀る

天滿宮　は大字苞木にあり菅原道眞公を祀る

日吉神社　は大字常竹にあり大山祇命を祀る

明見神社　は大字西谷にあり國常立尊猿田彦命を祀る

日巻止神社　は大字大西谷にあり天目一箇の命大巳貴命少彦名命を祀る祭日には本村は勿論遠近の賽客殊に多し

天神社　は大字客にあり菅原道眞公を祀る

河内神社　は大字滝にあり伊弉諾尊岡象女命速秋津姫命を祀る

新田神社　は大字小川谷にあり新田義治の靈を祀る

三嶋神社　は大字本谷にあり太山祇神を勸請したるものにして古は五明粟井二村の氏神なりしと云ふ

附記　正八幡神社以下十五社は明治九年村社に列せらる而して各神社の創營年月日沿革由來詳なら

ざれ且寶物として記すべきものなし

眞福寺は大字和田にあり眞言宗醍醐派光德院(本郡正岡村)の末寺なり元寛同寺は建治二年日照上人の創營にして天文弘治なりしが寛文十一年に至り僧乘辨眞言に改宗したりと云ふ記すべき寶物なし

遍光寺は大字本谷にあり慈又光德院の末寺なり寶物として大般若經六百卷を藏す

雲門寺　は大字本谷にあり山城國宇治郡黃檗山萬福寺の末寺なり寶物としては大般若經六百卷(寫本)通忠の木像通武の位牌(開祖檀那前雍州大守日峰惠公大禪定門とあり)釋迦文珠普賢の木像(宜慶の作なりと)釋迦の畫像等なり

龍善寺は大字鹿嶋にあり東都二條川東日蓮宗眞妙寺の末派にして日峰上人の創營に係ると傳ふ寶物なし

各種團体　明治三十八年末に於て青年會を設立し目下會員八十名あり專ら精神修養の目的を以て組織されたる者なり

交通　道路　今治街道(縣道)は村の海岸を南北に貫きて長二十二町幅二間一尺平坦にして容易に車馬を通ずべく現今松山北條間には馬車の往復日に數十回以て旅客の便を圖り牛車荷車は以て商品の運搬に便利を與へ今を距る廿六年前までは所謂粟井坂の難ありしが明治十三年新道開鑿成りて交通の容易なる昔日の比にあらざるなり五明街道は(里道)大字久保西海岸縣道筋より東に向つて大字常竹本谷客を經て五明村に至る長一里十町幅一間人馬を通ずるも車馬の往復便ならず

本村より當術廢近接村役場への方位及距離左の如し

縣廳へ　　南　三里十八町　溫泉郡役所へ　南　三里十六町

堀江村役場へ　南　一里十五町　五明村役場へ　東南　一里十八町

河野村役場へ　北　二十町

粟井村誌

橋架　縣道筋拂川に架せる橋は長幅共に二間全前田川に架せるものも長幅共に二間にして何れも石材粟井川に架せるは土橋にして長八間幅一間五尺なり而して共に橋名なし

航路　本村には船舶の碇泊すべき所なし

郵便電信　堀江郵便局の區内にして集配一日一回なり

生業　農業　本村は全村の十分の八強は農業者なり而して明治三十七年末の產物調査を擧くれば左の如し

米　五千百三十四石　麥　二千百三十四石

林業　本村の林業は氣候の溫和と地質の適度とにより樹木の成長速なり種類は松櫟雜木及竹とす而して松の大なるものは建築用材に小なるものは薪として本村瓦業者の需要に充つ

工業　本村の瓦製造業は近來著しく發達し營業者年々增加し現今四十戶に及ぶ明治三十七年末の調査に依れば該業は當年極めて不景氣なりしも尙價額八千二百六十二圓に及び三十八年に至りては景氣順に挽回し殆んと四萬圓に及べり

名勝舊蹟　須保木の城趾は大字苞木にあり河野左衛門尉通久の四男須保木五郎通成の居城なりしと云ふ

横山の城趾　は大字施の横山にあり建武年間河野通武の居城なり其后南美作守通師之に據れりと傳ふ

宅並の城跡　は大字小川宅並山の頂上にあり粟上右衛門尉之を築て居れり

宅並古墳　は大字磯河内字日向にあり五輪塔大小五あり三尺より二尺五寸に至る傳へ曰ふ宅並山の城主三神信濃守及其親族の墓なりと

粟井泉　は大字小川縣道筋より西十數間の海邊にあり湧泉にして水清く湧出する樣恰も粟粒の如きにより此稱ありと傳ふ往古より旱歲にも涸るゝことなく故を以て其名高し

粟井坂　は大字小川にあり松山より今治に至る街道筋にして東に山を負ひ西は海に面し眺望最佳なり坂上は宅並山の西端にして藹和氣風早の境界たり然るに今は坂下の海岸に新道を開鑿したるを以て此坂路は名のみを殘すに至れり

粟井坂新道碑　は大字小川粟井坂開鑿地の側にあり碑は高八尺四寸幅五尺厚九寸の自然石を以てせられ粟井坂新道碑と題し左の碑文を刻せり

余壯歲赴江戶至興津嘗將踰謀縣嶺々薇沿海官道新開車馬弗馳行旅凋步無復陟降之勞余甚偉其功嗚呼我豫粟井坂之事頗類此矣坂爲松山今治來往之孔道風早和氣二郡分界于此東依山西臨海峻絕不通車人苦陟降馬艱運輸其害甚大是所以有新道開鑿之舉也新道長一千七百五十八尺幅十二尺蠶治坂麓且疊石于海邊以防波濤西北之隅壁破峭壁通之高四十五尺如往列屏中又搏木爲護子狀充石於中當出於海數十武設之五處以殺潮勢云初風早人大森盛馨世小川邑里正頗有才思後任郡副長夙有開鑿之志嘗謀之屬長吉田格堂等而不果於是始設貯金之策畧年金漸殖郡長長屋忠明贊其議遂請縣令岩村高俊令嘉納出縣稅金八百九十余圓以助盛馨之志於是遂就矣擧工於明治十三年四月六日告竣於其七月廿七日焉爲日總一百十三役夫四千七百五十四石工二百八十五匠四十糜資二千七十余圓道既開平坦如砥縈環如虹昔時不通車今則並馳轟々昔時人苦陟降今則濶步悠々然昔時馬艱運輸今則鈴聲鏘々然人無不稱快其功亦偉哉盛馨長子盛直將建碑紀功來乞文余々因思隳壓之景推海道第一粟井或雖不及亦有大類焉者此興居嶋之小宮士峰壓海面猶彼富岳之玲瓏聳半天也此風早之島嶼蜿蜒數里猶三保之松林映帶波濤也其風帆浪泊出沒於雲烟吉鶴之間而漁唱聲與柔櫓聲相和者彼是皆有爲其景之同且美盖如斯詩客歌人且行且賞已無其勞而更有其快焉偉功之及韻事實不渺是亦不可不知也盛直勒而存之宜矣乃不辭記而與之

明治廿一年十二月　松山近藤元脩撰　弟元弘書

久枝村誌

愛媛縣知事從五位藤六等　白根　專一　題額

大石墻は大字小川粟井阪にあり碑の高六尺幅二尺厚八寸碑の上部に南無阿彌陀佛の六字を刻し其下部に縱字數十を刻したる如く見受れ共今は不明瞭にして讀み難ばなし此墓標を建立したるものなり

戰死の地として此墓標を建立したるものなり

粟井阪新道開鑿に偉功を奏したる大森慶鑄の履歴を掲くること左の如し

人物　氏は大森樹政（通稱兵藏）の三男にして文政二年二月十四日本村大字小川に生る五歲より當郡淺海原の八大内佐一郎に就きて兵學を修め年十五に及び松山に出で藤臣宮内某に就き暮ら漢學を修む五歲の時小川村の庄屋役となり藩侯或は藩廳の新設並修繕或は河川道路の修繕に或は民間米金の奬勵に力を盡し其事業に著す明治五年廢藩置縣の際舉げられて郡の副區長となり地券取調役となり戶長役なる當時教育の必要を感じ鄕學校並小學校の設立に盡力至らざるなし明治九年地租改正に際し土地の丈量地位等級を定むるに當り郡の惣代となり官民の間に立ちて調和の勞を採り奉功絕からざりしと云ふ就中粟井阪新道開鑿の如きは碑文に依り其苦心の狀を察するに足る而して功勞賞を受くること天保七年親兄弟長病にて死亡し若年の身を以て難澁勞からざるの故を以て供受賜米發八俵三斗三升引捻俸を付げらるゝに始まり明治元年九月十三日郡用林才許出橋に付米壹俵下賜せられ仝廿三年三月一日本村和田學當小學校建築に際し卒先盡力せしに付物に賞せらるゝに至るまで數十回明治三十六年一月七日を以て沒す年八十六

河野村誌

沿革　本村は別原宮內兼應寺横谷鴻谷九丈保免佐古高山生谷大河內中須賀辰山夏目の十四大字より構る

河野村の名は町村制實施に際し命名したるものなり其以前は河野鄕といへり蓋河野氏累代當地に居住せしを以てなり

河野鄕の名は文武帝の頃の如し元明帝の頃風早地方は粟井河野高田難波那賀の五鄕なりしが后粟井河野難波正岡の四鄕となる

河野名の起源　孝謹帝七十三年第三皇子彥狹島王を以て河野氏の祖先とし后八代を經て居を本村高名和山に移す加冠して高縄と名のる此より高縄山といふ高野玉輿より後通信通有通治等代々當地に居住せし爲高縄山の麓をは河野鄕といふ

位置及境域　本村は温泉郡の北部に位し東は高縄山を以て立岩村及其支脈を以て潟山村に隣し北は正岡村及び北條町に接し南方は五明、粟井の二村に接し西は瀨戸內海に臨み遙に野忽那の諸島と相對し地形は東西に狹長なり

廣袤　東西凡四里南北最狹き所二十町最廣き所二里半餘あり

面積　本村の惣面積は千六百二十一町六反三畝廿六歩にして其內譯左の如し

田	二百九十一町八反九畝五歩	畑	六十町八反八畝十七歩
宅地	廿八町二反二畝四歩	山林	千百四十二町二反五畝六歩
雜種地	二反十一歩	其他	九十八町壹反八畝十三歩

海岸線　海岸は屈曲少なく僅かに弓狀をなし中央に柳原の埠頭あるのみにして其延長約二十町に過ぎず

港灣　柳原港と稱する一小港あり波止場內には和船數艘と十數艘の漁船を入るゝ事を得然れども西風强く吹き荒む時は碇泊に堪へず風波を北條港に避くるを常とす本港帆船の積荷は厩肥薪炭等にして多くは中國九州の諸港及對州に向ふ深度は滿潮に於て一丈二三尺を出てず干潮の際は殆んど海底を

河野村誌

顯はす其差本郡他港と大差なし

潮汐 記すべきことなし只滿干に於ける內海潮汐の自然的流れを起すに過ぎず即ち干潮時には西に滿潮時には東に向つて流る

地勢 高縄山脈 は本村の東方立岩村と接する所に龍蛇の如く蟠り尙其頭を西に延ばして波妻の鼻となり海に入りて野忽那睦月等の諸島となる從て本村東部一帶は山嶽重疊し最高部亦此所にありて河流の分水嶺となれり平地は僅に海岸に近き所及河岸の部分に存するのみ其比七と四なり河流には巨流なく只西方に流るゝ河野川と中須賀川との二流の奪灘に注けると高縄山後の水を集めて湯山村に入りて石手川の上流をなせる二小流あるのみなり

山誌 高縄山 は本村の東北部に屹立し地方の最高峯にして湯山村の福見山と相對峙す山頂を天神が森と稱す高三千五百九十七尺九州島より東せる阿蘇火山脈中の一消火山にして純然たる火山の形をなせり山頂一帶は官有林にして老樹鬱々たり

小天神 は高縄山頂天神が森の西にあり天神が森につゞく〻の高峰にて形天神森に類似するを以て名つく北方は立岩村猪の木に屬せり

大月山 は粟井の境にあり高縄山と相並びて屹立せる高峯たり全山樹木少く一面草生なり

高穴山 は大字横谷にあり頂上に湧泉あり旱魃にも尙涸渴せすといふ

雄甲山 は高縄山の支峰にして山頂に甲石とて大なる甲狀をなせる石あり故に甲山ともいふ

雌甲山 は雄甲山の東に聳ゆる峰たり頂に柱狀をなせる石柱あり俗に柱石と稱す此の兩山は其名の如く其形狀最も類似せり

土居越峠 は本村より正岡村に通するの峠なり

麹ヶ峠 は大字牛谷より五明村大字柳谷に通するの峠なり

石が峠 は高縄山の南大月山の北にありて大字九川へ通するの峠なり

水誌 河野川善應寺川の二流あるのみにして河野川は流程一里に滿たされとも河口は殆と十間あり南村境を流る善應寺川は北村境を流れてこれ又流程一里にみたす河口前者に異りて殆と三拾間あり

區劃及政治 本村は町村制施行の際別府宮內善應寺横谷潤谷九川保免佐古高山牛谷大河內中須賀片山夏目の十四ヶ村合併して自治体の一村となしたるものにして元村名を大字名とす而して村役場は大字別府にあり今各大字の地積を舉くれは左の如し

別府	百四十町九反三畝五歩	宮內	六十町九反七畝廿二歩		
善應寺	百三十三町八反五畝壹歩	横谷	百二十八町三反一畝九歩		
潤谷	六十町三反四畝廿六歩	九川	六百五十二町四反四畝廿二歩		
常保免	九町一畝十七歩	佐古	五十五町九反二畝四歩		
高山	七十七町五反十四歩	牛谷	六十八町九畝廿八歩		
大河內	百四十町七反三畝壹歩	中須賀	廿六町二反五畝廿三歩		
片山	廿一町九反七畝三歩	夏目	四十五町二反七畝一歩		

戸數 全村の戸數は七百貳拾壹戸にして其內譯左の如し

別府	三百二十戸	宮內	廿六戸	善應寺	七十戸
横谷	三十七戸	潤谷	十戸	九川	廿九戸
常保免	十一戸	佐古	三十九戸	高山	三十五戸
牛谷	十五戸	大河內	十二戸	中須賀	四十六戸
片山	廿三戸	夏目	四十八戸		

人口 本村人口の總數は四千三百三十人にして內原籍民は男二千六十一人女二千四十四人なり

河野村誌

又寄留民は男百十六人女百九人なり

人情風俗　古來風早地方は親切淳良の聞ねありしが現時に於ても尙其美風を存す然れども本村は地勢上山間田舍准町漁村の四つに分たれたれば風俗習慣も一樣ならず山間部落の人民は質朴にして溫順勤儉祖先を尊敬し敬神の美風あれども稍社會の風潮に後れ舊弊を墨守し迷信の弊を來し進取の氣象に乏し田舍部落は純粹の農民にして質朴勤儉傲慢の精神少なく共同一致の精神に富み納稅の義務を怠らず然りと雖も地主は小作人との關係充分に融和せず部落の札幾は引て水利に關係を及ぼす等の弊を免れず准町部落は町家にして多くは商業を營むものなれば稍狡猾に傾き奢侈に流れ長を輕んじ利に走りて博愛の精神に乏し然れども社會の進歩に伴ひ進取の氣象を有し學力知識も亦相當に供ふる者多し漁村部落に至りては稍粗暴に流れ言語野卑にして無學の輩多く衛生思想亦乏しされども忍耐にして大膽事に當りて憶せざるは特長なりとす尙本村を統括すれば青年團結して智識學術を研くことと在鄕軍人が後進者を誘導せんとする傾向あること農事の改良進歩を謀ること造林事業に熱心なることと一部の婦人が自已の活動を促されつゝあること村民一般向學心を高めたる事等は最も喜ふへき現象なりされど時間を確守せず飲食の爲めの會合多きと青年の夜遊青年男女の數組相携へて四國巡拜を爲す習慣等は遺憾とする所なり

教育　村立尋常小學校及附設農業補習學校は大字別府にあり

學校の沿革左の如し

明治初年
鄕學校（柳原）――全五年高縄學校（柳原）――高縄學校
全　甲山學校（善應寺）
全　河野學校（横谷）
別府尋常小學校（柳原）
甲山學校

善應寺簡易小學校
九川簡易小學校（廢止）
河野尋常小學校（第一分教場（善應寺）
第二分教場（九川）湯山村に委托す）
河野尋常小學校（河野尋常小學校――附九川分教場
河野村立農業補習學校）

明治廿年四月別府尋常小學校を柳原に創立し全月二個の簡易小學校を創設す全廿三年五月河野尋常小學校と改稱し全時に簡易小學校を分教場とす

全廿五年校舍を大字別府字上別府に新築す

全三十六年九月農業補習學校を附設す以て今日に至る

衛生　避病舍は明治三十一年の建築にして大字片山に在り眺望絕佳空氣清淨採光適度にして諸般の設備稍整へり而して衛生組合の設けあり毎年清潔法を施行す

警察及裁判所　本村は三津警察署の管轄にして字柳原に巡査駐在所あり裁判所は松山區裁判所の所管にして登記事件は全裁判所北條出張所の取扱ひに屬す

宗教　宗教は黑住教天理教及佛教にして其信者數は全村の二分の一は臨濟派の禪宗にして眞言宗之に次き眞宗又之に次き他は至て微々たり而して神職僧侶は共に非祭を務むるのみにて只黑住教のみ毎月二回說教を爲しつゝあり

神社佛閣　縣社高縄神社は大字宮內にあり推古帝の勅願所にして式外の舊社なり祭神は大山積命高靈神鳴雷神にして保延二年春河野新太夫親清占闕して今の地に遷座す宮殿廻廊等巍々堂々たり慶長五年九月兵火に罹り灰燼となる後之を再建す號號は三島大明神又高縄三大明神と稱へたりしが明治三年高縄神社を舊復す全四年鄕社に列し廿八年縣社に昇格す境內末社十六皇子社の神体は元明帝和銅六年

河野村誌

以前の者なりと古社寺取調委員の鑑定なり本社保存の古器物及文書等左の如し

神鏡　二面　面　二個　鹿々毛　一頭　河野通生　仝通宣　仝通康

武任備前守宣秋　伊豫守散位藤原朝臣等の文書各一通及縮三文字御文等なり

明治二十七年以來賽金を蓄積し現金殆んと三千圓あり

熊野神社　は大字夏目字福生寺にあり古蹟集に云紀州熊野より勧請せし由今に河野家よりの社領寄進狀等あり

天滿神社　は大字横谷にあり菅原道眞公外十六神を祀る往古より神龍を以て奉祀る古社なり神龍三年八月神殿再建の棟今に遺れり

素戔嗚社　も仝字にあり素戔嗚命大市比賣命稻田比賣命を祭れる古社なり

善應寺　は大字善應寺にあり本尊は釋迦牟尼佛にして臨濟派禪宗京都東福寺の末寺なり建武二年河野對馬守通守(後通直)七堂伽藍を創營し東福寺に擬す通守の墓境内にあり本寺は建武の頃河野九郎右衛門通治浪々の身となり依て將軍尊氏に申て本領を安堵し高縄山の麓に一宇を經營し好成山善應寺と名け北條長福寺顯正和尚を招請して開山とす

永福寺　は大字佐古にあり延命地藏尊を祭る本山は高野山金剛峯寺にして眞言宗古義派なり

圓城坊　は大字九川にあり本尊は不動尊にして仝じく古義派なり

信行寺　は大字別府にあり眞宗にして本尊は阿彌陀如來なり

各種團体　商平社　明治初年柳原の商人を以て組織す商業を隆盛ならしむるを以て目的とす明治廿三年柳原港波止場の修繕を爲す其後同港内土砂堆積し寄港の船舶減少せるにより貯金及有志の寄附金を募集し港内を浚渫す爾來船舶の寄港するもの其數を加ふるに至る

青年有爲會　明治三十四年二月有志等發企して夜學會を開催し學校職員を講師として普通學を修む

青年有志會　明治三十五年一月各大字の青年有志者發企し河野村青年會を組織し青年の知識を磨き美風を養成するを以て目的とす會員五十名あり益增加せり毎月一回開會す其事業として夜學會の開催及慈善的の事業を爲し盛大に向ひつゝあり

和敬會　明治三十六年の創立にして敬愛和合し村是を謀るにあり其事業として農事の改良水利葛藤の仲裁等社會の救濟事業の斡旋の勢を採れり會費は會員の寄附金に依れり

和敬婦人會　明治三十七年一月婦人有志の發企にて開催す敬愛和合貞操を守り質素を主とし家事交際の智識を養ひ婦德を喚起せしむるにあり會員四十名毎月十五日會合の規約となる事業に至りては前二者と大同小異なり

農業補習學校同窓會　本村農業補習學校卒業生を以て組織す明治三十七年九月開催爾來互に試作田を起し毎年二回會合し其結果に就て互に農事の改良を謀る

交通

道路　本村の西北端海岸に沿ふて松山より今治に通せる縣道あり俗に今治街道といふ近來馬車の設けありて北條松山間を往復す里道は本村の西南端なる夏目部落より正岡村を經て立岩村に達せる者と字柳原より善應寺に至り更に分岐して一は牛谷を經て五明村に達し一は横谷及九川部落を經て湯山村に達し一は正岡村大字院内部落に入り今治街道の一線たる龍の岡越に達する者とあり然れども何れも道路狹隘にして完備なりと云ふへからす故に改修の議を唱ふる者ありといふ

本村より官衙及隣接町村への方位及里程左の如し

縣廳及溫泉郡役所へ　南　四里　北條町へ　北　一里弱

翠井村へ　南　十八町　正岡村へ　北東　一里十町

橋梁　本村には只僅に河野川市川の二流あるのみ故に特に記すべき橋梁としてあらざれども縣道筋に於て市川の河口に中須賀橋と稱して幅二間長五間の土橋と河野川の河口に幅二間長五間の西の

下橋と稱せる土橋あり里道筋に於ては記すべきものなし

郵便電信　北條郵便局の集配區域に屬し柳原驛には毎日二回其他は二回の集配を爲せり電信も亦全局の取扱ひに屬す村内柳原濱に設置せる海底電線接續所あり是は松山郵便局より廣島郵便局に通せる海底電線陸揚所にして明治三十二年中の設置に係れり

生業　農業　土地概肥沃にして河流灌漑に便なれば山間僻陬の地と雖も二毛作に適せざるなしされば村民は大氏之に從事す而して農產物の種類及產額を擧くれば左の如し

米　八千二百八十四石　麥　五千七百二十石　大根　十三万貫

販路は多く松山廣島なり而して大根は字西の下の特產にして其風味遠く他地方の及ぶ所にあらず故に古より西の下大根の名遠近に傳はる

林業　松杉檜檜榧樅等主なるものにして材木及薪炭となし他地方に販賣せらる近年造林盛になり數十万の苗木を仕立てたり木炭は大字九川の特產にして其產額二千四百余圓なり又関谷横谷牛谷大河内等よりは淡竹眞竹大名竹等を出し多く廣島地方に輸出す

養蠶　特に記すべきことなし

牧畜　農家使役用に牛又は馬を飼養せると本村には到る處草生地あるを以て山間の部落には他地方の牛を買飼するに過ぎず

水產　本村の沿海は最も魚類の繁生に富み鯛鯖鰯鮪其他雜魚の魚獲多く收額七千余圓あり廣島及三津地方に販賣す近來村民は團結して養魚法を研究し田地池等に放養し廣島松山地方に販賣す

商業　柳原は縣道に沿ひ一邑をなし各種の商店軒を並べ舊風早郡内にては北條に次きて賑へり

工業　近年に至り漸々發達の徴を現はし某酒造家の如き蒸氣器械を使用するありて本村器械工業の嚆矢をなす大工左官の業も大に發達し廣島地方へ出稼するもの少なからず其技量も大に觀るべき

ものあり機織業は婦女子の常業として產額二万二三千圓あり近來冤の製造益大きを加へ產額五千圓以上に及ぶ多く廣島地方に輸出す

財政　富源は農業にして財政困難を感ぜず冤業漁業ありて又た一富源をなせり概說せば富裕なる村なるべし

名勝舊蹟　天神ケ森　高縄山頂をいふ河野家々譜に曰く崇通精靈於一社奉稱高縄權現四郎通信自彫刻父弟像置于高縄山頂後代指此山頂官天神ケ森是彼像以菅神故傳廬名歟と今や此神像山火の爲に燒失す

甲森（又神森）　大字関谷字敷地とて高縄寺參詣道の右手にあり傳へいふ癸和元年正月備後の額入道なる者高縄城を攻む城陷り城主河野道治戰死す後其子通信西寂を踪ねて備後鞆津に至り歎き擒にして歸り此地にて誅殺し其死骸を埋めりと後里人一宇の堂を建立して石佛を安置す

高穴城趾　大字横谷高穴山の頂にあり東西三十五間南北十間にして此中に湧水あり旱魃にも尙個渴せずと河野八郎通忠之に居れりと

雛甲城趾　大字高山雛甲山にあり河野對馬守通治の居城なりしが後湯月城を築きて之に移る山上北面して役小角の石像を小さき石祠中に安置せり

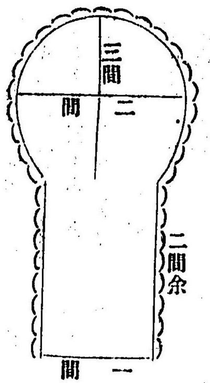
雄甲城趾　雄甲山の頂にあり河野遠江守通遠の居城にして天正中垣生加賀守城主となりこを守る

甲石　雌甲山東側面山頂近き所にあり甲狀を爲せる巨石しして俗に之を甲石と稱す

柱石　雄甲山にあり畧方形にして長數丈の者恰も削りたる柱の如き者して全山殆と此柱石と云ふも過言にあらざるべし其中東面の懸崖に柱石の重疊せるは最も奇觀とするに足る

柳原館跡　大字別府字柳原にあり二名集に云ふ觀應四年今岡通任河野館にあり柳原村に居地を賜ふと天正年中得居半右爾門尉之に居る柳原氏系譜に大職冠鎌足廿四世の孫正二位權大納言資明は柳原家の祖にして其六世の孫柳原權中納言尙光延德元年三月罪ありて勅勘を蒙り河野伊豫守通治に預け

らる通治之を風早郡小村に居らしむ世人其所を柳原殿といふと
高縄寺參詣道　此道は粟井村大字苞木の舊里正作道氏の祖某河野氏の命を受けて開墾する處にして
其功により氏を作道と賜ひ尚山頂の山林を賜しと
柳原古砲臺　藥場と稱し柳原の南海岸にあり今其頂上は海底電線の陸揚所たり



善應寺塚穴　小字辻の内背後の山腹にあり南西に口を開く安政二年四月サバ池修築の際土石を採取せんと發掘したるものにして巨大なる石を以て室をなし其奥の廣さ數疊を敷くに足る今や里人一小祠を建築して塚穴様と稱し大に信仰す塚穴發掘當時の人骨の破片破損せる土器及鏡刀劍の折等を保存す附記す土器は渦紋土器にして塚穴の形狀は上圖の如し

北條町誌

沿革　本町は元北條村辻村土手内村及安居島の三部一島に區分せられたりしを町村制施行後北條村を組織せられ後三年町制を布き北條町と稱せり今舊村名の起原並に其沿革の大要を述ふること左の如し
太古の事は知るに由なし只地質地形等に依り推考するに本町の大部分は其昔海たりし時代ありしならん何となれば現今近邊の海岸を觀察するに陸地增加の自然力を認め得べき事實あれはなり
北條村の起原を尋るに桓武天皇の後風伊豫親王の後裔北條太夫藤原親孝館を此地に築き北條館又風

早館と稱して之に居り此地を治めたり依て北條と云ふ
辻村　本妙院日逢聖人なる者俗名を豊田覺之進と云ふ辻村法善寺の開祖にして極めて有德の僧侶なりければ信徒の歸依するもの多く集り來り附近に居住して遂に今日辻町繁榮の基礎をなしたりといふ
土手内　は其名の如く海岸堤防の内とも稱すへき所にあり元辻村住民の繁殖に依りて成りしもの別に特殊なる基因沿革を有せず
安居島　は文化年中迄て無人島なりしが時の大官廣橋太助淺海難波北條各村より民を移して開拓せしめしなりと明治九年六月風早郡下難波村の内安居島となり其后間もなく今の北條町に屬す大字安居島となりたるは實に明治三十三年なりき而して本島名の起因を尋るに本島開發の元祖德丸金左衛門子孫に傳へて曰く本島は漁業の網代に付藝州廣島領と毎度訟倒ありしかは彌松山領と決定したる後は人々安堵の思ひをなしより安居島と稱すされば之より以前は合島間島相島愛島藍島と當字のみ海圖には現今も藍島と記するものありと聞く
本町　は昔時藩政時代に於て正岡郷に屬したりしが辻町は文政の頃迄て大洲候の領地にして無税宅地なりしが郡中と換地にして松山領となりし後も明治維新迄尚無税地なりしなり

位置及境域　本町は溫泉郡の北部に位し南は一小川流を以て河野村に境し東は正岡村に接し西は海に面し北は大体立岩川を以て町村界をなすと雖も一部分は川を超へて難波村に入り込めり而して地形の大要は漸次北部に幅廣き長方形をなせり
安居島は北條町の北海上三里の所に位し其四周の境界は四方海上に突出すること各二里其形狀は方形なり北方は白石を以て境とす

廣袤　本町は東西幅最も廣き所十町最狹き所四町南北凡二十二町あり安居島は東西十二町四十間南北二

北條町誌

町十間小安居は東西百三十七間南北貳百間あり

面積　本町の總面積は二百三十二町三反四畝廿七歩にして其内譯左の如し

田	百五十一町六反二十二歩	畑	廿五町五反二畝十二歩
宅地	十七町九反二畝十五歩	山林	三十五町三反八畝二十六歩
雜種地	八反六畝十一歩	池沼	一町一畝十九歩
其他	二畝十二歩		

安居島の總面積は二十三町六反五畝三歩にして其内譯左の如し

畑	十町五反九畝五歩	宅地	七反七畝十七歩
山林	十一町四反九畝一歩	雜種地	七反九畝十歩

海岸線　本町の海岸は屈曲甚少く南端河野村の界より北端立岩川の三角洲に至るまで殆一直線をなし長二十三町に過ぎず只中央部の沖合に鹿島ありて其對岸に人爲になれる一小港を有するのみ安居島の海岸線は三十一町三十間にして小安居は八町二十間あり

港灣　北條港は前項記載の如く人工になれる一小港に過ぎざれども風波の患なく碇泊に便なり港内狹しと雖も尚四十万斤積十余艘を入るゝに足りされは大船小舟常に碇泊し多き時は百艘以上に及び少なき時も五十艘内外の繫留ありとす然れども深度大ならずして滿潮の時も六七尺乃至一丈に過ぎず故に最低潮の時は港底まで全く乾涸するなり

安居島港は大安居の南岸にあり良泊地と稱する程にはあらざれども瀬戸内海十字形航路の衝に當れるを以て帆船の碇泊するもの頗る多く爲に意外に收益あり港は東西二百七間南北七十間あり

島嶼　本町の海岸を距ること僅かに四町の沖に鹿島あり高凡五百尺周回凡十四五町北西南の三面殆絶壁をなし只東側のみ緩斜にして其麓に鹿島神社あり全嶋鬱蒼として多數の鹿と少數の白兎棲めり明治

三十九年一月より保安林に編入せられたり

鹿島の西に三ケの岩礁あり鏃を立てたる如く突起して草木少なく岩骨を表はせり其一を小鹿島といひ最も東南にあり高凡十二三間其西北にあるを「チキリ」といひ形狀略小鹿島と仝し其又西南にある小岩礁を玉理間道と云ふ

安居嶋　は本町を距ること西北三里の海上にあり大安居小安居の二嶋に分る小安居は鹿嶋よりも小さき無人の小嶋なれども大安居には戶數七十五ありて一部落をなせり山低くして最高點も四百尺に過ぎざるべく周回凡三十町あり

海峽　鹿嶋海峽は本陸と鹿島との間にして干汐の時は幅僅に四町に過ぎず人語の聞ゆる程になれども潮流甚急激にして舟行甚困難なることあり

岬角　安居嶋港を擁する東西兩角あるのみ而して東角を東風岬（ヒガシ）といひ西角を地風崎（ヒカゼ）といふ

潮汐　滿干の差最大一丈二三尺最小七八尺なり而して其最高潮は陰曆三月三四日六月十六七日なり

潮流　本町に沿へる海潮は則齋灘の一部分にして遠く速吸の海峽より入り來れる潮流は興居島の南北より波妻の鼻を掠めて今治を過ぎ去るものなれは滿つる時は北に干く時は南に流るゝを常とす但一小局部にありては嶋嶼岩礁等に衝突して所謂「ワイ」を爲すことあり

鹿島海峽にありては潮流の速度稍大なることあれども其他は概して緩なり海底の模樣は詳に知り難きも鹿嶋附近は一帶岩礁多けれども其他は大概砂泥なるが如し

安居島を南方に距る壹里の所に安居の巢と稱する潮流あり幅員一里其速度は一時間二十町と認む航海の針路は藝豫間を過ぐるものは上に避け上下をなすものは端を避くるなり海底は砂土より成れる山谷形の如し

地勢　本町の地勢は極めて平坦にして鹿島と安居島とを除くの外一の山なく谷なく少しの高低凹凸を見

す但し河流は徐々東より西に流るゝのみ

山誌　前項に記せし如く山と稱すべきものは唯鹿島と安居島とあるのみ其他は凡々たる平地なり

水誌　本町は正岡村の西に接續　漸西漸低の地盤を有するが故に大小の河川は悉く西に流れて海に注く

立岩川　は立岩村より來る風早地方第一の大河にして河口に近き所に於て幅五十間あり灌漑の利大なりと雖も時に水害も亦免れず此河の一部分は全く本町の地域を流れ河口より凡四五町の間は難波村の界を限る

明星川　は正岡村より來れる田間の一小流なれども水利上極めて必要の川なり此川を以て北條と辻との限界をなす河口(北條校の前)に於て幅四間あり

角田川　は辻の南部小字新開の北を流るゝ一小川にして水利は明星川に劣らず

長澤川　は辻町の南外れを流れ北條港に注ぐる一小流なり幅一間半許あり

其他堀切川は河野村の境をなして海に入る幅凡二間あり

本町には湖沼瀦布なし池は北條池新池の二つあり北條池は東北隅正岡村の界にあり面積五反一畝廿八歩とす此池は古來北條の用水池にして何時の時代に開堀せしか詳ならず

新池　は辻の北にあり面積四反八畝十七歩にして明治二十九年に堀りたるなり

泉　は上辻の東端柳神社の側にあり廣百坪内外なれども乾涸することなし

氣候　海岸の地なるを以て所謂海洋性氣候を有し寒暑の差少し夏は涼風海上より來りて熱氣を拂ひ殊に月清き夜海中金玉を躍らし碧波小動の上ろ鹿島の綠塊を浮へたるか如きは氣候の佳良吾人天惠の厚きに泣かずんばあらず然れとも冬季海荒るゝ時は北風肌を裂き吹雪さへ加りて殆人の進行をさへ止めんとし東風吹き荒む時は高縄颪身にしみて堪へ難く眞に風早郡の名に耻ぢざるを知る

溫度は極寒の時と雖も氷點に下ることを稀にして盛暑の時も三十二度に昇ることを殆んどなし雨雪は少き方にして雪も冬季中二三度積ることあれども二三寸に過ぐることなし

地質　島嶼は地骨火山的花崗岩よりなり表面に瀞き花崗岩砂土を被れとも本陸は全く水成岩沖積層にして花崗岩質砂壤土なり故に麥蔬菜類に適す

天産物　海魚に鯛、鰈、鱸、烏賊、鰹、鮪、鰯、鰻、鰤、オコゼ、アナゴ、メバル、アブラメ、ギザミ、蛸、エツ、チヌ、ノオクリ等あり

區劃及政治　本町は北條辻土手内の三部落と安居島とに大別し辻最大にして地積百三十二町一反五畝七歩を有し次は北條にして五十八町五反二畝廿四歩安居嶋又之に次き二十三町二畝二歩土手内最小にして十七町六反四畝九歩なりとす而して北條本町に役場を置きて全町を管理せり

戸數　全町の戸數は八百六十八戸にして其内譯左の如し

北條	二百九十三戸	辻	四百十五戸
土手内	八十五戸	安居島	七十五戸

人口　人口の惣數は三千九百八十九人にして内男千九百九十六人女千九百九十三人なり更に之を別ては原籍民男千八百八十七人女千八百七十七人寄留民男百九人女百十六人なりとす

人情風俗　勤儉質朴にして親切心あり然れ共青年以上の者に稍活氣を欠ける感あり衣服は平常綿衣なれとも晴衣には絹布を用ふるもの少なからず

食物は米麥を常食とし副食物には蔬菜の外魚類を多く食す家屋は大抵瓦葺にして清潔なり町内の禮法は普通にして言語も記すべき程のことなく上品と云ふを得されとも又甚しく野鄙なりとも評し難しされとも安居島は氣質輕躁なるもの多く言語も野鄙にして方言能言多し習慣としては農作及採薪は男子の手を藉ること少く女子の職とせり冠婚葬祭等は比較的丁重にして殊に兵士の送迎は一層なり衣服は餘り華美を用ゐず家屋は一般に狹隘なれとも瓦葺なり

北條町誌

教育　明治七年四月北條小學校を創立し爾來幾多の改良發達を見種々變遷の經歷ありと雖も通學區域と北條校といへる名稱とは曾て變りしことなし校舎の位置を變へしこともなく年と共に進歩の實を擧げつゝあるは本町教育の爲め幸福の事なり現今の學校は北條尋常小學校と安居島尋常小學校との外に實業補習學校あり北條高等小學校は大字土平内にあり明治二十四年五月の創立にして粟井、河野、五明、立岩、正岡、難波、淺海及北條町との組合立なり中等教育は本町に設備なきを以て松山市なる諸學校へ入學せり

衛生　避病舍は字新開の北部海岸の松原に設立し衛生組合は各大字にあり又各小字に支部あり町役場之を統括す春秋二回定期清潔法を施行し清潔法は大に勵行せられ傳染病の豫防法は法規に從ひ實施せり學校には校醫ありトラホーム患者は地方に多く學校生徒の調査を見るに百中五六十に達せり

警察署　本町に巡査部長派出所兼巡査駐在所あり三津警察署の管轄に屬す

裁判所　辻町に松山區裁判所北條出張所あり

宗教　佛教の外に少數の天理教信者あるのみ故に全町擧りて佛教信者といふへきもさりとて佛教も振はず僧侶は葬儀佛事に從ふのみ

神社佛閣　國津比古神社は縣社にして正岡村大字八反地にあり正岡、立岩、難波、淺海の諸村及當町の產神なり

鹿島神社　は鹿島の東岸にあり武甕槌命布津主命を祀る島中鹿多し社殿は明治十四年改築し玉垣は三十五年之を建造せり村社にして祭日は舊九月八日九日なり柳神社は上辻の田間にある無格の一小社なり

其他天滿宮蛭子社稻荷社等あれども小末社たるに過ぎず

天滿宮　は安居島にあり國津比古神社の末社にして明治十七年六月鹿島神社より勸請したるものにして沿革等記すべきことなし

姫坂神社　も安居島にあり天保二年の創營にして是又別に記すべきことなし

法源寺　は土手内にあり眞宗大谷派にして開山の高僧は釋了傳にして永錄十二年十月二日の創建に係り中興の開山を釋九順といひ開山より現代まで十六世にして檀徒僅に二十六戸あり昔此寺火災に罹り書類一切灰燼に歸したるを以て判明せざること多し

法然寺　は北條にあり淨土宗鎭西派にして光蓮社心譽上人念阿照西宗哲大和尚を開山の高僧とす而して開山より現代まで十四世にして檀家三百四戸を有す本町寺院中最廣大なり

法善寺　は辻にある一小寺院なり開山は本妙院日法上人にして元龜元年二月十五日の開基なり日蓮宗にして檀家百二十戸を有す

西福寺　は辻にあり堂宇墻垣頹敗して見るに忍びざる一貧寺たり眞宗本願寺派にして寶輪山西福寺といひ貞和五年六月三位入道祐成の母回國結願の爲め此地へ草庵を建てしも其後中絶せり寛永十四年十二月七日本願寺十三世良如上人の時宗玄大德同宗に歸依し前記の山號及寺號を得たり依て本山直末寺となり寛保四年二月現今の地に移轉す然るに元明八年六月十三日の夜雷火の爲め本堂及庫裏を燒失す其際舊記等悉く燼滅せしを以て以前の事蹟を詳にすることを得ず現今檀家百三十余戸あり

觀音堂　は安居島にあり文政四年の創營なり沿革寶物等記すべきものなし只由來として郡大官廣橋太助築港の際觀音像を祭りしかば其當時賽者非常に多くして其賽錢を以て工費を補助せし事碑文に記しあり

各種團体　慈善博愛公益義勇修養衛生等の目的を以て組織せる會合の主なるものは赤十字社救濟會武德會兵事支會愛國婦人會在鄕軍人會同窓會町農會革新倶樂部衛生會等にして赤十字社以下愛國婦人會までは本町内のみに其團体を有するにあらず只其社員又は會員たるに過ぎず在鄕軍人會より以下の諸

團体は皆本町内に於て獨立の機能を有せり而して何れも一定の期日又は臨時に開會して各其目的を達しつゝあり其他舊來の念佛講組は依然として存し隣保相助け吉凶互に世話を怠らず若者組小供組亦能く盆正月節句祭禮等の世話を爲すのみならず近來漸く時世に伴ふ進歩を爲し之を利用して青年の言行を改善しつゝあるは嘉賞すべし

安居島には青年會あり該會は修養としては讀書算術及稀に撃劍等をなし規約としては未成年者にして喫烟を爲す者あるときは除名して絶交を爲す事とせり慈善の部類としては難波船等のありたる場合九死に一生とも云ふへき急迫の際冒險的に全力を注きて救助し來れり

交通　本町は海岸平坦の地なれば交通の利器大抵備はらさるなきも只鐵道の設けなきは遺憾の極なりされとも多くの馬車人力車荷車ありて松山市への交通頗繁なり

道路　縣道は河野村より來り本町を貫通して難波村に至る松山より今治に通する要路にあたり幅三間乃至五間あり道路平坦にして交通甚便なり

里道は町内を通するもの及隣村へ通するもの數條あり

本町より官衙及隣接村役場への方位及里程左の如し

縣廳へ　南　四里十町　　溫泉郡役所へ　南　四里八町

河野村役場へ　仝　三十一町　　難波村役場へ　東北　二十一町

正岡村役場へ　東　十五町

安居島には里道長三百間幅四尺あるのみ

橋　梁　口の出橋は石造にして長四間幅二間ありて明星川に架せり

桑橋　は石造にして長三間半幅五尺ありて明星川に架せり

港橋　は木造にして長四間にして幅五尺あり明星川に架せり

養老橋　は木造にして長四間幅七尺ありて長澤川に架せり

鹿島橋　は石造にして長一間半幅二間長澤川に架せり

新開橋　は石造にして長二間幅二間ありて角田川に架せり

航路　北條港へ出入する船舶は漁舟の外廣島三津九州等に往復する薪又は石灰船等僅少にして稀には滊船の寄港することあり

三津尾之道間を往復する滊船の近來一日二回寄港することゝなれり

埠頭　埠頭は海中に突出すること五十間高さ一丈二尺にして二條並行せり

郵便電信　本町に北條郵便局ありて郵電事務を扱ふ集配市内は一日三回にして市外は一度なりとす

生業

農業　本町農産物の主要なるもの左の如し

米　一千七百七十八石四斗　　麥　一千八百七十四石六斗

水産　水産物の主なるものは生魚にして天産物の部に記せしものゝ如し而して其販路は地方の外三津廣島等へ輸出す産額凡壹萬圓なりとす

海藻　は相當の代價を以て他村の者に採取せしむ

商業　商業は農業と共に本町主要の生業にして本町の繁榮は商業によりて維持せらるゝと云ふも可なり然れ共規模小にして頗る不活潑なる小賣商なり

工業　大規模の工場なく只個人として大工左官石工樽屋等あるのみ獨り瓦屋は個人としては規模稍大にして産額頗る多く販路は廣島縣を主とす

地方の特産物　としては農家の副業として作れる編笠(細竹にて編む)あり産額多からざれども地方の一産物と見るべく其他縞紬も婦女子の内職として盛に織出せり

北條町誌

財政　本町の財政は豊富なりといふべからざるも亦窮因の狀態にもあらず町としての經濟も個人としても郡内中等以上の地位を失はざるへし税源は農商業を主とすれども船舶漁業より得る利も亦尠からず

名勝舊蹟　鹿島の城趾は鹿島の山頂にあり元久留島氏の居城にして二神豊前守城代たりしが後得井半右衛門尉之を預れり今や鹿島は地方の名勝として夏季には遊客の絶ゆることなし

北條館　は北條にあり俚諺集に曰ふ北條太夫氏長者觀孝の住所と安國は風早大領と稱す爲綱風早太夫伊豫權介と云ふ皆此地に居る云々今の上町と本町との四辻天滿宮の在る所邊に北條館のありしならんと云ふものあり

引地山城　は北條にありしと云ふ

御臺場　は大濱の北部法然寺の西海岸にあり昔時松山藩の砲臺を据へし所なりと

新開の並松　は土手内の南部に於て縣道を挾みて路傍凡四五町の間老松鬱蒼枝を交へ道を行く人恰も穴に入るの感あり此松は德川家光の時地方の官吏をして植ゑしめし者なりと傳ふ

舊藩代官所の跡　は今の尋常小學校運動場の邊にありしと

昔時辻町の布勸（今の豊田勸三郎氏父祖）本町の米嘉（今の永井嘉太郎氏の父祖）等は何れも地方有名の豪商にして殊に慈善家の聞ゑありしなり

人物　故森紀氏　は政治社會に於て地方改進黨の牛耳を取風早地方の雄鎭たるのみならず縣會議員中の錚々たりし人物にして一縣の民福を謀しては尠しとせず又長く村長町長の職に居り町村の爲に盡せし事蹟も亦多し

口碑俗傳　高等小學校の少し〻東に春岡神社と云ふあり明治二十七年旱魃の時農民等思ひ〳〵に田の中に井泉を堀穿せしに土中より五輪の石塔出たりこれを信仰する者ありて一小祠を建て祀りしに其靈驗あることを傳へ聞き遠近の賽客日々に增し一時流行神となれり而して其石塔に付ては種々の臆說出で或は古武將の墓なりといひ或は洪水の爲上より流れ來りて埋せりし者なりといひ更に取り止めたることなく尙一說には昔時此邊に寺院ありしが寛政年間立岩川氾濫し（猿川流といふ）其寺も其洪水に罹りて流失せしなり故に今の高等小學校の近邊を字門前と云ふと此說眞に近きが如し

安居島の姫踊神社の事蹟に付殘忍なる口碑あり姫は京家の人にして「ウツロ船」に乘せられ本島に漂泊し艱難せられし處菊間の網屋の窯類に殺害せられ所持の金品を奪取せられたりと

正岡村誌

沿革　正岡村は元と八反地、中西内、中西外、寺谷、院内、波田、神田の七箇村なりしを町村制實施に際し合併して一村となり正岡村と稱し前七箇村は今大字として存在せり

正岡の村名は其地方を古正岡郷と稱へ來りしにより採つて村名とは爲したるなり

位置及境域　本村は溫泉郡内北部に位せる一村にして東は高縄の山嶽高く聳ゑて立岩村と其麓に相接し南は河野村に西は北條町に田園相隣し北は瀦々たる立岩川の流を隔て〻難波村と境せり

廣袤　東西三十餘町南北二十町餘あり

面積　本村の總面積は四百二十六町二段九歩にして其内譯は左の如し

田	二百拾九町六段四畝十歩	畑	三十一町七段四畝二十二歩
宅地	十七町四段六畝二十一歩	山林	百四十五町五段九畝九歩
雜種地	四段八畝十一歩	池沼	十一町二段六畝二十六歩

地勢　東南の一帶大字院内波田神田寺谷八反地の一部分は高縄山の末脈連亘し山々相重なれども其他は

正岡町誌

水誌　殆ど平地にして西方に向つて漸く傾斜をなす

立岩川は東立岩村より流れ來り本村の北部と難波村の境を西北に向つて流れ北條町に下りて遂に海に入る其支流の一は大字八反地を貫流して西に向ひ中西外を經て北條町大字土手濱に至りて海に入る

氣候　此地方は冬季風烈しく北條沖より吹來る西風殊に强く嚴冬の氣溫攝氏零度に及ひ酷暑三十三度の間にあり

地質　本村の大部分は火成岩にして砂土壤土相半し之に少許の埴土を交ふ

天産物及其分布　本村所產の天燃物の記すへきものなし唯山林に燃料及建築用材に供すへき松杉櫚を主とし栗檜の少數あるに過ぎす

區劃及政治　本村を大別して七大字とし更に椋の原、砂川、宮の上、半田等の小字に別つ村役場は大字八反地にあり村會議員は十二名なり各大字の地積は左の如し

八反地　百三十九町六段三畝十五歩　中西內　四十町六段二畝九歩
中西外　八十二町八段四畝十九歩　寺谷　四十九町九段九畝四歩
院內　五十五町一段二畝廿九歩　波田　四十五町一反七畝十歩
神田　二十一町四畝十四歩

戶數　全村の戶數は四百一戶にして各大字に區分せは左の如し

八反地　百二十戶　中西內　四十八戶　中西外　百廿六戶　寺谷　十八戶
院內　三十戶　波田　三十二戶　神田　廿七戶

人口　人口の總數二千百三十二にして內男千一人女千百三十一人なり而して原籍寄留の別をなせば原籍二千百四人寄留民二十八人とす

人情風俗　氣質は溫厚質朴の風あり言語禮節普通なれども中等以下の勞働者に至つては野鄙粗放のもの猶多し

教育　本村には一の尋常高等小學校あり大字八反地に置れたり學級數五生徒數二百五十余名一ヶ年經費一千四百余圓八百余圓の基本財產と四段余畝歩の學林を有す明治三十七年八月一日其成績佳良なるを認め市町村立小學校及教員奬勵細則に依り金六拾圓を賞與せらる

衛生　避病舍は明治三十八年中大字八反地に新設す衛生組合清潔法傳染病豫防法等は何れも規程により正確に施行せられつゝあり

警察及裁判所　三津警察署の管轄にして巡査駐在所は八反地にあり裁判所は松山區裁判所の管轄に屬す

宗教　佛教信徒多數を占め眞言宗禪宗を最とし眞宗法華宗淨土宗之に交ふ又黑住教天理教の信徒往々あり

神社佛閣　縣社國津比古命神社は本村八反地にあり櫛玉燒速日命可美眞手命及磐田別尊を祭る其由緒を尋ぬるに應神天皇の御世に櫛玉燒速日命の遠裔阿佐利を風速の國造に定め賜へり依て風速を領知し遠祖國津比古命櫛玉比賣命を齊き奉り神戶を定む今に其名義遺れり今の波田神田地方なり中古當社を頭日神社と稱し後亦頭日八幡とも稱せしが中御門天皇の享保年中舊號に復す明治二十九年十二月廿二日縣社に列せらる

鄉社櫛玉比賣命神社　は八反地にあり天道日女命御炊屋姬命の二神を祭る上古當社は今の南に隣れる小山に鎭座あり海濱より此地まで直道を通す里人傳へ云ふ往古御勅使のありし時新に此道を修營せしと文德實錄に齊衡元年三月壬辰伊豫國櫛玉姬神に從五位の下を授け賜ふと見えたり所謂此時の御勅使ならん今其字道筋なる辻村の內に殘れり中古拔入升大明神と稱す後水尾天皇の寬永年中今の社地に遷し享保年中舊號に復すと云ふ

正岡村誌

宗昌寺　は本村八反地にあり禪宗黄檗派にして本尊は文殊達磨等なり元弘元年大樫那河野氏越智經孝公の建立開基に係る天文年中大半燒き却寛文十二年再興の議あり郡内の貴賤喜捨すれども未だ就らず延寶二年九月に至り再建す貞享元年命あり山城國宇治郡黄檗山萬福寺の末寺となりしとの票あり

光德院　は大字寺谷にあり眞言宗本尊聖觀世音菩薩弘法大師無量壽如來を安置す創立の由緒は不詳なれども舊記に豫州風早郡寺谷村密護山護持院神護寺と稱し元錄八年周應上人惠日山光德院と改號す後醍醐天皇の勅願所にして七堂伽藍建立地なる故堂塔鐘樓經藏僧坊等美を盡し脇坊十二ヶ寺末寺五十七ヶ寺伊豫一國の總本寺なりしに兩度の火災に罹り悉皆燒失し茲に本尊及無量壽如來のみ殘る暫く假小屋へ安置の處天和年中松山の藩主松平定直公再建あり又天明年中より本郡の祈願所となり堂宇再建修繕等總て本郡の負擔としたりしが明治五年之を廢せらる

各種團体　正岡青年會は若連組を利用して本村青年全体より組織す會員百二十名春秋二季に總會を開く會費は一人につき金拾錢とし毎年定期夜學會を開催す就學奬勵會は全村兒童の就學を奬勵し學事の進歩を計るに勉む目下會員四百名あり

交通　(一)　道路　交通は比較的便利の位置にありと雖道路狹隘にして北條町より正岡村を經て立岩村に至るの外は牛車又は人車の通行を得ず

北條町より正岡村を經て立岩村に至る里道あり大字中西内八坂地波田神田の各部落を過ぐ長凡拾五町幅平均二間余あり

大字八反地より各部落に通ずる里道延長殆んど三里餘即八反地を中心として中西外に至るもの、寺谷、院内、波田、神田に至るもの、小字椋の原に至るもの、中西外より河野村に至るもの、八反地より難波村に至るものとすれ等は幅平均一間あれども車を通じ難し

愛媛縣溫泉郡役所は本村より南四里强の處にあり西、北條町役場へ十四丁北難波村役場へ十二町南河野村役場へ三十町東立岩村役場へ一里廿町計あり

(二)　橋梁　大字神田に長拾間幅一間半の土橋あり北條町より正岡村を經て立岩村に至る里道中にて尤も大なる者とす

(三)　郵便電信　北條郵便電信局通達區域にして郵便は一日二回の集配電信配達は一里内の區域に入れられたり

生業　(一)　本村は農業を以て主たる稼業とし其産種は米麥菜種雜穀等とす其收穫高は左の如し

米　作付反別二一八五反　收穫高　一萬一千九百七十五石

麥三千二百八十石、菜種四十四石雜穀六十八石甘藷二万四千貫柿二千三百貫

其販路は主として北條町に向つて積出すと雖往々河野村の内柳原又は三津濱町に販賣せらるもの少からず

(二)　林業　山林樹木の種類は松杉櫸檜其他の雜木にして山林少なければ栽培等に改良せられたる跡を見ず主として燃料及少數の建築用材に伐採せらる

(三)　商業　商業の主なるものは各部落に雜貨の小賣をなすものと少數の仲買人が牛馬の賣買材木の仲次に從事するに過ぎず其營業別は

小賣商　四十八人　　材木商　一人　　仲買　十人　　酒造　一人　なり

(四)　工業　機業は稻發達したれども農業の暇を以て婦女子が飛白紺木綿の類を織成すに過ぎざるを以て其製産額一ヶ年一万五千端此價額一萬二千餘圓なり小字砂川に草履草鞋を製するものあれども近年其數を減じたり其他大工九人木挽二人桶檜三人石築二人牛馬具二人理髮三人荒燒三人あり

財政　農業地方にして特種の富源等なきを以て民力殊に富めりと云ふを得ずと雖比較的平均せるものゝ如く生計一般に豊かなるを覺ゆ貯金の有様は各大字に貯金組合を設け毎月一口に付五錢乃至五十錢宛の貯金をなせるものあり學校生徒の貯金高は七拾圓に餘れり

立岩村誌

沿革　本村は才之原、瀧本、猪木、猿川、中村、米之野、庄府、儀式、小山田、猿川原、尾儀原、萩原の十二大字より成る其立岩村の名は町村制實施の際附したるものにして蓋し立岩川の上流を占むるを以てかく名付しなり

舊記によれば此地一帶を古神途郷と稱へたり其中小山田、萩原の二部落は舊野間郡神戸郷に接せしを以て又風早郡神戸河内郷とも稱したりと而して各大字の分は左の如し

才之原　古は佐猪野原　猪木　古は猪來

猿川　古は狹留川又川上　米之野　古は古美野又米野々

儀式　舊名祇式今文字を改む

猿川原　古は狹留原といへり元猿川の内なりしと傳ふ又神途が原とも云いしと

瀧木　古は瀧の宮と云へり蓋十二ケ瀧の所在地にして又熊野瀧神祉あるを以て起りしならん

尾儀原　古は狹原といゝしが萩原と混し易き故に今の字に改めしと

萩原、小山田、庄府、中村に就ては古名起因詳かならず

位置及境域　本村は溫泉郡の最北部を占め東は北三方ケ森一帶の山嶺を以て豫智郡龍岡村に北は同山嶺を以て仝郡歌仙村に接し西は丘陵蜿蜒して本郡淺海灘波正岡の三村に南は河野村に境す

廣袤　本村は形恰も巾着に物を入れ口を搾りなるが如く東西は南北に比すれば稍長し東西凡二里半南北凡二里なり

面積　總地積は一千六百三町七段一畝廿六歩にして其内譯は左の如し

田　二百十二町四段四畝十九歩　畑　二百二町三段四畝十七歩

宅地　二十町五段八畝廿七歩　山林　千六百十五町九段四畝廿八歩

雜種地　二町三段八畝廿五歩

地勢　本村は高縄山の北半部面と北三方ケ森の西半部面及野間山彙の最南部とを占め立岩川の一流各溪谷の水を集め村の中央を西走す村内最高の所を最東南即ち高縄山頂とす之より支峰連亘して村の中部に向て低く北傾斜をなす第二の高地を村の最東部北三方ケ森とす之より西に面して傾斜をなす又村の北部立岩川の以北丘陵は同しく村の中部に向て南傾斜をなし此三斜面の水集りて立岩川の各支流及本流をなす立岩川の本支流の沿岸には耕作地を見れども其他皆山地にして田畑は何れも段階狀に相接比せり

山誌　高縄山は九州島より東せる阿蘇火山脈中の一消火山にして山頂間錐狀をなす高縄半島の名は此山に起因す高三千五百九十七尺山容秀麗徐ろに支峯を分岐して泰然之を率ひるの觀あり瀬戸内海を航する船の目標となる往昔仲哀天皇の御世小千躬尺丸此山に住居し加冠して高縄と名のる之れ山名の起る處なりと頂上を天神ケ森と云ふ河野氏の舊城趾あり昔河野通信自ら父通清の像を彫刻して此處に安置せしに其像菅公に似たりしより后世此地を天神ケ森と云ふと山中杉櫟栗樫等の樹林を見るも草生地大部分を占む故に豪雨至らば水一時に溪谷に溢れ又一時に減するを見る山頂一帶は官有林に

して巨樹蓊鬱せり

北三方々森　高さ凡三千二百尺餘高縄山に比すれは急峻なり本村と越智郡龍岡村との境上に在りて高縄山の東に當り此兩山脈の連る所即ち立岩川と石手川との分水嶺たり山に生する樹木は前と相似たり

三次山峠　大字才之原の東方にあり今治街道に屬す西麓より上ること又東に向ひて緩く下る往復するものゝ休息する所たり

其他高萩、スクモ塚、萩の森、新入道峠は本村の高地なり

水誌　立岩川　は源を米之野字寶阪谷に發し庄府川と合する所河幅八間西村境に至れば凡廿五間となる各支流の輪概ね三間より四間あり支流の重なるものは儀式川、安後川、津與知川、小山田川、龍本川、萩原川等なり

立岩の名稱　は其起因詳ならすと雖要するに河流到る處花崗岩石の大小累々はして横るあるを以て起りしならん上古は磐瀬川といへりとぞ

山來　本川は河水暴漲して堤塘を破壞したること少からす近きは明治十九年の大雨に於ける洪水のため全村舊來の堤防概決潰せられ今の在るもの皆其後の修築にかゝる水の深き所數箇所深淵をなし尺數の碧色なるを見れども他は徒渉するを得平時は礫を現はし水は川の一部分を流る川底の白砂は清き水と共に一の美觀たり全流灌漑に便せんため堰の設あること多し鮎鮠鯽は此川の產漁多し

滝の名あるものゝ安後の滝及十二滝とす

安後の滝　は大字中村の南方にあり立岩の支流なる安後川の水源に屬す滝は上中下の三層をなし層毎に窟あり上層長三間中層七間下層十間銀糸万條絶ねんとして絶ねず亂れんとして亂れず近傍樹木

蒼鬱水聲殷々として寄觀なり

十二滝　は大字滝本にあり榜に熊野神社を祀る老杉林立鬱尚暗し

左の和歌を傳ふ

神途熊野十二滝の景　山邊赤人

石走る滝もよろに鳴く蟬の聲をし聞けば宮や思はゆ

池は灌漑用として五十箇所あり何れも立岩川の水の及はさるを補はんがための用水池なれば小規模なり多くは溪谷を堰きて蓄溜す

氣候　全村山地なるを以て近村平坦地方に比して概ね低溫度なり殊に高縄山上に於ては盛夏と雖涼冷にして蚊を見ず平均溫度は極昇三十度嚴冬六度と注す雨雪量は他地方に比して多し夏季の驟雨冬季の積雪又四時雲霧の多きこと山地たる本村の特徴なり風向は春夏南西秋冬北西風多し而して東風又は東南風吹き來るときは概して雨の兆とす

地質　火成岩にして到る處花崗石を見る土壤は砂土に壤土を交へたるもの主たり然れども山脈連りて且當り勝しら所多く概して肥沃の地と云ふを得ず

天産物及其分布　動物にては野獸に兎狐野鳥に雉山鳥鶯鳩雀燕鵜等多く又蝮蛇普通の蛇類兩棲類各種の昆虫は一般に多き方なり魚類は川流に於ける鮎鯰鮒鰻を主なるものとす夏季鮎鰻を漁するもの多し植物は地山を蔽して松杉櫟櫪多く竹多く繁殖す鑛物は銅鑛の出づる處一ヶ所あり花崗岩は石垣築造用として適當のもの多量に存在す

政治及區劃　村役場は大字猿川の字西森にあり十二大字を治む各大字の地積は左の如し

才之原	七十七町七反余	滝本	五十二町八反余
猿川	二百九十一町余	中村	七十七町余
猪本	八十町八反余	米之野	三百五町余

立岩村誌

庄府　百五十二町余　儀式　七十八町余　小山田　百七十二町余
猿川原　三十五町余　尾儀原　四十三町余　萩原　二百五十九町余

戸數　全村の戸數五百四十九戸にして各大字に區分せば左の如し

才之原　四十六戸　瀧本　二十七戸　猪木　三十三戸
猿川　九十一戸　中村　四十戸　米之野　四十七戸
庄府　四十六戸　儀式　四十六戸　小山田　九十三戸
猿川原　二十六戸　尾儀原　十八戸　萩原　三十六戸

右の内商業九戸工業六戸にして其他は農業なり

人口　人口の總數は三千六百七十七人内男千六百四人女千四百六十三人あり寄留民は僅に二十七人にして越智郡龍岡村地方より來れるもの多し

人情風俗　古來各地方との交通頗繁ならざる爲め人情朴實にして淳良然れども見聞博からざる爲め稍頑固なり自己の信する處は容易に之を抛げざる代りに又移し難きの氣質あり、言語は一般に丁寧にして挨拶能く行屆く然れども地方の訛りとして語の終りを長くするの癖あり一般習慣としては神佛を崇敬し陰暦によりて神社佛閣に參詣するもの多し行事もすべて陰暦を用ふ禮儀は丁寧にして各字各組毎に稱へて吉凶喜憂を共にす納税の義務は怠りなく完行するの良習あり、衣食住概して質素にして中等以下の婦女にありては平日帶を締めず細帶にて機織炊事に從ふ男は勞働便利のため筒袖を着るを常とす家屋は藁葺七分瓦葺三分の比なり

教育　村立尋常高等小學校一ありて明治維新は寺小屋教育の如きもの數多ありしが明治六年一月尾儀原村外十一ヶ村協同して學校を創立せり校舍は尾儀原法善坊を用ひ兒童卅名計を教育せり明治十一年廢校更に才之原、小山田、儀式へ各學校を建設するに至れり其校名區城は左の如くなりき

才之原小學校　才之原區域　才之原瀧本猪木猿川尾儀原

明治十三年分校を猿川に設けたり

九容小學校　小山田區域　小山田猿川原萩原

明治十三年分校を萩原に設く

有垣小學校　儀式區域　儀式中村米之野庄府

明治廿年に至り學制一變才野原、小山田、儀式簡易小學校と稱す后廿五年九月卅日之を廢し更に立岩儀式の二尋常校とし小山田へは分校を置けり明治廿八年右三校を合併し一村一校となし現在の學校即猿川原字井手ヶ鼻へ新築をなし立岩小學校と稱す后三十四年副築をなし卅七年四月一日より高等を併設す

衛生　避病舍は明治卅二年の建築にして猿川字西森、立岩川の左岸にあり村の中央を占む諸般の設備完全なり衛生組合は各大字にありて傳染病豫防法清潔法等の不便を感せず唯醫師を一里餘の北條町に呼ぶの不便あり獸醫一人大字猿川にあり

警察及裁判所　本村は三津警察署北條町巡査部長出張所の所管にして村役場と並ひて巡査駐在所の設置あり裁判事務は松山區裁判所の所管にして登記事件に就ては全裁判所北條出張所の取扱に屬す

宗教　全村重に佛教を信ず殆んど眞言宗醍醐派に屬し間々禪宗天臺宗あり大字萩原に神道黒住教を奉するもの十數戸あり

神社佛閣　高縄寺は高縄山上にあり米之野に屬す天智帝の御宇小千守興今の河野村大字横谷の地に創營し越智家累代の祈願所とす后慶長年間僧空海再興して寺號を高野山高縄寺と稱すと天文元年四月高縄城主河野通宜今の地に移す寶物として通宜自筆の紺紙金泥の法華經一部を藏す毎年舊暦三月四日七月九日を緣日として風早地方は勿

立岩村誌

論遠くは松山近邊今治地方より参詣するもの頗多し雨雪の日を除けば平日も雖登山跡絶を兼ねて賽するもの断ねず

紀貫之神社（村社）は猿川原字堂の山にあり紀貫之を祭る天慶九年貫之勅を奉して伊豫國諸神社に奉幣せんとし四月廿九日此地に來りて病卒す一首の和歌あり（伊豫舊記）

今日祭る神の心や庶くらひうつきの匂ふ花恒の里

又曰く貫之の奇紀實平源實朝より封を伊豫字和郡甲森城に賜はり之に移らんとし途此所に來り祖先貫之の墓に詣で疾を發して卒すと故に實平公のも合祀あり貫之實平何れを祭れるにや疑はし又如何なる由來にや地方のもの齒痛を患ふれば此社に祈願して平癒するもの多きよりして齒の神様と稱へ

蓮生寺は猿川原字本谷にあり延長中真學僧正開基し正保二年狀眞之を中興せり寶物として釜十箇を藏す貫之の釜と云ふ貫之の愛玩せしものと傳へらる周圍廿尺五寸六分口徑四寸釜の尾端に金色の部分あり又古皿十箇あり古色蒼然之れ亦貫之の物なりと云ふ

新田神社は米之野にあり新田義宗を祭り之に義貞義助義則義隆の五靈を合祀す社の傍に腰掛岩と云ふあり義宗の憩ひし處なりと毎年舊八月三日祭日とす此日參詣者多し病癒の神として祈願する事頗る各種團體青年會は明治三十六年より組織し村内青年の智識を擴め風儀を改善し村の公益に關する事項を研究するを目的とす目下會員數百名あり又毎年冬期より春期に亘り各部落に夜學會を開催し青年兒童に讀書數學を授く其他軍人家族保護會あり

交通　（イ）本道路　村の西難波村境より新入道峠に達するものを今治街道或は龍岡越と稱し風早地方以南のもの今治方面に赴くもの大抵之を經里道にして此長凡二里余中間に三次山峠あり幅廣き處一間半東本郡に從ひ漸く狹し此幹線より分岐して各部落道を左の如し本村役場より各要所の里程方位左の

如し

南　愛媛縣廳へ　六里余　温泉郡役所へ　又全し

西　正岡村役場へ　一里　浅海村役場へ　一里半　難波村役場へ　一里余

西南　河野村役場へ　二里弱　東　龍岡村へ　二里弱　歌仙村へ　一里半

（ロ）橋梁　立岩川の幹流に於ける重なるもの左の如し

實來橋　才の原字渦山の前にあり明治十九年長廿間幅五尺の欄干付木橋を架せしに全年の洪水に落され今は假橋を設く

學校橋　明治卅四年欄干木橋を架す長十間幅二間通學兒童の爲に設く

大遊寺橋　猿川字大遊寺の前にあり明治廿年渠の材にて架す長十間

點返橋　米之野の下手儀式との境にあり渠材を以て明治卅二年架す高四間長六間立岩川の點此邊に上りて引返すと云ふより名付く

（ハ）郵便電信　郵便は北條三等郵便局より日に一回集配をなす但荒原のみは土地偏するを以て正岡村を經たる集配人をして之に赴かしむ本村集配人の最も困難とするは高縄山上の高縄寺と米之野の字久保野となり電信は三津局の取扱に屬す

生業　農業は土地肥腴ならざるを以て產額少く品質も劣れり近年農會を設けて改良進歩を圖り居れり米麥作の試作地は猿川にあり又小山田青年農會の一團体あり農產物の產額の重なるもの左の如し

米　五千四百石　麥　三千九百石

甘藷　五万貫　牛蒡　五千貫

販路は多く北條町とす肥草は本村の特產なり毎年八十八夜頃より夏期の間駄馬を負ひ草苅に來るもの前后列をなし一奇觀なり肥草苅と云ふ一年產額凡百八十万貫と云ふ產地は米之野猿川中村庄府儀

立岩村誌

式猪木を主とす

林業　は一般盛にして杉松檜櫟樫等を主とす杉凡五万材松は大束として三千坪松葉廿五万束檜二千才を輸出す木炭は本村の特産物なり米之野中村を主産地とす炭窯の數凡一百餘一箇年産額八万貫（四千八百圓）内外北條菊間今治地方へ出す竹は淡竹真竹多し猪木中村猿川より多く産す大なるは徑竹小なるは壁下地海苔竹竿雨傘用として輸出す一ヶ年凡一万五千束（七千五百圓）筍も同地方より多く出す一年一萬四千貫其他裏實松茸炭山慈姑も多く輸出せらる

畜産　草生地多きを以て牛馬の飼養多し年々他地方より牛を預り飼ふもの五十頭以上に達す全村牛馬數牛百五十頭馬二百三十一頭あり

水産　立岩川に於ける鮎鯉鰕鰻の漁多く他地方より來るもの夥じ

工業　機織業蓆製造業水車業庶なり

礦業　狼川字金山谷及裏の谷に銅鑛あり坑數六明治三十三年村民共同試掘を企せしも收支相償はずして中止し三十八年より大阪府人三谷兼次郎と云ふもの試掘を願出中なり坑の深さもの既に三拾間に達す

商業　は微々として振はず農を兼ねたる小資業あるのみ

財政　本村は林業を以て特種の富源とし農業之に次ぐ其他副産物として收益の上るもの多く爲めに一般生計豊なり貯金高凡三万圓學童の分又漸次盛に趨き居れり

名勝舊蹟　高縄城趾は高縄山上に在り眺望佳絶快晴の日登山すれば近くは松山郡中今治地方脚下に見る遠くは内海無數の島嶼中國九州地方を望むべし俗に大阪の川口を眺望し得と云ふ登山するには通常猿川の三島神社の邊より上る之より高縄寺迄を三十町とし一町毎に石地藏を安置し道傍に櫻樹を栽ゑたり今多くは古木となりしも尚春陽美觀を極む此城は藤原純友が據りしことありと云ふ

難波村誌

沿革　本村は元庄、上難波、中通、下難波の四ヶ村なりしを明治二十三年町村制實施の際古來此地方を難波郷と稱せしより本村名とし前四箇村は大字として編制せり抑此難波郷なる名稱の起因を伊豫風早記等により調査するに當郷は往古風伯の郷と稱せしが爾後本郷庄村に於て難波庄司六郎頼存の居住せし傳記又難波次郎長浦等惠良城新城等を護り代々住居すとあり之によりて考ふれば始は或一部の名稱たりしも後これ等の因により遂に本郷名となりしものゝ如し

位置及境域　本村は松山市を距る四里半にして温泉郡の北に位す東は立岩村南は正岡村に界し西は立岩川を距てゝ北條町に隣り北は鴻の坂を以て淺海村に接せり

廣袤　東西壹里廿六町南北廣き所一里三町あり

面積　本村の総反別は七百町五段五畝十八歩五合五勺にして内譯左の如し

田	二百十町三段四畝一歩	畑	三十六町七段七畝十九歩七合五勺
宅地	十五町八段壹畝廿八歩	山林	四百十八町七段七畝廿七歩
雜種地	十八町八段四畝二歩		

海岸線　海岸は屈曲著しからず其延長一里十三町なりとす

岬角　本村の大字下難波に突出する岬を波妻の出崎と稱し長五十間幅二十間あり

潮汐潮流　潮汐滿干の差は二間半より三間に至る著しき潮流の所在は大字下難波海岸線の中央部にありて「ワカメシガ」鼻と稱し長さは波妻の出崎によりて明神が鼻に至る二町三十間幅三十間にして南北の

難波村誌

方向に流れ速度最も早く海溫十五度海底は砂地岩石一樣なり

地勢　本村は山脈東方高縄山系より鋸蟹として西北に進亘し西方波妻の鼻に滿く立岩川は北條町正岡村との境界をなし西流して海に注ぐ概して本村の地域は東北山を帶び前面の沃土は東西に亘りて傾斜せり

山誌　惠良山は本村の中央に聳へ東は立岩村北は淺海村を境し高さ百五十間周圍四十一町五十間東小惠良山西麓折山に連り樹木繁茂し登路は表裏二條ありて表道は難波より裏道は淺海村味栗より

す

燧石山は本村の東南に位し高さ四十間周圍八十間にして良石を產す腰折山は本村の西北にあり東惠良山に連り北淺海村に接す高百七間周圍九町五十間松樹繁茂せり

新城山は本村の西北にあり高百三間周圍五町四十間瘠地にして樹木生育せず全山赭土より成り其山頂に松樹あり山形美麗にして恰も富士に似たり

鴻の坂は本村の西北にあり直立六十間越智郡今治街道の要路なれども險阻なるを以て目下開鑿工事設計中なり

水誌　立岩川は高縄山に發源し東立岩村より出で正岡村北浜町の境を西流して海に入る長二十二町幅三十間瀦點等を產し漁獲多く灌漑に主要なるも水流の面積廣大なる爲め霖雨の候には溢流浸り堤防爲めに決潰し田面を害することを多し加之夏季中は架橋の便を欠くを以て交通を遮斷することあり故に一大架橋の計畫に傾注し居れり

楠谷池は本村大字上難波にあり所在地小字楠谷なるを以て名つく東西百三十間南北五十間深四間にして灌漑に用ゆ

寶福池は大字中通の小字寶福にあり依て名とす東西三十二間南北五十七間深八尺にして灌漑の用

おり

底口池は下難波小字底口にあり東西一町二十間南北一町十間深三間にして共に灌漑の用をなす

洞窟　本村大字庄の内小字奥の谷に深三間幅四尺五寸高六尺餘の洞窟あり三方とも花崗石にて疊み壯觀を呈す其由來詳かならず

氣候　氣候は最高溫度攝氏三十二度最低六度なり雨は夏秋に多く雪は其量少し五六月の候ヤウズ風と稱すべき暖風の西南方より吹來ることあり

地質　地殼の大部分は火成岩にして小部分に水成岩の堆積せるを見る

天產物　動物には魚類に泥鰌、鰻、鯉、鰌等多く植物は松を主とし運搬の良材あり腰折山の小燕子花は當地の高嶺に似たる小さき紫色の花を開く又稀には白きものあり頗る盆栽として愛すべく他に移植して生育せず

鑛物　は花崗石、石英等なり

區劃及政治　本村は四つの大字に區劃し村役場は大字中通の小字寶福にあり村會議員數十二名にして村是の調査あり今各大字の地積を擧ぐれば左の如し

庄	百十九町廿五歩	上難波	百六十町七反
下難波	百廿町一反十八歩	中通	百町六反七畝九歩

戶數　全村の戶數四百十七戶にして各大字別左の如し

庄	八十八戶	上難波	七十七戶
下難波	百五十七戶	中通	九十五戶

人口　人口の總數は二千百三十八人にして男千七十八人女千六十人內原籍民二千百四人寄留民三十四人なり

人情風俗〻本村民は樸訥實着にして華美に流れず言語野卑に失せず常に言行一致し慈愛心に篤き美風あり

人[illegible]禮法は概ね丁寧にて吉凶の場合殊に然り又隣保並に團結各組合の法嚴重にして喪祭共にし艱難相助くるの美風あり併し集會の時限客の招待等に時間の厲行せざる事又諸種の紀念飲食會等の風習の存せるは速に矯正改良を要する點なり

教育　學校としては明治六年一月廿六日本村の中央部中通を下し廢寺の家屋を利用して假校舍とし小學前期科を施設せり當時學生僅に七十餘名なりしも次第に其數を增し通學の不便校舍の狹隘を感するに至り大字中通小字寶福なる家屋を買入れ校舍とし移轉せり明治二十六年校舍新築の議起り今の難波尋常小學校を新築す通學區域は全四大字なり其中庄は明治二十三年以前迄岡校に通學せしが町村制の施行と共に本村區域に編入せり

夜學會　は難波村夜學會と稱す明治廿九年の創立にして爾後十ケ年繼續一日の如く毎年出席者を增し其効果顯著なり其他教育懇談會社會演說會等を開催し教育の發達を促せり

衛生　避病舍　は大字中通小字大泉にあり敷地百六十八坪建物百十八坪にして前面は立岩川の清流に臨み土地乾燥空氣清潔にして流通佳良なり衛生組合は四區に分ち各大字を以て一區とし衛潔法及傳染病豫防に勉む又毎年一回夏季を以て衛生講話會を開催し參聽勞を配布して一家一人必ず來聽せしむ

警察及裁判所　裁判所は松山區に屬し警察署は三津警察署に屬す駐在所は大字中通にあり

宗教　全村多く佛教を信じ信徒は只管祖先の歸依せし宗派を信じて異變なし信徒數を概算するに眞言宗三百六十一人曹洞宗九百五十人臨濟宗二百七十五人日蓮宗二百五十人真宗二百四十人黃檗宗六十人

[illegible]なお其他神道黑住信徒十數戸ありて各所に禮祭典を行ひ講座をなし斯道に務む然れども其數未だ少し

[illegible]

神社佛閣　春日社　は大字庄小字小坂にあり經津彦命武甕槌命富主命天兒屋根命にして祭日は毎年六月十五日なり創營興廢詳かならず

三島神社　は大字中通小字三島谷にあり藤難波郷一の宮にして聖武天皇の神龜五年八月廿三日伊豫全國百三郷へ三島の神を齋き祭り玉ふ勅詔ありし所の一なり其社殿は建武の昔北條の一族赤橋重時立烏帽子城に籠り國中を騷したる時敵を防ぐ爲に燒き拂はれたりと云傳ふ後再建あり祭神は大山津見雷高龗の三尊なり

貴布禰神社　は大字下難波小字西の谷内にあり神龜五年の創營にして水象能女神闇淤神國水分神の三座を山城の國愛宕郡より勸請す弘安九年九月當郡司越智宿禰益永等神殿を建營す

風伯神社　は鷲良山一名冠山に祭る所祭神は山北古比禮命（伊勢諸二尊を云ふ）大山津見命鹿屋比賣命三座級長津彦級長戸邊媛二座軻遇突智命一座合祀七座を祭る

最明寺　本尊は僧行基の作にして弘長元年北條時賴公の建立なり康應三年但馬國大明寺開山正禎大禪師當山を再建し相續し來るに法嗣中絶せり慶長八年和氣郡山越村南源禪師の再興せし以來法嗣は相續せり安永年三月出火の節堂舍燒失せり慶文化年三月再建す當寺に藏する貴物及由來左の如し

（一）正觀音木像　北條時賴公巡國の時の作佛なり一尺五寸の立像にして定朝の作なり

（二）非財天木像　齊子入扉に出五童子並に毘沙門天大黑天の密畫絹地附屬あり

（三）絹國織二色九條袈裟　當周　之は最明寺公關溪師と師弟の盟をなしたるときの寄贈品なり

と云ふ

春秋の候賽客頗る多し

十輪寺　は弘法山丹生院と號す眞言宗にして小本寺光德院の末なり古は紀州高野山金剛峰寺末なりしが中頃京都醍醐報恩寺末となれり

又延寶四年十月より當郷先德院末に屬すと云ふ本尊は毘沙門天王脇立不動明王愛染明王金比羅大神

[illegible]
同寺所屬の藥師堂は本尊藥師如來坐像一丈六尺の大佛行基律師の所作にして脇立藥師如來諸佛古作
咸壞敗其名稱不詳[illegible]
寶物に絹地雲龍圖一幅、狩野守信筆二幅對、雪舟筆全紙十二枚、弘法大師坐像厨子入、阿彌陀如
來厨子入坐像、巨勢金岡筆丹生明神の畫像等あり
陰暦三月十日と十月十日は緣日にして賽客殊に多し
大通寺　は安樂寺と號し貞和中勅諡正宗大曉禪師の開山する所なり昔日七堂伽藍にして塔中七坊有
之其廢礎石等于今存在す所謂好成庵正龍寺大智院慈光院庵智勝庵是光庵吉祥庵等の古蹟山內並に田
畑の字等に在存する也最前の開基者河野六郎遠江守通朝公也明應文龜の交亂叡寺塔中內衰廢す守脈
禪師加再造于今命相續也再開基者河野末裔久留島出雲守其子孫慶長の末豊後國森郷へ國替其後六七
度燒失由緒等悉く損失し尚爾後屢興廢し遂に延文元年三月河野遠州通朝中興開基後又來島氏再建の
古加藍也本尊大通智勝佛安置[illegible]並に豫州通宗島二禪寺所定置規式等なり
寶物に千手觀音行基律師作大曉禪師坐像其他古書畫數點
盆正月彼岸等賽客多し

交通　(一)道路　縣道は長三十二町幅三間半にして越智郡今治に至る本道なり里道は長三里三十九
間幅二間乃至四尺にして一定ならず立岩村に至る通路なり交通の狀況は縣道なる鴻の坂を除くの外
里道にして交通便利なり[illegible]
本村より官衙及村役場に至る方位里數左の如し

愛媛縣廳へ　東南　四里十七町　正岡村役場へ　正南　十五町
溫泉郡役所へ　東南　四里十五町　立岩村役場へ　正東　一里廿九町

北條町役場へ　西南　十九町　　淺海村役場へ　正北　一里五町
(二)橋梁　本村大字下難波縣道筋に大新開橋あり其他小橋あれども記するに足らず立岩川に
は僅に木造の一小橋を假架すれども河流漲るときは不通となり交通不便なり
(三)郵便電信　郵便は北條郵便局の管內に屬し毎日一度の集配なり電信も北條局の取扱なり

生業　(一)農業　本村は北に山を負ひ南に田面ありて光線溫度共に作物に適し土地肥沃にして收穫
多し其農產物の種類產額の重なるものは左の如し

稷	米　三千五百石	糯米	二百石
裸麥	二千石	大麥	二百石
小麥	六十石		

其他粟豆類の產額も多く柿、梨、蜜柑、梅、橙等の果實の收益も侮られず農事試驗場は難波尋常小學校
試作地を以て之に充つ反別二反歩內畑一畝歩にして果樹蔬菜米麥等を試作す
(二)林業　樹木の種類ははゝ松櫚樫杉を主なるものとし自然の繁殖に任せしが近來撰種栽培の
緒に就けり伐採の狀況は全伐と抽伐との二種ありて抽伐は四箇年乃至六箇年を一期とし薪料及建築
材料に使用するため馬背又は車等に積み廣島地方に販賣するため北條港に運搬す
(三)水產業　水產の種類は鯛鰯(イカナゴ)其他の雜魚にして網又は釣を以て捕獲し鰯又は(イ
カナゴ)は煎り或は干して三津ケ濱久万山廣島呉等の池方に販路を開き產額數百圓に至る其他採藻
の收穫あるも沿岸の農民自家用肥料となすに過ぎず
(四)商工業　商業は何れも箇人營業にして地方の需用を充たすに止まる、工業も同じく地方
の用を足すのみにして大工十人瓦工三戸を始めとし壘職鍛冶桶職あり婦女は麻に綿を紡出す其外河
原と稱する小字より草履草鞋繩を製す

附記　本村の特產物は大字下難波の腰折山に生する小燕子花及大字庄の燈石山に產する角石なり

財政　本村は農業を主とし其他は大浦と稱する小字に漁業に兼たるの外稍機業の行はるるに過ぎず故に未だ村經濟の度を高むるに至らず然るに生活の度は比較的高き感あり有爲のもの既に爰に注目する所にして將來は勤儉の修養に努め農事改良機業の奬勵並に農家副業の發達を企圖し居れり

以上税源は農産物に於ける穀物蔬菜山林より松其他少量の雜木又は漁業機業工藝及少數の商業等あり

淺海村誌

浴草　本村は元淺海本谷淺海原の二ケ村なりしも明治二十三年町村制施行に際し本村名を淺海村と稱するに至れり抑此名稱の起因を調査するに古來の事跡遡しては考ふべからざるなり

位置及境域　本村は松山市を距る五里にして本郡内の極北にあり東は越智郡菊間村字田の尻字西山に南は難波村に界し西北は齋灘に面す

廣袤　東西三十町南北三十四町あり

面積　本村の地積惣段別は三百九十六町八畝歩にして其内譯左の如し

田	七十町四段八畝二十九歩	畑	三十一町九段三畝十三歩
宅地	七町四段六畝十七歩	山林	貳百七十九町三段歩
池沼	六反壹畝壹歩	雜種地	七段歩

海岸線　延長一千六百三十間にして屈曲少なし

潮汐　潮汐滿干の差は三間なり

潮流　著しき潮流の所在は本村海岸線の中央部に在りて北方千羽が岳より南方立磯が鼻に至る長三十四町九十四間幅四十間にして西北の方向に流れ速度最も速し

地勢　本村の山脈は東南高縄山系より蜿蜒二派に分れ一は西し一は北に連亘して千羽が岳に盡く本村の高地は東南山を帶び前面の沃土は南北に亘りて傾斜せり

山誌　惠良山は　本村の南方に聳へ東は立岩村南は難波村に界し高百五十間周圍四十一町五十間小惠良山及西腰折山に連り樹木繁茂す登路は二條ありて表道と稱するものは難波村大字上難波よりし裏道は本村字味栗よりす土質は火成岩なり

名石山　は本村の東部に位し東は越智郡菊間村大字西山に境し南は立岩村大字荻原に接せり高百二十間周圍十一町二十五間余松樹繁茂せり土質は火成岩なり此山は形美麗にして富士山に似たり

腰折山　は本村の西南にありて東惠良山に連り南難波村に接す高百七間周圍九町五十間松樹繁茂せり土質は火成岩なり

鴻の坂　は本村の西南に在りて直立六十間松山今治間の要路なるが險阻なるを以て目下開鑿工事の設計中なり

窓坂　は本村の東部にありて直立六十間余道路は甚險阻なるを以て車の通行甚不便なり通行人は大抵此坂道を避け海岸なる千羽が岳の下海濱を通行せり故に目下海岸通へ縣道開鑿工事をなさんとて測量中なり

水誌　河流の最も大なるものなけれども通谷川及大久保川は北流して海に入る

池は本村の谷間至る所あらざる所なし其中最も大なるものは長八十間余幅六十間ありて一つは大字淺海原の南部にあり一は大字淺海本谷の東部にあり灌漑に用ふ二つながら暑中旱魃の憂なし

氣候　氣候は最高温度攝氏三十二度最低六度なり雨は夏秋に多く雪は其量少なし地方特徴の氣象と稱す

淺海村誌

べきものは五六月の交「ヤウズ」風と稱する西南の暖風吹き來ることあるのみ

地質　地殼の大部分は火成岩にして小部分は水成岩の推積せるを見る土壤は茶褐色の粘土質なり

天産物及其分布　特に記すべきものなし只腰折山の小燕子花は當地の特産にして花菖蒲に似て色は紫薄紫又稀には白きあり四五月の頃花咲きて愛すべし他に移植するも生育せず

區劃及政治　本村は二大字に區劃せり而して各大字の地積左の如し

淺海本谷　百六十九町八畝貳拾貳歩

淺海原　貳百貳拾六町九段九畝八歩

村役場は大字淺海原に在り村會議員の數は八名なり

戸數　全村の戸數二百四十二戸にして其大字別左の如し

淺海本谷　百四戸　淺海原　百四十五戸

人口　人口の惣數は千四百三十六人にして本籍民は千百五十四人男五百八十三人女五百七十一人寄留民は二百八十二人男百四十人女百四十二人なりとす

本村に移住民なし寄留民の原籍は越智郡多數にして商工業者多し其由來する所は地方交通の便多きに依る

人情風俗　本村民の氣質及言語は實著にして華美に流れず言語野卑に失せず常に言行一致し慈愛心篤き所の美風ありと雖も小部分に至りては疎野卑劣にして言語修まらざるものあるは遺憾とする所なり齋慣を墨守し容易に改めざる弊風ありと雖も近來社會の風潮に依り一般に改善發達の傾向あるは大に喜ぶべき事なり禮法は概して丁寧にて婚禮祝儀葬儀等殊に然り又隣保は互に團結し各組合の法嚴重にして吉凶喜憂を共にし緩急相助くるの美風あり又御籠りと稱するものあり各部落毎に於て春秋の二季老幼男女各所在の神社に集り各辨當を携へ開厨酒を飲むの風あり

教育　學校は淺海尋常小學校と稱して大字淺海原の中央にあり目下學齢兒童增加せしを以て校舍狹隘を感するに至り近々新築を爲すの計畫中なり現今學齢兒童數二百四十四人中不就學者は不具盲啞者等僅に三人あるのみ而して通學區域は本村一圓なり

夜學會は淺海村夜學會と稱し明治三十年創立し爾後九ヶ年繼續し出席者多く且効果顯著なり

衛生　避病舍は本村大字淺海原と淺海本谷との境にあり衛生組合は本村大字二區に別ち各區に正副組長各一名を置き委員一名乃至二名之を輔佐し衛生上の事務を掌理す種痘は春秋二季に定期に之を行ひ尙臨時に施行することあり清潔法は毎年春秋二回大清潔法を勵行し綿密なる消毒法をなし流行病發生に際しては臨時に嚴密なる清潔法を施行す

警察及裁判所　裁判所は松山區裁判所警察署は三津警察署に屬し巡査駐在所は字淺海原の中央に設置せり

宗教　宗教は眞言曹洞臨濟日蓮眞宗黃檗の各宗にして其盛衰の狀況は差したる相違なく信徒は只管祖先の歸依宗派を信じて異變なし

神社佛閣　葛城神社は淺海本谷に在り祭神は味鋤高彦根命一事主命事代主命にして祭日は毎年十月廿五日六日なり明見社は淺海原に在りて祭神は國常立命天恩兼命猿田彦命なり祭日は毎年十一月一日にして甚賑はし

各種團体　日本赤十字社員八十一人愛國婦人會員十六人海員救濟會員十二人にして各員何れも會費を滯納する等の事なく能く各會の趣旨を守れり明治三十九年一月七日日本赤十字社より博愛旗を受領せり

交通　(イ)道路　縣道は長七十一町八間にして松山より今治に至る本道なり里道は長二千百八十四間余にして立岩村に至る通路なり縣道なる窓坂及び鴻の坂を除くの外は里道なれど概して交通便利ならず

本村より官衙及村役場に至る方位及里程左の如し

淺海村誌

縣廳及溫泉郡役所へ　南　六里　北條町役場へ　仝　壹里
東南　一里三十町　雜波村役場へ　南　一里五町二十間
立岩村役場へ

（ロ）橋梁　本村縣道筋に於て小なる石造木造土橋等數多あれども記載に足るものなし

（ハ）郵便電信　北條郵便局の區内に屬し郵便は毎日二度の集配なり

生業　（イ）農業　農產物の主なるものは米麥にして其產額米は千三百三十九石八斗五升四合にして麥は四百五十五石なり其他は少量の雜穀果實蔬菜等にして多くは廣島吳音戸三津濱松山地方等に販賣せらる

（ロ）林業　樹木の種類は松櫻櫻杉等を主とし從前は凡て自然の繁殖に任せしが近來撰種栽培の端緒につけり薪料及建築材料に使用する爲廣嶋吳等に販賣せらる

（ハ）水產　水產物の種類は鯛、鮗子、鰯其他雜魚にして三津濱久万山廣嶋吳等の地方へ販賣す其收益數百圓に至る其他採藻の收穫あるも沿岸の農民自家用の肥料に過ぎず

（ニ）商業　商業は日用の必需品を販賣するに過ぎず

（ホ）工業　瓦製造業者九戸ありて一年の產額二十万を下らず地方並に廣嶋地方に販賣す

右の外小字京が濱と稱する所より婦人の業として草履草鞋及繩等を製出す其額少なからず

財政　本村經濟の一般　農業を主とし其他瓦製造業漁業及稍々機業の行はるゝに過ぎず然れども未だ村經濟の度を高むるといふ程の事におらず然るに收入に對する生活の度は比較的高き感あり有爲の士已に注目する所にして將來は勤儉の修養に努め農事の改良機業の奬勵並に農家副業の發達を企圖するの目的たり

稅源　は農產物蔬菜山林より松を主とし其他小量の雜木にて材木薪又は漁業瓦製造業機業工業及少數の商業等なり

各種納稅高　は國稅六千百五十六圓八錢七厘縣稅九百二十五圓五十錢村稅千二百四十七圓七錢なり

各種有權者數　は衆議員議員撰舉權を有するもの十二人被撰舉權を有するもの三十九人縣會議員撰舉權を有する者十二人被撰舉權を有する者七十六人村會議員撰舉權を有する者十二人被撰舉權を有するもの七十六人にして所得納稅者は七人なり

貯金は基本財產金百九十一圓學校生徒貯金三十二圓二十錢なり

睦野村誌

沿革　本村は睦月野忽那の二大字よりなる共に元睦月村野忽那村として舊幕の時睦月は大洲領にして野忽那は松山領なり後風早郡に屬せしが明治廿三年町村制實施の際合併し兩村の頭字を取り睦野村と稱せり而して各大字名の起因を尋ぬるに睦月は本島當田八幡神社所藏の舊記に日本武尊の妃三女を產み給ひしに尊之を怪み空舟を作つて之を放棄す其女の穉裸本島に漂著す因て穉裸島と名つくと云ふ又一說には河野の殘臣長曾我部氏の兵に襲はれ本島に逃げ來る時恰も月なく爲に逃るゝことを得たり後其子孫此地に永住し無月島と稱せりといふ其後某醫師ありて無月を睦月と改稱するの當れりと睦月と稱するに至りしといふ大字野忽那は文政年間大火の爲殆燒失せしを以て參照すへき書類なく詳なるを得ざるも貞享年間より漁業盛にして自ら一部落を爲す當大字名の詳ならずと雖も古來中島を忽那島と稱するにより其近傍に位するを以て野忽那と稱するならんか

位置及境域　本村は本郡の西北部に位し興居島の北安居島の南北條町の西中島の東にあり海を隔つること八町にして東に野忽那西に睦月あり形狀睦月は何れの方にも延びず略三角形をなし野忽那は東西狹く南北に長くして北端半島をなせり

睦野村誌

廣袤　睦月島は東西一里十八町南北十二町にして周圍二里十四町あり野忽那島は東西四町南北十五町にして周圍一里あり

面積　總面積三百三十二町三畝廿九歩にして其内譯左の如し

田	十町二反二畝十三歩	畑	八十八町六反五畝一歩
宅地	五町五反二畝十四歩	雜種地	二百二十七町六反三畝二十一歩

海岸線　睦月島は三里野忽那島は一里十八町にして屈曲出入甚多し

港灣　睦月灣は交通碇泊の便あり灣入八町深さ五尋より五十尋あり野忽那港は全島の碇泊所にして灣入八町余あり

島嶼附岩礁　芋子島は面積三反三畝十歩ありて東西三十間南北三十間ありて睦月島に屬す田島は面積一町三畝十歩東西二十間南北八十間海岸線六町ありて野忽那島に屬す

岩礁あみたぶ　は島の西岸高須の濱を去ること西へ三十五間の所にあり東西二十間南北十間面積六畝歩にして海岸線六十間あり

海峽　瀬本海峽は長二十間幅五町あり潮流最急にして航海困難なり野忽那芋子海峽は長二十五町幅十五町あり是亦潮流急にして航海困難なり

岬角　睦月には白岩の鼻梅の子の鼻甫崎瀬本の鼻等あり白岩の鼻は北へ突出五十間幅三間あり梅の子の鼻は東へ突出四町にして幅三十間あり甫崎は南へ突出五町幅二十五間あり瀬本の鼻は西へ突出五十間にして幅三間あり

野忽那には岬角三ヶ所あり本島の南部にあるを牛口崎と稱し長六十間幅十二間あり西部にあるを横引崎と稱し長二町幅一町あり北端にあるを鳳山崎と稱し長四町幅二町あり

潮汐　滿潮干潮の昇降の差は二間なり

潮流　睦月に甫崎の潮流あり幅二町にして南北の方向に流る野忽那の南端には半の口と稱するあり幅員南北八町東西十五町にして東西の方向に流る

地勢　睦月は北部高地にして東北西に山を負ひ其中田畑ありて南海濱に人家沿ふ野忽那は南部は高地にして北部低く共に人家田畑あり

山誌　睦月には高松山東北に屹立し高七百尺赤土砂よりなり松樹繁茂せり下奴が峰は西北に屹立し高七百二十尺にして砂土よりなり松樹繁生す野忽那の「れいらん」山は本島の南部に位し高四百尺全山め土質は砂土よりなる樹木なし

水誌　堂免池は睦月島の中央部の高地にありて長幅三十間深一丈二尺あり人工にして數百年の昔築しものにして田面の大部分は之れによりて灌漑を受く野忽那には池三ヶあり何れも灌漑に用ふ一は長二十五間幅二十間一は長廿二間幅十五間一は長廿七間幅二十間あり深さは一丈乃至一丈六尺あり

氣候　溫暖にして風雪少なく冬季に至り北風多し溫度は最高三十七度最低二度なり

地質　火成岩にして主成分は砂土石灰土等なり

天産物及其分布　大字睦月より石灰石を產出す

區劃及政治　本村は二大字に區劃し村役場は大字睦月にあり村會議員の數は十二名なり

戶數　全村の戶數は四百三十二戶にして其内譯左の如し

睦月	二百三十一戶	野忽那	二百一戶

人口　人口の惣數は二千四百三人にして内男千百九十三人女千二百十人なり内寄留民は六十八人にして其大部分は温泉郡西垣生村より綿染業を主として來る又本村よりは米國及布哇等へ出稼せるもの三十五人あり

人情俗　大字睦月は氣質は純朴なりしが近來他地方へ商業の爲出つるもの多く隨而快活となり社交に長

睦野村誌

し言語も一變せり隨て普通禮法も漸々見るべき所あり近來衣食住も驕奢に傾けり然れども平素の食物は粗食なり大字野忽那は氣質輕卒にして義俠心乏しく公德及貯蓄心乏しと雖も概して淡泊にして好邪の念なし言語は粗野にして禮なく女子は男子よりも一層喧噪なり方言訛音亦尠なからず

教育　睦月には睦月尋常小學校あり抑全校は明治八年の創立にして當時は民家を以て校舍に充て睦月學校と稱し明治十年海岸に校舍を新築せしに全十七年八月暴風の爲め流失す全廿四年四月新築を爲し睦月簡易小學校と稱し全廿五年十月睦月尋常小學校と改稱す全三十四年七月今の校舍を新築せり尚三十五年五月より商業補習學校を附設し爾來年々共に生徒增加す野忽那には明治廿年四月簡易小學校を設き全廿五年十月尋常小學校に改め全三十四年五月補習科を加設す其他學會等なし

衛生　睦月には南方の山間に避病舍あり又衛生組合ありて傳染病豫防法を實施せらるゝも未公衆衛生を重んずるの風乏しく不潔なる處あるを免れず野忽那には避病舍の設あり衛生組合浙瀉法傳染病豫防法等の設けありと雖も是亦不潔なる處多し

警察署　三津警察署の管轄に屬し大字睦月に巡査駐在所あり

宗教　眞言宗大部を占め一小部分に眞宗あり近來天理教を信ずる者あれども之を算すれは十中の八九は眞言宗にして眞宗及天理教は其一部分に過きず

神社佛閣　睦月には當出八幡宮及玉善寺あれども社寺共天正の頃全村火災に罹り舊記燒失せり隨て創營沿革由來等詳なる所なし又本島には佛閣なく只東中島村眞言宗眞福寺と稱する檀寺に佛事葬儀を執行するのみ

交通　海中の孤島なれは道路として記すへきものなし

本村より官衙及隣村々役場への方位及巨離左の如し

縣廳へ　南東　四里三十一町　溫泉郡役所へ　仝　四里二十九町

東中島村役場へ　西北　一里二十五町　興居島村役場へ　南　二里二十五町

航路　主なる目的地は三津濱にして毎日一回渡海船を出す其他は時に臨み臨時に航海するのみ

郵便電信　大浦郵便局の區内にして一日二回の集配あるのみ而り風雨烈しき日は郵便船の來らざること屢々あり

生業　**農業**　睦月に於ける主要なる農產物の種類は米麥甘藷等にして其產額左の如し

米	三百五石	麥	七百九十二石
甘藷	二十八万貫		

野忽那の農產物の主なるものは甘藷にして產額凡五万貫なり概ね島民の常食とす麥は凡そ四百四十五石を產し是又島民の食料とす米の如きは產額僅少なり

林業　樹木は多く松にして自然の繁殖に任す用途は伐採して薪となし三津廣島地方に販賣す

牧畜　牧畜は牛にして其賣買は伯樂の手に於てせられ神戸大阪地方へ輸送す

水產　水產の主なるものは鯛にして捕獲四千九百十四石あり多く養干及「ボンカ」として三津濱町に販賣す又野忽那にては鯛の漁獲一万貫を下らず其販路は三津廣島大阪等なり其他雜魚の收利も亦尠からず

商業　紙賣業者二百人以上あり手船にて諸縣に渡航し賣却す其賣上高三万圓を下らず

工業　各家婦女子の內職として前項賣却高に對する機業に從事す

礦業　睦月には石灰石を產す石灰に製造して山口兵庫縣等に販賣す其產額四十万貫にして金高五千六百圓なり

財政　睦月の稅源は農商にありて特殊の富源とすべきは紙の製造販賣にあり各種納稅高は三千五百九十八圓餘なり學童の貯金は其額六十有餘圓あり野忽那は經濟豐富ならず稅源は海魚農產物にありて特殊の富源なし各種納稅高左の如し